



TITLE:

アフガニスタンにおけるハラジュ の王國

AUTHOR(S):

稲葉, 穰

CITATION:

稲葉, 穰. アフガニスタンにおけるハラジュの王國. 東方學報 2004, 76: 313-382

ISSUE DATE:

2004-03-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/66873>

RIGHT:

アフガニスタンにおけるハラジュの王國†

稲 葉 穰

目次

- I はじめに——東部アフガニスタンのテュルクの王國——
- II 訶達羅支, 葛達羅支, xaralāča
 - 1. 新唐書謝颺國傳
 - 2. 訶達羅支, 葛達羅支, 葛羅達支, 葛羅支
 - 3. hitivira xaralāča
- III ハラジュの王國と唐
 - 1. 阿史那賀魯の亂
 - 2. 安西都護府と十六國
 - 3. 王名遠と訶達羅支
- IV ハラジュの來た道
 - 1. ヒンドゥークシュ南側の突厥
 - 2. ハラジュの移動経路
 - 3. 弗栗特薩嚨那=Wujiristān とハラジュ
- V ハラジュの移動時期
 - 1. ハラジュとエフタル・突厥
 - 2. 西突厥のトハリスターン支配の様相
 - 3. ハラジュの起源説話
 - 4. ハラジュの孤立
 - 5. Nezak Šāh とエフタル・突厥
- VI ハラジュの王國の形成
 - 1. 「顯慶時謂訶達羅支」
 - 2. 「武后改今號」
 - (1) rtbyl の自立
 - (2) rtbyl, カーブルシャー, ムスリム
- VII イスラーム時代のハラジュ
 - 1. 9-13 世紀のハラジュ
 - 2. ハラジュの擴散: ゴール朝とハラジュ
 - (1) 西方のハラジュ
 - (2) インドのハラジュ
- VIII おわりに——その後のハラジュとGilzai——

† 本論文執筆にあたっては、特に桑山正進、吉田豊、Antonello Palumbo の三氏から多くの貴重な示唆と教示を受けた。一々注記をしていなくとも、三氏との對話、議論を参考にしたところは数多い。冒頭に銘記し、謝意を表する。

I は じ め に

——東部アフガニスタンのテュルクの王國——

1990年代前半、内戦の続くアフガニスタン北部から大量のバクトリア語文書が発見された。ほぼ同じ頃 Surkh Kotal に近い Rabatak の地で発見されたバクトリア語碑文、Bāmiyān 北部の洞窟から発見された大量の佛教寫本 (Cf. 松田 2003) とあわせ、これらの新発見史料が、我々のアフガニスタン古代史・宗教史・社會史に関する知見を飛躍的に増大させてくれるであろうことは疑いがない。2000年には N. Sims-Williams によってバクトリア語文書の一部のテキストと翻譯が出版され (Sims-Williams 2000)、更なる研究の進展が促されることになった。

これらの新発見がなされる直前、筆者は當時利用できた材料を用いて、西暦7-8世紀の東部アフガニスタン、特に現在のĠazniを中心とする Zābulistān 地域の歴史に関する論考を発表した (稻葉 1991)。それは、Kāpiśi~Gandhāra 地域の歴史考古學に関する桑山正進の畫期的な研究 (桑山 1990) に觸發され、アラビア語、ベルシア語資料をも用い、桑山によって示された枠組みを通してカーピシーに隣接する地域であるザーブリスターンの歴史を再構成しようとしたものであった。桑山及び筆者によって提示された当該地域の7-8世紀に関する歴史的枠組みとは大要以下のようなものである。

西暦6世紀後半、Tuxāristān 地域 (かつての Bactria) におけるエフタルの支配が突厥によって崩壊せしめられたことは、トハーリスターンのみならず、エフタルの支配下にあったガンダーラおよび、それに隣接するカーピシー地域の歴史に大きな影響を及ぼした。カーピシーには Xiṅgal 朝 (あるいは貨幣の銘にちなんで Nezak 朝とも言う) が成立し、大都城たる現在の Begram に據って Kābul 川流域を支配した。7世紀前半、玄奘三藏が訪れたときのカーピシー王はこの系統の者だった。しかし7世紀半ば以降、南方 Sistān にまで到達したアラブ・ムスリムが更なる北進を圖りはじめ、それに對する防衛の必要からカーピシーの南側カーブル地域の重要性が高まる。カーブルに根據を置いてカーピシー王に仕えながら力を伸ばしたのは、かつて玄奘が記録した弗栗特薩憐那の突厥勢力で、彼らは間もなく自立し、やがてはかつてのヒンガル朝の領域全體を支配下におさめるまでになった。これがカーブルの Turk Šāh 朝と呼ばれるものである。

西暦の680年代、カーブルにおける王位繼承問題に起因して、王子の一人が南方ザーブリスターンに逃れ、そこで自立して王となった。このザーブリスターンの新たな支配者は、アラビア語、ベルシア語資料に *rtbyl* という稱號を持つ王として記録される。從來の通説では *rtbyl* という読みは誤りで正しくは *znbyl* と讀まれるべきであり、それは當時この地域において盛んであった Zhūn 神 (玄奘の「穠那天神」) への信仰と深い関わりをもつ稱號であるとされていたが、上述の如き王國支配層のテュルク的環境から見て、この稱號は

テュルクの稱號 *iltäber* が轉訛あるいは誤寫されたものである。このように、カーブルとザーブリスターンの王家は同じテュルクの家系から出た本家と分家のようなものであり、両者はその後約二世紀の間、東部アフガニスタンおよび北インド進出をはかるムスリムに對して、大きな障壁として立ちはだかり續けた。

以上の論はしかしながら、未解決の問題を幾つか含むものでもあった。それらは大別すると以下の三つにまとめることができる。

第一は、いわゆる *Nezak Šāh* 貨幣の問題である。1967 年、貨幣學者 Robert Göbl は畢生の大作 *Documente zur Geschichte der iranischen Hunnen in Baktrien und Indien* を出版し、19 世紀以來蓄積されてきたこの地域に関する貨幣研究の成果を総合すると同時に、以後の貨幣研究の壯大なる基盤を準備した。ゲブルのこの著書の中には、ヒンドゥークシュ山脈の南側で多數發見される、*npki MLK'* (あるいは *nspki MLK'*) というパフラヴィーの銘文を持つ一群の貨幣が收録されている。この貨幣の編年については様々な議論があり、また銘文の讀みについては、Janos Harmatta(1969:406-9)と Richard N. Frye(1974) によってその前半部分が *nyčky* < *Nezak* と改訂された。ゲブル自身はこれらの貨幣を二つのグループに分類し、一つを 5 世紀中葉以降に始まるザーブリスターンの造幣と見、もう一つを 6 世紀以降のカーブルの造幣と考えた (Göbl 1967-ii:71-89)。しかしゲブルの想定する 6 世紀以降のヒンドゥークシュ南側の歴史は、上述の枠組みとはかなり異なるものであり (Grenet 2002:205)、既知の貨幣がこの新たな枠組みとどのように整合するかが問われねばならなかった。桑山はこの問題に取り組み、『隋書』漕國傳の傳える國王の牛頭冠に對應する貨幣のモチーフを手がかりに、これらの貨幣群を 6 世紀半ばから 8 世紀前半にかけてカーピシー、カーブル、ザーブリスターンに興った王國のそれぞれに割り付け、漢語資料の内容と貨幣に對應關係をつけるという大きな貢獻をなした (桑山 1993)。この點については第五章においてあらためて述べる。

第二は、玄奘が報告する穠那 = *Šunā* 神、すなわち *Zhūn* 神信仰の在り方と、その神殿がカーピシーからザーブリスターンの南へと移動したという傳承に關わる問題である。*Zhūn* という神格がどのようなものであったのかは、これまでも様々に議論されてきた。たとえば J. Marquart はそれをバラモン = ヒンドゥー教の神格 (おそらく太陽神) に由來するものと考え (Marquart & de Groot 1915:285, 288)、G. Tucci はこれを *Śiva* 神とし (Tucci 1963)、G. Scarcia はイランの英雄叙事詩の傳統と結びつけ、同時に *Kāfiristān* の神格 *Šarwa* (< *Śiva*) との關連も示唆した (Scarcia 1965)。また上述のバクトリア語文書は、7 世紀にヒンドゥークシュの北側でこの神格が信仰されていたことを示している (Sims-Williams 1997:19)。これらの事實を勘案しつつ、佛教、ヒンドゥー教以外の多様な信仰の形態についての総合的検討が待たれる。なにより、ザーブリスターン南界に移動

した新たな Zhūn 神殿がどこにあったのか、候補となる遺跡の調査が待望される⁽¹⁾。一方、玄奘の伝える傳承は實は考古學的に對應しそうな事實を持つ。すなわちカーブル北方の Xayr Xāna 遺跡の發掘調査は、同遺跡が上下に重なった二つの異なる神殿址からなることを明らかにした。桑山 (1982; 1990: 297-308) は、この上下の神殿のうち、下層神殿を新來集團に逐われてザーブリスターンに移動した Zhūn 教團のそれに、上層神殿を新たに到來した Surya 神を奉ずる集團のそれに同定し、文獻資料と考古學的事實を見事に結びつけた。しかし桑山によって、『隋書』に盛られた情報の下限である 606 年と、玄奘往訪の年次である 629 年の間に割り付けられたこの事件が、上で述べた歴史的枠組みとどう適合するのかという点については不明なままであった。これについて桑山は最近、新來のスーリヤ信仰を持つ集團を、弗栗恃薩憐那からカーブルにやって來たテュルクに同定し、テュルクのカーブルへの進出時期を 7 世紀初頭に置くという假説を提示している (桑山 2001: 141-4)。この問題については第六章第一節で觸れる。

第三は、このテュルクがそもそもどこからやって來た何者であったのか、という問題である。本論において詳しく述べるように、バクトリア語文書の發見といくつかの考古學調査の報告、およびそれらに基づく研究はこれらのテュルクの候補として、遅くとも 10 世紀にはアフガニスタン東南部にいたことが確實な、Xalaj と呼ばれるテュルク族を指し示しつつある⁽²⁾。この同定を詳しく檢證することが本論の第一の目的である。ただし、7-8 世紀のヒンドークシュ南側におけるテュルクをハラジュと結びつけるというアイディア自体は以前からあった。すなわち L. Petech (1964: 293-4) はカーブルとザーブリスターンのテュルクの起源をハラジュではないかと推定し、漢語史料に見える「訶達羅支」「葛達羅支」に言及する。また A. Rehman (1988: 37-45) は、マルクヴァルト (1901:

(1) トウッチは、ガズニの西南 Čakar 地方の Haft Āsiyā 村にある Šah Mār (蛇の王) と呼ばれるマウンドをこれにあてようとし (Tucci 1963: 167-8)、一方スカルチアはこれを Girišk の北、Mūsā Qal'a に近い Deh-i Zūr 村にある Kāfir Qal'a と呼ばれるマウンドにあてようとしている (Scarcia & Taddei 1973: 93; cf. Ball 1982-ii: 550)。しかしながら、兩地ともその後の調査が行われておらず、Zhūn 神に關係しそうないかなる發見物も報告されていない。

(2) 例えば Sims-Williams 2002; Lee & Sims-Williams 2003 参照。後者の論文は 1996 年にその存在が報告された、バーミヤーン西方、Hazarajat 地方の Tang-i Safedak にある佛塔から發見されたバクトリア語碑文に関する報告である。バクトリア語碑文を解讀したシムズ=ウィリアムスは、この碑文が、西暦 724 年にザーブリスターンの王によってこの佛塔が建立されたことを告げていると推測しているが、その際、やはり 8 世紀のカーブル、ザーブリスターンの支配者がハラジュであったとの認識に立っている。ただし、この佛塔の建設者に關する彼の推測が的を射ているかどうかについては、2003 年に Tang-i Safedak の北西 20 km ほどの Keligan 村近郊で發見され、佛教寺院址の可能性を持つ遺跡の存在を考慮しつつ、ハザージャート地域の歴史地理について再検討する中で、今後檢證していかなければならないだろう。

251-3)に引かれる種々の材料を用いて、カーブル、ザーブリスターンのテュルクをハラジュと結びつけようとする⁽³⁾。ペテクやラフマンの説は魅力的ではあるが、残念ながら十分な考證を経たものとは言い難い。すなわち、ペテクは漢語史料とアラビア語・ペルシア語史料の比較対象を網羅的に行っておらず、またラフマンは漢語史料に見える種々のデータを視野におさめていないのである。しかし最近、吉田豊は「訶達羅支」「葛達羅支」と、

Nezak Šāh 貨幣の銘 *xaralāča* (第二章参照) を関連づけ、それを、*xalaj* という單語がインド語化されたものと考えを提案した (Yoshida 2003)。バクトリア語文書の事例をも視野にいれつつ提案された吉田の假説を手がかりに、7-9世紀のヒンドゥークシュ南側のテュルクの存在とその由來、およびその後の歴史について以下検討する。

II. 訶達羅支, 葛達羅支, *xaralāča*

1. 『新唐書』謝颺國傳

本章ではまず、「訶達羅支」「葛達羅支」等の漢語史料に現れる語と、貨幣の銘にみえる *xaralāča* の関係について検討する。そのための手がかりとして、『新唐書』卷221下謝颺國傳の以下のような記事を取りあげる。

「謝颺は吐火羅の西南にあり、もとは漕矩吒といい、あるいは漕矩と言ったが、顯慶年間に訶達羅支といい、武後の時に今の呼び名(謝颺)に改めた。東は罽賓と、東北は帆延(バーミヤーン)と、それぞれ四百里離れている。南は婆羅門(インド)、西は波斯(ペルシア)、北は護時健(ゲーズガーン)である。その王は鶴悉那城に住んでいる。その地は七千里ある。また阿婆你城に居ることもある。鬱金瞿草が多く、泉の水で田を潤している。國の中に突厥、罽賓、吐火羅の者が雜居している。罽賓はこの國の子弟をやとって兵力を保ち、大食を防いでいる。景雲の初年(710年)に使者を送って朝貢してきた。その後、遂に罽賓に臣從した。開元八年(720年)、天子は葛達羅支頡利發誓屈爾を冊して王とした。天寶年間に至るまで何度か朝獻してきた。」⁽⁴⁾

(3) ただし、ラフマンは Ibn Xallikān の人名辭典 *Wafāyat al-A'yān* (13世紀後半) の Ya'qūb b. al-Layṭ の條に見える「Sijistān の境域にはテュルクがおり、彼らの王は *rtbyl* だった。この部族は درارى のテュルクと呼ばれる」という記述 (WA-vi: 403) にみえる درارى をマルクヴァルトにならって داوری , すなわち「Dāwar 地方の」と読み替え、彼らが Zamin Dāwar からガンダーラ方面に移住し、そこから勢力を伸ばしてカーブルで王權を握ったと考えている。この考えが不適當なことについては、稻葉 1991: 56, n. 2 を参照。

(4) 謝颺居吐火羅西南，本日漕矩吒，或曰漕矩，顯慶時謂訶達羅支，武后改今號。東距罽賓，東北帆延，皆四百里。南婆羅門，西波斯，北護時健。其王居鶴悉那城，地七千里。亦治阿婆你城。多鬱金瞿草。濱泉灌田。國中有突厥，罽賓，吐火羅種人雜居。罽賓取其子弟，持兵以禦大食。↗

ここではザープリスターンの唐代の呼稱として、「漕矩吒（漕矩）」「訶達羅支」「謝闕」の三つがあげられている。ザープリスターンに関する漢語の呼稱については既に吉田による詳しい分析がある（『慧超傳』：135-9）。それによれば上記三つのうち、「漕矩吒」と「謝闕」は、「阜利」（『續高僧傳』卷4/大正藏50：453c）、「謝越」（『慧琳音義』卷100/大正藏54：927c）、「闍烏茶娑他那」（『玄應音義』卷18/高麗藏32：244a）などとともに、*(d)zāul < Zābul という音をあらわしたものである。一方「訶達羅支 (*ha dat la tciē)」⁽⁵⁾ は、上掲『新唐書』の記事の後半にあらわれる「葛達羅支 (*kat dat la tciē)」あるいは『舊唐書』に見える「葛羅達支 (*kat la dat cie)」とともに、それとは全く系統が異なる名稱である。それらが一體何を意味するのかという点については、「訶達羅支」を「達羅訶支」の誤りと見て、イスラーム史料、特に9-10世紀に書かれた地理書において、アフガニスタン南部、Qandahār 近邊を示す地名として現れる al-Ruxūd < al-Ruxxaj にあてる É.Chavannes の説（1969：160, n. 4）、これをハラジュにあてようとする前述のベテクの説（ただし根拠は示されていない）、そして「訶達羅支」と「葛達羅支/葛羅達支」を別のものと見、前者を地名、後者をテュルク系の稱號 *Qaratači の音寫とする桑山の説（1990：253-4）などが示されてきた。

2. 訶達羅支、葛達羅支、葛羅達支、葛羅支

この問題を考えるにあたって、先ず他の史料におけるこれらの語の用例を見ておこう。最初に「訶達羅支」であるが、『資治通鑑』卷200および、胡三省の注には次のようにある。

「六月，癸未，吐火羅，嚙唃，罽賓，波斯等の十六國に都督府八，州七十六を置いた。

罽賓は隋代の漕國であり、葱嶺の南にあって、長安から一萬二千里離れている。四國と訶達羅支國，解蘇國，骨咄施國，帆延國，石汗那國，護時健國，怛沒國，烏拉喝國，多勒建國，俱蜜國，護蜜多國，久越特健國，で十六である。（略）」⁽⁶⁾

これは龍朔元年（661年）に、安西都護府の下、西域十六國を再編成した際の記事であるが、同じことを述べた『唐會要』卷73には

景雲初，遣使朝貢。後遂臣罽賓。開元八年，天子册葛達羅支頡利發誓屈爾，爲王。至天寶中，數朝獻。（標點本 6253-4）

- (5) 本稿では参考に資するため、必要な場合漢字表記の後ろにその中古音での發音を附している。ただし周知の如く中古音は6世紀頃の讀書音に過ぎず、本稿が扱う時代の實際の發音を正しく寫すものではないことに留意されたい。なお、中古音表記については李 & 周（1999）に従った。
- (6) 六月，癸未，以吐火羅，嚙唃，罽賓，波斯等十六國 罽賓，隋漕國也，居葱嶺南，距長安萬二千里而贏。四國及訶達羅支國，解蘇國，骨咄施國，帆延國，石汗那國，護時健國，怛沒國，烏拉喝國，多勒建國，俱蜜國，護蜜多國，久越特健國，凡十六。（略）置都督府八，州七十六。（標點本 6324）

「訶達羅支國王の居城である伏寶瑟顛城に條支都督府を置く。」⁽⁷⁾

とあり、それに續けてこの都督府の下に置かれた各州や部落の名前が挙げられている。また『新唐書』卷43下地理志（標點本1136）にも同様の記述がある。

『新唐書』謝颺國傳と、以上の記録から明らかになるのは、「訶達羅支」が顯慶年間にザーブリスターンに適用された呼稱だったらしいこと、龍朔元年に西域に十六都督府を置いた時、「訶達羅支國王」の居城に條支都督府が置かれたことである。

従来、「訶達羅支」について知られていた例は以上であるが、實は『老子化胡經』の敦煌寫本にもこの地名があらわれることが A. Palumbo によって指摘された (Palumbo 2001: 122-4)。そこでは老子が神力をもって西域の諸王を招き、遠近を問わず多くの者が集まってきたとして、その後八十餘りの國名が挙げられているのだが、その十六番目に「訶達羅支王」の名が見える。

「また、神力をもって諸々の胡の王を招いたところ、遠近を問わず人々がみな集まってきた。于闐國王から、朱俱半王、渴叛陀王、護密多王、大月氏王、骨咄陀王、俱蜜王、解蘇國王、拔汗那王、久越得犍王、怛怛國王、烏拉喝王、失范延王、護時健王、多勒建王、罽賓國王、訶達羅支王、波斯國王、疎勒國王、……(略)……五天竺國王にいたるまで、これらの八十國以上の國王とその妃后、およびその身内の者が、周圍を巡り、法を聴くためにやってきた。」⁽⁸⁾

この敦煌寫本の末尾には「道士索洞玄」という名が記されているが、この人物は他に二種の經典を書寫したことが知られている。一つはタイトル不明の道教經典 (Or. 8210/S. 2999) であり、もう一つは『太玄眞一本際經』卷2 (Or. 8210/S. 3563) である。この二點については書寫年月日として「開元二年十一月二十五日 (715年1月5日)」の日付が入っているため、『老子化胡經』寫本の方も同じ時期に屬するものと考えてよい。

一方、ほぼ同じ形ながら語頭の字のみが異なる「葛達羅支」という語は、『新唐書』謝颺國傳以外に『冊府元龜』卷964外臣部封冊にもあらわれる。そこでは、開元八年 (720年)

「九月、使節を送り、葛達羅支頡利發誓屈爾を冊して謝颺王となし、葛達羅支特勒を罽賓王となした。」⁽⁹⁾

(7) 訶達羅支國王居伏寶瑟顛城置條支都督府。(中華書局本1324)

(8) 復以神力召諸胡王。無問遠近。人士咸集。于闐國王乃至朱俱半王、渴叛陀王、護密多王、大月氏王、骨咄陀王、俱蜜王、解蘇國王、拔汗那王、久越得犍王、怛怛國王、烏拉喝王、失范延王、護時健王、多勒建王、罽賓國王、訶達羅支王、波斯國王、疎勒國王、……(略)……五天竺國王、如是等八十餘國王。及其妃后。并其眷屬。周匝圍繞。皆來聽法。(British Library Or. 8210/S. 1857)

(9) 遣使冊葛達羅支頡利發誓屈爾爲謝颺王。葛達羅支特勒爲罽賓王。(臺灣中華書局印行本11344)

とある。

ところが、同様の情報をやや簡略化して載せる『舊唐書』巻198には、罽賓國が

「開元七年(719年)、使者を遣わして來朝し、天文經一夾、秘傳の書や外國の藥などを贈り物として送ってきた。詔して遣わし、その王を冊して葛羅達支特勒とした。」¹¹⁰

とあり、「葛羅達支」の形を採る。

またやはり同じ情報を載せる『唐會要』巻99では、殿版が

「開元七年、使者を送ってきて、天文大經と秘傳の書、珍しい藥を送ってきた。八年、詔を遣わしてその王を冊して葛羅支特勒とした。」¹¹¹

とし、「葛羅支(*kat la tciē)」という形を採るが、四庫本では「其王」以下が「葛羅達支特勒」となっているから、これは「葛羅達支」から「達」の字が脱落したのと考えていいだろう。

さて、問題はこの三者¹¹²が同一のものなのか、同一だとすれば、どの形が採られるべきなのかである。答えを出すには材料が乏しすぎるように思えるが、この點をまず確認せねば、この漢字が何を示しているかを検討することはできない。

第一の點については、これらをやはり同一のものを寫した漢字と見るべきだと考える。

兩『唐書』と『冊府元龜』、『唐會要』を比較考量するなら、「葛達羅支」と「葛羅達支」が同じものをあらわしているのは明白である。一方、「葛達羅支」と「訶達羅支」の音を比べる

110 開元七年、遣使來朝、進天文經一夾、秘要方并蕃藥等物。詔遣冊其王爲葛羅達支特勒。(標點本 5309)

111 開元七年、遣使獻天文大經、及秘方奇藥。八年、詔遣冊其王爲葛羅支特勒。(中華書局本 1776)

112 實はこの名稱にはもう一つ variant がある。前掲『唐會要』巻73の「訶達羅支國王居伏寶瑟顯城置條支都督府」の「訶達羅支」が四庫本では「阿落羅支」となっているのである。『唐會要』のテキスト成立については不明な點が多くあるようだが、古畑徹は、四庫本の元になった系統の抄本の方が古い形を保持している可能性を指摘した(古畑 1989; 1998)。古畑はこの系統に屬するものとして、臺灣國家圖書館藏の舊抄本二點と靜嘉堂抄本とをあげているが、筆者がこれを参照したところ、三點全てにおいて當該箇所は「阿落羅支(*a lak la tciē)」と記されていた。古畑はこの系統の抄本が南宋高宗期の抄本に遡る可能性を示唆するが、そうであるなら「阿落羅支」という形もかなり古いものということになるかもしれない。試みに「阿落羅支」という形そのものに就いて考えてみるなら、第一字「阿」は「呵」(中古音は「訶」と同一)の誤寫とみなせるかも知れない。一方第二字「落」の方は既知の形と随分と異なるものだが、lak という音は第二子音としての l/r の存在の痕跡を示すように解釋できなくもない。音としては *a-lāk-lā-či / *xā-lāk-lā-či というようなものになろうか。しかし残念なことにこの例は『唐會要』の四庫本系抄本にのみ孤立して見られるものであり、ここでは考察の対象から外した。少なくとも『老子化胡經』敦煌寫本の存在は、「訶達羅支」という形がおそらく最も原形に近いものだとことを示しており、四庫本の存在のみからこれとは別系統の書寫方式を想定するのは、筆者には難しい。

なら、前者は *kat dat la tcie < *qâ-dâ(r)-lâ-či, 後者は *ha dat la tcie < *xâ-dâ(r)-lâ-či であって、両者の違いは語頭の xa-音と qa-音だけである。そしてその違いは、この音寫が行われた時期の違いと、その際の情報の傳達のあり方の相違に歸することができる（詳しくは第三章第三節を参照）。すなわち、「訶達羅支」と「葛達羅支」（葛羅達支ではなく）を、同一のものをわずかに異なる漢字を用いてあらわした語であると考えるのである。桑山は「葛達羅支特勒（勤）」「葛達羅支頡利發」をとりあげ、「訶達羅支」=「葛達羅支」と考えた場合、「頡利發 (iltäber)」「特勒（勤）(tegin)」といったテュルク系の稱號に、地名であるはずの「葛達羅支」が冠せられるのは異例であると述べる（桑山 1990: 254）。確かに地名に関して言えばそうかもしれないが、しかし例えば「回鶻可汗」（『新唐書』卷 217 下、『資治通鑑』卷 233, 『唐會要』卷 98, 『冊府元龜』卷 979 など）や「葛邏祿葉護」（『新唐書』卷 5, 『唐大詔令集』卷 128, 『冊府元龜』卷 965 など）などという例に引き付けて解釋することも可能であろう。すなわち「訶達羅支」「葛達羅支」は、「回鶻」や「葛邏祿」のようにある種の集團、部族をあらわす名稱であり、それが地名としても用いられたと考えるのである。

以上の考察から、採るべき正しい字形は「葛羅達支」ではなく、異なる時期に音寫されながら、共通した形式を持つ「訶達羅支」および「葛達羅支」の方であると考ええる。8 世紀初頭の書寫であり、すなわち我々が有する最古の資料であるところの『老子化胡經』敦煌寫本が「訶達羅支」という字形を採っていることも、これを補強する。一方「葛羅達支」= *Qaratači という假説については、類似の稱號あるいは名稱が、管見の及ぶ限り他に類例を持たないことから、ここでは採りがたい。

3. hitivira xaralāča

「訶達羅支」「葛達羅支」を正しい形として採用したとして、果たしてそれらは具體的に何を示しているのか。この點を考える鍵は、ヒンドークシュ山脈の南側の地域で大量に發見されている、いわゆる *nyčky MLK'* = Nezak Šah 貨幣にある。先に述べた如く、パフラヴィー文字で *nyčky MLK'* と書かれた銘を持つ貨幣はゲブルによって網羅的に研究されている。この貨幣群の中で、ゲブルによって Emission 208（以下 E 208 と略稱）という分類を與えられた貨幣にはブラフミー文字で書かれた次のような銘文がある。

śrī hitivira xaralāva pārameśvara śrī vahi tigina devakāriṭaṃ

(Göbl 1967-i: 142-5)

この銘文の二番目の語、hitivira は、H. Humbach によってテュルクの稱號 iltäber に同定されている (Humbach 1966: 60)。一方シムズ=ウィリアムスは、前述のバクトリア語文書の中にあられる hilitber という語を iltäber と同定している (Sims-Williams

2000:254) が、それを勘案すればフンバハの提案は十分に妥当なものであると考えられる。

護雅夫(1967:427)によれば、iltäber 號は東突厥において、阿史那氏以外の突厥あるいは鐵勒諸部の部族長に與えられた稱號であった。一方西突厥においては『舊唐書』卷194 下西突厥傳の

「統葉護可汗は勇敢で謀にも長けていて、戦いも巧かった。ついに北は鐵勒を併合し、西はペルシアを撃退し、南は罽賓に接し、これらの國々は悉く彼に歸順した。弓兵數十萬を擁して、西域に覇を唱え、昔の烏孫の故地に據ったが、石國の北の千泉に王庭を移した。彼は西域諸國の王に悉く頡利發の號を授け、あわせて吐屯を一人派遣して、徵税を監督させた。西域において未曾有の強盛を誇った。」¹³⁾

という記事から、突厥や鐵勒の部族長のみならず、トランスオクシアナ、バクトリアの都市國家の首長にも iltäber 號が與えられたことがわかる (cf. 桑山 1990:234)。

前出のバクトリア語文書群中には、ローブの土着の支配者 (Rob の *xār*) が hilitber という稱號を冠してあらわれる、いずれも7世紀の紀年を持つ文書が三點 (シムズ=ウィリアムスの附番による文書 N, 文書 P, 文書 Q) あるが、シムズ=ウィリアムスに従ってこの hilitber を iltäber に同定するなら¹⁴⁾、7世紀のバクトリア=トハリストーンにおいて、土着の地方支配者に頡利發號を與えたとの『舊唐書』の記事が裏書きされることになる。

さて、前掲の『新唐書』卷221 下および『冊府元龜』卷964 は、謝颺=ザープリスターンの王が「葛達羅支頡利發」の稱號を與えられたと述べる。上述のごとく頡利發=iltäber=hilitber=hitivira であるとする、この稱號は「葛達羅支の iltäber」という意味になる。一方 E 208 貨幣の銘には「hitivira xaralāva」という語が見える。銘文で言えば三番目の語にあたる xaralāva については、從來それが何をあらわしたものか不明であった。唯一フンバハがこの語に觸れ、なにかの部族名を誤って寫したものではないかと推測し、その部族名として xarlux=Qarluq をあげている (Humbach 1996 [1998]:251)。しかしこの貨幣が発行されたと考えられている8世紀の前半という年代は、カルルクがヒンドゥークシュの南側どころかアム河の南側に姿を現す時期として我々が知っている年代として

(13) 統葉護可汗、勇而有謀、善攻戰。遂北并鐵勒，西拒波斯，南接罽賓，悉歸之，控弦數十萬，霸有西域，據舊烏孫之地。又移庭於石國北之千泉。其西域諸國王悉授頡利發，并遣吐屯一人監統之，督其征賦。西戎之盛，未之有也。(標點本 5181)

(14) ここで語頭にある h- についてシムズ=ウィリアムスは、現代のハラジュ語において母音で始まる語の語頭に h- が立つという古テュルク語の形が保持されているとする G. Doerfer の研究 (詳しくは後述) を参照している (Sims-Williams 2002:235)。

は早すぎるものであるし⁹⁹、我々はカルルクがヒンドークシュの南側で活動したという後代の情報すら持っていないのである。

實はこの語の最後の子音をどう読むかについては異論もある。すなわちブラフミー文字の *va* と *ča* は字形が似ており、貨幣上で區別するのは困難な場合があるのである。この形式の貨幣の存在はすでに 19 世紀において知られており、A. Cunningham は、J. Prinsep, E. Thomas, および自身の銘文の読みを示している (Cunningham 1962: 269)。その中では、トーマスのみがこの語を 'kharala cha' と読んでいるが、プリンセップもカニングガムも、それぞれ 'Airāna cha', 'Airān cha' として、最後の音節を *ča* と読んでいるのである。またハルマツタ (1996: 378-9) もこれを *xaralāča* と読み¹⁰⁰、前述の通り吉田も *xaralāča* の読みを採って、それをハラジュと結びつけている。ハラジュはアラビア語資料に *خلاج* とあらわれるが、アラビア文字の *ح* は *j* と *č* をあらわす。一方バクトリア語文書では *χαλοο* という形であらわれるが、バクトリア語あるいはバクトリア文字では *σ* は *s* あるいは *č* をあらわすから、ハラジュのもともとの部族名称としては *xalač* という形が想定される。いずれにせよ、こちらの部族名であれば、我々は 10 世紀に彼らがアフガニスタン東南部で暮らしていたという情報 (第四章第二節参照) を有しているし、なにより、ローブのバクトリア語文書には、7-8 世紀にヒンドークシュ山脈北麓にハラジュ族がいたことが示されているのである。すなわち文書 P には

「446 年 (= 678 年), Ab 月 Wahman 日, この封印文書, 賣買契約書は書かれた。(中略) さてここに, Xwastu の住人にして現在 Samingan 地方に居する, Kaw の息子たる私 Yaskul, 私 Yezd-gird および兄弟達息子達は, Gabaliyan と呼ばれる家系に属する, Bag-mareg の息子たるそなた Fanz, そなた Wind-marg, そなた Pusk およ

(99) V. Minorsky は、カルルクの一團がアム河の南側にいたことが Tabari の年代記に見えると述べる (Minorsky 1982: 287-8)。ここで言及されるのは、730 年代後半トハーリスターンの地において、アラブ・ムスリムと争っていた突騎施の蘇録可汗の軍勢に助勢した Jabgūya (TRM-ii: 1547, 1590-1, 1604, 1609; Blankinship 1989: 84, 127-8, 140-1, 145) のことであるが、ミノルスキーはこの Jabgūya がカルルクのヤブグを意味すると思ったのであり、それゆえに彼によれば 8 世紀前半にはトハーリスターンに彼ら自身のヤブグを戴くカルルクの集團がいた、ということになる。確かにタバリーには一箇所だけ、この Jabgūya が、'Jabgūya al-Xarluxi' と呼ばれている箇所がある (TRM-ii: 1612; Blankinship 1989: 147)。しかしそれ以外の箇所では単に 'Jabgūya' あるいは 'Jabgūya al-Ṭukhārī' と書かれていて、この記述のみから 8 世紀前半、アム河の南におけるカルルクの存在を結論するのは難しい。O. Pritsak はこの見解を批判し、カルルクが西突厥のヤブグの後継者になったのは 766 年以降であったと述べている (Pritsak 1951: 274 & n. 2, 275)。

(100) ただしハルマツタはこれを *Qargilaci > 曷犂支、すなわち『舊唐書』にみえるカーピシーの王の名前と同一視し、王家の家系名を示すものだという独自の見解を示す。

び兄弟達、息子達、子孫達に、我々に兄弟として属していた少年, Xalas (χαλασος) と呼ばれる少年を、凶作のせいで保持できなくなったがゆえに、3 ペルシア・ディルハムにて賣り渡す。(後略)」(Sims-Williams 2000: 82)

とあり、また文書 T には、

「478 年 (= 710 年)、二番目の新年の月、この封印文書は書かれた。

さて、私 Bag-aziyas、偉大なるテュルクの王女、Qutlugh Tapaghligħ Bilgä Sävüg, Xalas (χαλασανο) の王女、王室の女主人は、貴方 Kamird 神、恩寵の與え手、望みをかなえてくださる御方から、偉大なるお力と奇蹟とが、病で死にかけていた王家の赤子に對して示されたのを見ました。そして貴方 Kamird 神、神々の王による、よく知られたる偉大なる奇蹟が行われ、神官たる Kamird-far の媒介により、王の赤子を病より救われたのです。そこで、私、女王、王室の女主人は、王の赤子のために、貴方 Kamird 神と、神官 Kamird-far に對して、Asp にある灌漑された土地財産、Bashunan Parghan と呼ばれる地を榮譽の徴としておくります。そしてまた *bredag* と *We-burug* から、……大いなる勤めの履行として私に送られていた Warag という名の女も、貴方の奴隸として、楽しみとして與えられます。(後略)」(Sims-Williams 2000: 98-104)

とあるのである。文書 P の方は、内容にもあらわれるとおりサミンガーンのことを語っており、一方文書 T の方は、「王女、女王、王室」といった言葉があらわれることから考えて、ローブで書かれたものと推測される。そうだとすると 8 世紀初頭、ローブの支配者はハラジュの王女を妻としていたことになるが、いずれにせよこの二點の文書は、當時 Xulm 川沿いにローブに至る地域にハラジュがいたことを知らせてくれている。それゆえ、E 208 の *xaralāva/xaralāča* を部族名だと考えるなら、7-8 世紀にヒンドゥークシュ北麓にいて、遅くとも 10 世紀には Helmand 川中流域にいたことが確實なハラジュの方が、カルルクよりもその候補としてふさわしい。

吉田の假説に基づく以上の検討により、E 208 の銘文については、これを *xaralāča* と読み、「*xalač* の *iltäber*」を意味するものと解する。そうであれば、『新唐書』、『冊府元龜』に見える「葛達羅支頡利發」をも同じく「*xalač* の *iltäber*」に還元することができ、「葛達羅支/訶達羅支」をハラジュと結びつけることができる。少なくとも、*hitivira xaralāča* と「葛達羅支頡利發」の背後に、**xalač iltäber* という形を想定することによって、時間的に近接した時期に同じ地域について現れ、ともに *iltäber* の稱號に冠され、しかも形としてある程度類似した二つの語を結びつけて解釋することが可能になるのである。

前述の如く、この **xalač iltäber* の稱號は 8 世紀前半にカーブル〜ザーブリスターン地域に登場するが、この時期すでにこれらの地域はテュルク系の二つの王國、すなわちカー

ブルのテュルクシャーの王國とザーブリスターンの *rtbyl* の王國の支配下にあったから、これらの稱號は同地の王達が帶びたものである。以上の考察が有効なものであるなら、それゆえ、これらの王國の支配者がハラジュであったという可能性は大いに強まる。

III ハラジュの王國と唐

前章で述べたところは、もちろん十分な直接的證據を伴うものではない。そこで以下、この假説によって我々にとって既知の歴史的狀況がどれだけ整合的に説明できるかという點を検討してみたい。それにより、この假説の妥當性が間接的に補強されると考えるからである。

1. 阿史那賀魯の亂

まず、「阿達羅支/葛達羅支」という名稱がこの時期に唐朝の史料にあらわれる背景を描き出すことが出来るかという點を考えてみる。

周知の通り突厥が東西に分裂し、東突厥が唐に屈服した後、唐はさらに西へと支配の手を廣げていった。一方7世紀前半、統葉護可汗のもとで西トルキスタンからトハーリスターン方面へも支配を及ぼした西突厥系諸部族の中核は、東の咄陸部と西の弩失畢部に分けられ、それぞれの部族に五つずつの部が置かれて、「十姓」とか「On Oq (10本の矢)」と呼ばれた。統葉護の死によってこれら十姓が亂れたのをきっかけに、唐は西突厥をも攻略すべく西方進出を本格化させた。638年、西突厥西部の民に推された欲谷設が乙昆咄陸可汗となり、一時大きな力を持つが、642年には唐に冊立された乙昆射匱可汗に敗れ、吐火羅に逃亡した(『舊唐書』卷194下;『新唐書』卷215下;『資治通鑑』卷196;『通典』卷199)。この咄陸可汗のもとで葉護として仕えたのが阿史那賀魯であるが、咄陸可汗の敗戦により彼もまた唐に服屬した。その結果、彼は648年に瑤池都督として庭州(ビシュバリク)を安堵された。しかし翌年の太宗の死を契機に、賀魯は獨立を企圖して乙昆射匱可汗の所領を侵略し、西州(高昌)および庭州の奪取を試みた。これは650年から651年にかけてのことであった。彼は千泉および雙河に牙庭を置き、沙鉢羅可汗と號して十姓をたばねたが、唐はこれに對して伊麗道行軍大總管蘇定方らが率いる軍と、流砂道安撫大使に任じられた西突厥の阿史那彌射(後の興昔亡可汗)と阿史那步眞(後の繼往絕可汗)が率いる軍勢を派遣した。松田壽男によれば、前者の軍は金山から曳咥河(カラ・イルティシュ)を越えてエミル川流域で處木昆部を撃破し、一方後者は西州から西進するという具合に南北から二軍が賀魯の本據を目指した(松田1956:345)。イリ川を西に越えた賀魯を追って、蘇定方軍は碎葉水(スイアープ)にいたり、657年ここにおいて賀魯軍を大いに破った。さらに西へ逃れた賀魯を追撃した、定方麾下の蕭嗣業らの軍は石國の地で賀魯を捕捉した。

2. 安西都護府と十六國

かくして阿史那賀魯の亂は平定されたのであるが、この亂の戦後處理策として行われたのが、安西都護府の龜茲への移動および、かつての賀魯の支配領域をいくつかの都督府にわけて、その下に配屬し直すという作業であった。『新唐書』卷215下には

「賀魯が滅んでしまうと、かれの支配していた領域を分けて州・縣とし、それぞれに諸部落を住ませた。木昆部落は匁延都督府、突騎施索葛莫賀部落は嚙鹿都督府、突騎施阿利施部落は梨山都督府、胡祿屋闕部落は鹽泊都督府、攝舍提暉部落は雙河都督府、鼠尼施處半部落は鷹娑都督府とし、さらに、崑陵・濛池の二都護府を設置して、これらを統括させた。それに服屬した諸國にはみな州を置き、西方は波斯にいたるまでを、すべて安西都護府の統治に服させることにした。」⁽¹⁷⁾

とある。この西域統治體制再編事業が、賀魯の亂が平定された翌年、顯慶三年（658年）に開始され、三年後の龍朔元年（661年）に一應の完成をみたことは、『唐會要』卷73の

「〔顯慶〕三年五月二日にいたって、安西都護府を龜茲國に移した。かつての安西についてはまた西州都督とし、麴智湛をこれにあて、高昌故地を統べさせた。西域はすでに平定されたので、使者を康國、吐火羅國にそれぞれ派遣して、その風俗物産と、昔の〔州縣の〕廢置を調べさせた。そして地圖を描かせて提出させた。それによって史官達に西域圖志六十卷を撰させた。」⁽¹⁸⁾

および

「龍朔元年六月十七日、吐火羅道置州縣使王名遠は『西域圖記』を上程した。あわせて、于闐以西、波斯以東の十六國に都督府を分置し、また州八十、縣百十、軍府百二十六を置き、吐火羅國に碑を建て、聖德を記すことを請うた。」⁽¹⁹⁾

という記述から知れる。ちなみにこの時、吐火羅には天馬都督府と大汗都督府が置かれ、訶達羅支には前述の通り條支都督府が置かれたのである。

ところで『新唐書』卷58藝文志の

(17) 賀魯已滅，裂其地爲州縣，以處諸部。木昆部爲匁延都督府，突騎施索葛莫賀部爲嚙鹿都督府，突騎施阿利施部爲梨山都督府，胡祿屋闕部爲鹽泊都督府，攝舍提暉部爲雙河都督府，鼠尼施處半部爲鷹娑都督府，又置崑陵濛池二都護府以統之。其所役屬諸國皆置州，西盡波斯，並隸安西都護府。（標點本 6063）

(18) 至三年五月二日，移安西都護府於龜茲國。舊安西復爲西州都督，以麴智湛爲之，以統高昌故地。西域既平定，遣使分往康國及吐火羅國。訪其風俗物產，及古今廢置。畫圖以進，因令史官撰西域圖志六十卷。（中華書局本 1323）

(19) 龍朔元年六月十七日，吐火羅道置州縣使王名遠進西域圖記。并請于闐以西，波斯以東十六國，分置都督府，及州八十，縣一百一十，軍府一百二十六，仍以吐火羅國立碑，以記聖德。（中華書局本 1323）

「西域圖志六十卷。高宗は、使者を遣わして康國と吐火羅にそれぞれ往かせ、その地の風俗物産を調べ、地圖を描かせて奏上させた。また史官達に詔し、〔西域に関する書物を〕撰させた。許敬宗がこれをうけたまわり、顯慶三年に上程した。」²⁰⁾

および、『唐會要』卷36の、

「その年（顯慶三年）五月九日、西域が平定されたことによって、使節を康國および吐火羅等の國にそれぞれ派遣し、それらの地域の風俗や物産、さらに古今の〔州縣の〕廢置について調査させた。地圖や圖面を提出させ、史官達に『西域圖志』六十卷を撰させた。許敬宗がそれを監修した。書物ができあがったとき、學者達はその〔内容の〕該博さを稱贊した。」²¹⁾

という記載に見える吐火羅への使者こそが、上掲『唐會要』卷73の記事に登場する王名遠である。彼については、『舊唐書』卷198波斯傳に

「卑路斯（ペーローズ）は龍朔元年、大食（アラブ）によってしきりに侵略されていると奏上し、援兵を請うた。皇帝は詔を下して、隴州南由縣令の王名遠を西域使節に充て、州縣を分置せしめ、それによってその地の疾陵城を波斯都督府となして、卑路斯を都督とした。」²²⁾

とあることによって、吐火羅へ派遣される以前、隴州南由縣令であったということが知れるのみだが、『新唐書』、『唐會要』の記事から、彼がこの事業の開始にあわせて顯慶三年に派遣され、龍朔元年に歸國して、その成果を『西域圖記』という形で上程したことがわかる。²³⁾

一方、許敬宗および史官たちが撰した『西域圖志』は『西國志』とも呼ばれ、最初六十卷として編まれ、後、麟德三年（＝乾封元年＝666年）に圖四十卷を加えて百卷となったことが、『法苑珠林』卷9の

「西國志六十卷は、國家が修撰し奉った。諸學士に敕して、畫圖を中臺に集めさせた。それがまた四十卷となった。麟德三年に作業を初めて、乾封元年夏の末に終えた。」²⁴⁾

20) 西域圖志六十卷。高宗遣使分往康國、吐火羅、訪其風俗物産、畫圖以聞。詔史官撰次、許敬宗領之、顯慶三年上。（標點本 1506）

21) 其年五月九日、以西域平、遣使分往康國及吐火羅等國。訪其風俗物産、及古今廢置。畫圖以進。令史官撰西域圖志六十卷。許敬宗監領之。書成、學者稱其博焉。（中華書局本 656）

22) 卑路斯龍朔元年奏言頻被大食侵擾、請兵救援。詔遣隴州南由縣令王名遠充使西域、分置州縣、因列其地疾陵城爲波斯都督府、授卑路斯爲都督。（標點本 5312-3）

23) 内田吟風は王名遠が顯慶三年と龍朔元年の二度、吐火羅に使者として派遣されたとしているが（内田 1965: 142）、彼の調査の目的と成果を考えれば、その調査行が三年にわたる長期のものであったと考える方が適切であろう。

24) 西國志六十卷國家修撰奉。敕令諸學士。畫圖集在中臺。復有四十卷。從麟德三年起首。至乾封元年夏末方訖。（大正藏 53: 310 b）

という記事から知れる。顯慶三年に詔が下り、その年のうちに仕上がったという『新唐書』藝文志を信ずるなら、最初の六十卷の『西域圖志』は、それまで政府に提出されたり、蒐集されたりしていた西域関連の資料を用いて、いわばデスクワークによって作成されたものであったと推測できる (Cf. 内田 1965: 143)。『法苑珠林』卷 38 の

「玄奘法師の行傳、王玄策傳、および西域の道俗……(略)……をもとにして、文學士たちに敕を下して、全て集め、詳細に撰させた。全部で六十卷となり、『西國志』と名付けた。圖畫四十卷をあわせて百卷とした。」¹²⁵⁾

との記事は、最初の六十卷『西域圖志』がどのように編纂されたかを教えてくれるが、『奘師行傳』=『大唐西域記』や、『王玄策傳』=『中天竺行記』などの他にも、『隋書』西域傳に反映されている可能性のある裴矩の『西域圖記』や『高僧傳』などに記録される情報を中核に、西域諸國からの使者、あるいは同地への唐の使節がもたらした情報を参考にして『西域圖志』は編まれたのである。「書物ができあがったとき、學者達はその〔内容〕の該博さを稱賛した」というのも、『隋書』『晉書』の編纂に携わったほか、おおくの史書を編纂していた許敬宗の監督のもと、この書物が多くの材料を用いた、豊富な内容を持つものとして編まれたという雰囲気伝える。

一方、その後附加された四十卷の一部をなしたのが、王名遠によって上程された『西域圖記』だったのであろう。こちらの書物は單に圖畫のみならず、王名遠による三年間にわたる現地フィールドワークで得られた情報を含んでいたはずである。たとえば『舊唐書』卷 198 罽賓國傳の

「顯慶三年、その國の俗をたずねてみると、王家の始祖は馨孃であり、今の曷撚支にいたる。父から子へと位を傳えて、すでに十二代になる、と言っている。」¹²⁶⁾

という記述などは、前掲『新唐書』卷 5、『唐會要』卷 73 の「訪其地風俗物產」に對應するものであり、この時の王名遠の調査によってもたらされた情報と考えてよい。そうして『唐會要』の記事は、この王名遠の調査報告が、その直後に施行された西域諸國への十六の都督府設置の青寫眞となったことをも語っているのである。

3. 王名遠と訶達羅支

第二章の冒頭にひいた『新唐書』卷 221 下謝颺國傳の記事には、「訶達羅支」という名稱が登場するのが顯慶年間であると書かれている。上述のような王名遠の調査のあり方と時

¹²⁵⁾ 依奘師行傳。王玄策傳。及西域道俗……(略)……敕令文學士等總集詳撰。勒成六十卷。號爲西國志。圖畫四十卷合成一百卷。(大正藏 53: 496 c)

¹²⁶⁾ 顯慶三年訪其國俗。云王始祖馨孃至今曷撚支。父子傳位已十二代。(標點本 5309)

期的な付合からして、それまでの「漕矩吒」という名前にかわって、「訶達羅支」という名稱が現れた原因を、王名遠による調査報告に求めてもそれほど的外していないだろう。

王名遠の調査が実際どのようにして行われたものなのか、残念ながらその詳細を語る資料を我々は持たない。彼自身がトハーリスタンからヒンドークシュ南部まで実際に踏査したか、あるいは自身はトハーリスタンに身を置きつつ、インフォーマントを通じて情報を得たかもわからない。いずれにせよ前章で提示した假説を適用するなら、この時点でヒンドークシュ南側に勢力を築きつつあったハラジュの名が彼によって「訶達羅支」と寫され、唐朝に報告されたのである。

この際、「訶達羅支 xā-dā(r)-lā-či」というインド語化された形がどのように出現したのかも不明であるが、二つの可能性を想定することができる。すなわち、王名遠あるいは彼の周辺の者が Xalač という語をインド語化して記録したか、あるいはハラジュ自身がインド語化した形で名乗ったか、である。半世紀餘り後にハラジュが自ら発行した貨幣において xaralāča というインド語化された形を用いていることを考えると後者であった可能性が高いかもしれない。

ただし、「訶達羅支 xā-dā(r)-lā-či」あるいは「葛達羅支 kā-dā(r)-lā-či」は、音寫として xaralāča にぴたりと對應するわけではないことは注意せねばならない。特に二番目の「達」の字は通常 dār をあらわし(達磨 < dharma など)²⁷⁾、ここに登場することがあまり期待されない文字である。この当時のヒンドークシュ南側の言語状況の詳細は不明であるが、後で述べる Nezak Šāh 貨幣の銘文から判断して、特にヒンドークシュ南麓についてはインド語とバクトリア語の二つが主要な言語だったと考えられる²⁸⁾。この時期のバクトリア語では、子音 l と r のコンビネーションにおいて、前者の音が異化されて dr- という発音をとることが知られている (Sims-Williams 1997:23)。これを念頭に置くなら、次のような状況が想定できる。すなわち、xalač の名が xaralāča あるいはそれに類似した形にインド語化され、その名稱が王名遠に伝えられたとして、その際、このバクトリア語の発音の影響を受けて、二番目の子音が d に近い音として聞き取られた、と。一方、中期インド語からの漢字音寫に関しては、インド語の d-音が中古音の l-/r-音で寫される例と、

27) 次の音節の漢字が l-音である場合は、それと結合するがために dā をもあらわす。Cf. 健達羅 < Gandhāra

28) Nezak Šāh 貨幣では、銘文に用いられている文字としてブラフミー文字、バクトリア文字、パフラヴィー文字の三種が知られている。Emission によって、一種類の文字のもの、二種類のもの、三種類が用いられているものなどがある。吉田 (2002) は用いられている文字と言語が、それぞれの貨幣の発行者の支配領域とある程度関係を持つのではないかと推測している。

インド語の l-音が中古音の d-音で寫される例とがともに知られている（辛島 1994: 19, 27, 67）。特にいわゆる佛教梵語（Buddhist Hybrid Sanskrit）において、retroflex の d が、サンスクリット語の母音に挟まれた l を寫す例が多く見られる（Edgerton 1953 -i: 18）。辛島靜志によれば、それは北西インドの中期インド語において d-音と l-音が近くなっていたことの反映であるというが、「訶達羅支/葛達羅支」と xaralāḥa についてもこれを援用して解釋できる可能性がある。

ただしいずれの解釋も、漢語で轉寫した人物（顯慶年間で言えば王名遠）とインフォーマントの間の情報傳達のあり方（おそらくは口頭での發音による音寫）という個別的な状況に依存する可能性が大いにあり、漢語史料に「訶達羅支/葛達羅支」という形が記録されるに至るまでのどの段階において、d-音あるいはそれを寫す「達」が出現したのかを明確に定めるのは困難である²⁹。

他方、ハラジュがインド語化された名稱をなつた背景としては、ヒンドゥークシュ南側から北西インドにかけての地域におけるインド文化の優勢を想起すればいいだろう。上述の如く、そもそも Nezak Šāh 貨幣自體ブラフミー文字でインド語を刻むものが多い³⁰。そのうえ、ヒンドゥークシュ山脈南側のみならず、これに先立つ時期、バクトリアから Sogdiana にかけての地域にまでインド風の文化が廣く浸透していた形跡がある。たとえば Pyanjikent の壁畫は 6 世紀、それ以前のゾロアスター教的あるいはペルシヤ的なモチーフから、ヒンドゥー教的なそれへと描き直されている。桑山によればこのような状

29) なお、ペテク (1964: 294) は「訶達羅支/葛達羅支」という音寫ともしかしたら關連するかもしれない **خطلخ** という語に言及する。それは Yāqūt の地名辭典 *Mu'jam al-Buldān* (13 世紀) に引かれる Abū Dulaf Mi'sar b. Muhalhil の記述 (MB-iii: 443) に現れるが、アブー・ドゥラフは 10 世紀、ブワイフ朝の宰相で學者、文人を保護したことで知られる Šāhib Ismā'il b. 'Abbād に仕えた人物である。彼の著作として知られる、いわゆる『第一書簡』と『第二書簡』のうち、前者はヤークートによってほぼ前文が引用されており (MB-iii: 440-9), 古くからその存在が知られていた。問題の語はこの『第一書簡』の中、西トルキスタンから中國西部に至るルート沿いに住む諸部族の名を擧げていく中で、Xarlux の次に現れる。マルクヴァルトも、**خ** と **ج** がここで混同されていると見、第二子音に現れている **ط** と「達」という漢字との關連を示唆している (Cf. Marquart & de Groot 1915: 258, n. 1)。第四章で述べるごとく、中央アジアにおけるハラジュの存在を考えると、カルルクに遡んで言及されるこの **خطلخ** は、ハラジュとなんらかの關係を持ちそうではあるが、そもそもアブー・ドゥラフの『第一書簡』については、その内容が、Buxārā あたりで著者が得た傳聞情報によるとされ (Minorsky 1955: 11-8), **خطلخ** (あるいは **خطلج**) という形も、管見の及ぶ限りにおいて他の如何なる資料にも見いだし得ないことから、これをもとにして説得的な議論を展開することは不可能である。

30) ゲブルは Nezak Šāh 貨幣を約 80 の Emission に分類するが、そのうちの半數以上にあたる 41 の Emission にブラフミー文字で書かれた銘あるいは文字が見える (Cf. Göbl 1967 -i: 132-186)。

況は、エフタル王國の瓦解とともに、商人達が凋落するガンダーラから離散していく過程で、インドの宗教文化が北方にもたらされたことに起因する (Kuwayama 2002: 154)。一方 F. Grenet はそれを、キダーラ時代からエフタル時代にかけてこの地域が北西インドと強い関係の中にあったためであると考えている (Grenet 2002: 213)。さらにハルマッタによれば、この時期 Xuttal で発行された貨幣には支配者 (ハルマッタによればエフタルの王子達) の名前がインド語化されて刻されている (Harmatta 1996: 370)。ハラジュのインド風の名乗りもまた同じ流れの下流に位置づけることができるのかもしれない。つまり、インド文化の影響を受け、インド風に、インド語化した名前を名乗るのが「正式」なことであり、國を束ねるものの嗜み、當然の儀禮だと考えられたのではないか。顯慶年間から約 70 年後の開元八年 (720 年) に朝貢してきたハラジュの使節團が、やはり「葛達羅支」というインド語化された名前を名乗っていたというのは、大唐に對してこのような名乗りを行うことが「正式」であるという意識のあらわれだったのかもしれない。

ところで、この時、かつての「訶達羅支」という形ではなく、やや異なる「葛達羅支」という形が採られた理由や背景についてはよくはわからない。おそらく單純に、音寫の時期、あるいは寫し手の相違による異同であると考えておけばよいのだろう。しかしながらアラビア語、ペルシア語史料の中でも、xalač ではなく、qalač という形を載せるものがあることには注意を向けてもいいかもしれない。第五章第三節および第四節で詳しくみるように、Maḥmūd al-Kāšgarī のテュルク語辭典 *Dīwān Luġāt al-Turk* (11 世紀後半) はハラジュの語源としてテュルク語の “qal ač” という形をあげ、Rašīd al-Dīn による世界史である *Jāmi' al-Tawārix* (14 世紀初頭に完成) はこの部族の名稱を Qalaj と表記している。バミール以西で成立した資料の中においても、語頭の子音の表記に關する揺れがあるという事實は、漢字表記において「訶」と「葛」の二通りがあることに對應しているように見える。實際、カーシュガリーは子音の q- と x- の關係について次のように記している。

「オグズとキプチャクはしばしば qāf を xā' に變える。彼ら (オグズとキプチャク) はハラジュに近い。「私の娘」というのに、彼らは xizim といい、テュルク達は qizim という。」 (Dankoff & Kelly 1982-ii: 263)

漢字音で言えば「訶」は xa- を、「葛」は qa- をそれぞれ示すと考えられる。xalač という、バクトリア語やアラビア語、ペルシア語に在證される形に對應する「訶達羅支」(顯慶三年頃の情報) に對して、開元八年に記録された「葛達羅支」の方は、ここで意識されている qalač という形に對應しうである。カーシュガリーによるならハラジュの人々は qāf を xā' に變えて發音するわけだから (Cf. Doerfer 1971: 173)、ハラジュの部族名の元來の音である qalač が、しばしばハラジュ自身によって xalač と發音されていたということになる。もっとも、ハラジュ自身が xalač と自稱したのであれば、「元來の」という言い方すら

當たらないかも知れない。いずれにせよ「訶達羅支」と「葛達羅支」という二通りの音寫方法の存在は、それぞれの時期の相違と、おそらくその時に唐とハラジュの間に介在した情報傳達者（ハラジュであるかもしれないし、そうでないかもしれない）の違いによる、微妙な發音上の相違に歸着すると考えておく³¹⁾。

IV. ハラジュの來た道

それでは訶達羅支＝ハラジュは、具體的にどのようにしてヒンドークシュ南側の政治史の中に登場したのであろうか。以下の三つの章において、彼らがどのような経緯で山脈の南側に到來したのか、それがいつのことだったのか、そうして彼らの王國樹立はどのようにしてなされたのか、という点について検討し、ヒンドークシュ南側の歴史に関する既知の事實とハラジュの存在がいかに整合しうるのかを検證する。

1. ヒンドークシュ南側の突厥

王名遠による調査が行われる以前、7世紀前半にこの地域を旅した玄奘は、往路と復路の二度、ヒンドークシュ南麓なる迦畢試＝カーピシー國を通過しているが、『慈恩傳』卷5は、おそらく643-4年頃のことと考えられる復路の行程について次のように記す。

「ここ（藍波國）からまっすぐ南へ15日行き、伐刺拏國に至って聖跡を禮拜した。また、西北に向かい阿薄健國へ行き、それから西北へすすんで漕矩吒國へ行った。また北に500里餘りすすんで佛栗氏薩儼那國に至った。ここから東にすすんで迦畢試國の國境に出た。」³²⁾

この行程のうち、「藍波國」は現 Lagmān で、Jalālābād とカーブルの間に位置する。玄奘はそこから Spin Gār 山脈を越えて、「伐刺拏國」＝現 Bannū に到達した。バヌーはスピン・ガルの南側、Kurram 川および Toči 川によって潤される沃野である。そこからこの二本の川の源のあるアフガニスタン東部の山嶽地帯を越えて、ザブリスターンに至り、北上して佛栗氏薩儼那、さらには山嶽地帯を経てカーピシーの國境邊に出たのである。こ

31) ここでさらに注目すべきは、初期のアラビア語、ペルシア語史料において、そもそもチュルク系部族の名稱のうち、q-がx-であらわされる場合（たとえば Qarluq > Xallux, Qirgiz > Xirxiz など）がしばしば見られるという点である。チュルク語の音韻とアラビア語のそれとの對應關係についての知識を持たない筆者には、ここでこの現象がなぜ起こるのかを説明することはできないが、xalaj / qalač および訶達羅支/葛達羅支の問題も、そちらに引きつけて考える方が適切であるのかもしれない。

32) 自此復正南行十五日，往伐刺拏國，禮聖跡。又西北往阿薄健國。又西北往漕矩吒國。又北行五百餘里，至佛栗氏薩儼那國。從此東出至迦畢試境。（『慈恩傳』：115；cf. Beal 1986：193）

こで「阿薄健」と並んで不明なる地名「佛栗氏薩儻那」について、『大唐西域記』巻12は次のように記している。

「佛栗特薩儻那國は東西が二千里餘り、南北は千里餘りある。國の大都城は護苾那と稱し、周圍は二十里餘りである。產物や風俗は漕矩吒國と同じだが、言語には違いがある。氣候は寒さが酷しく、人の性質は烈しい。王は突厥である。深く三寶を信じ、學藝を尊重し、徳者の言を重んじた。この國から東北へ向かって山を越え川を渡り、迦畢試國の邊境の小村數十箇所を経て、大雪山の婆羅犀那大嶺に至る。」^[33]

ここで注目すべきは佛栗特薩儻那には突厥がいた、と記されていることである。玄奘がヒンドークシュ山脈の南側において突厥の存在を言うのはこの場所だけである。一方、玄奘から80年ほど遅れて、725-6年頃同じ地域を旅した新羅の僧慧超は以下のように記す。

「さらに迦葉彌羅國の西北、山の向こうへヶ月行程行き、建駄羅（ガンダーラ）につく。ここの王も軍もおしなべて突厥である。住民は胡でバラモンもいる。この國はもとほ屬實王の治下にあった。したがって（今の）突厥王の父は部衆、軍隊を率いてその屬實王に臣従していたが、後に突厥の軍力が強くなると、すぐにその屬實王を殺して自分が國主となった。」（『慧超傳』：38）

「さらにこの曠波國より進んで（西に行って）山に入り、八日行程を経て屬實國に達する。この國も建駄羅王の管轄下にある。この王は夏は屬實にいる。……（略）……この國の人々は胡であるが、王と軍は突厥である。……（略）……」

さらにこの屬實國より西へ七日行くと、謝颺國に達する。そこは社護羅薩他那と自稱する。住民は胡であるが、王と軍は突厥である。その王は屬實王の甥である。自らその部衆、軍隊を率いてこの國に住んでいる。他國に臣屬していないし、叔父にも屬さない。ここの王と豪族は突厥であるけれど、三寶をおおいに敬っている。」（『慧超傳』：40）

玄奘の記録する佛栗特薩儻那の突厥と、慧超の報告する屬實、謝颺の突厥王とを結びつけることから、桑山と筆者は第一章冒頭に記したような歴史理解に到達したのである。

[33] 佛栗特薩儻那國東西二千餘里、南北千餘里。國大都城號護苾那、周二十餘里。土宜風俗、同漕矩吒國、語言有異。氣序寒勁、人性獷烈。王、突厥種也、深信三寶、尚學遵徳。從此國東北、踰山涉川、越迦畢試國邊城小邑、凡數十所、至大雪山婆羅犀那大嶺。（『西域記』：959-60；cf. 水谷 1971：372；Beal 1983-ii：285）

2. ハラジュの移動経路

さて、前章までの考察を前節のそれに組み合わせれば、弗栗特薩憺那の突厥(640年頃)＝闕賓および謝颺の突厥＝訶達羅支/葛達羅支＝ハラジュ、という関係が導かれる。これが第一の点。

つぎに前述のごとく、7-8世紀の日付を持つヒンドークシュ北麓なるローブ由來のバクトリア語文書にもハラジュが登場する。これが第二の点。

さらに、10世紀の地理學者である al-Isṭaxrī が

「ハラジュはテュルクの一種で、その昔、ヒンドとシジスターンの間、Gūrの裏側に到來した。家畜を飼い、テュルクのような性質、衣服、言葉である。」⁽³⁴⁾

と記し、また13世紀初頭 Muḥammad b. Najīb Bakrān が、*Jahān-nāma* において

「ハラジュ。テュルクの一部族で、カルルクの境域からザープリスターンの境域に到來した。ガズニーンの周辺にある平野に居を定めた。その後、氣候の暑さのゆえに彼らの肌の色は變化し、黒っぽくなった。言語も變化し、別の言葉になった。彼らのうちの一團が Bāward に至り、Darra-i Gaz に居をかまえた。人々はカルルクを、點を誤ってハラジュと呼んでいる。」⁽³⁵⁾

と記していることを勘案すると、ハラジュのもともとの故地は中央アジア方面、すくなくともトハーリスターンよりはさらに北の方であったと目されていたことがわかる (Cf. Minorsky 1940: 426-30)。これが第三の点。

そうして、この三つの事柄から導き出されるのは、7世紀より以前にハラジュのテュルクが中央アジア方面からアム河を南に渡河してきたこと、そしてそこからさらに一部がヒンドークシュの南側へと移住してきたということである。

アム河以北の中央アジアにおけるハラジュの存在については十分解明されてはいない。マルクヴァルトは6世紀に書かれたシリア語の年代記にあらわれる *xwls*、および568年にビザンツよりの使者として突厥の Dizablos、すなわち室點蜜可汗のもとを訪れた

(34) و الخلیج صنف من الترك وقعوا فی قديم الايام الى الارض التي بين الهند و نواحي سجستان فی ظهر الغور و هم اصحاب نعم علی خلق الاتراك و زبيهم و لسانهم.
(Ist.: 245)

(35) خلیج قومی از ترکان از حدود خلیج بحدود زابلستان افتادند. و در نواحي غزنین صحرايي است آنجا مقام کردند. پس بسبب گرمی هوا لون ایشان متغیر گشت و بسیاهی مایل شد. و زبان نیز تغیر پذیرفت و لغتی دیگر گشت، و طایفه ای از ان جمله بحدود باورد افتادند، و بدره گز مقام ساختند، و خلیج را مردمان بتصحیف خلیج می خوانند.
(JN: 73)

Zemarchos が記録する *Xoliatat* をハラジュに結びつけ、*Xoliatat* がシル河の東、タラスの西に住み、ディザブロスの有力な家臣であったと考えている (Marquart 1901: 251-3)。ミノルスキーは Ibn Xurdāqbih の記す二つの記事、すなわち

「テュルクの住地は次の通りである。Tuğuz-guz はテュルク中で最も廣大な土地を持ち、それは中國、チベット、カルルク (الخرلج var. الحولج) と境を接する。Kimak, Guzz, J. f. r, Bajānak, Turkaš, Aqkiš, Xifšāx, Xirxiz —そこではムスクが産する—そしてカルルクとハラジュ。後者は河のこちら側にいる。」⁽³⁶⁾

と

「Tarāz から下 Nūshajān まで 3 ファルサフ。それから Kišrā Bās まで 2 ファルサフ。そこは暖かい場所 (jarmiya) で、カルルクがそこで冬營する。その近くにはハラジュの冬營地もある。」⁽³⁷⁾

を比較し、それが、ハラジュの集團の一部はアム河を南渡してきていたが、一部はシル河の東に留まっていたという状態を示すのかも知れないと述べる (Minorsky 1940: 428)。12 世紀に書かれた al-Idrisi の *Nuzhat al-Muštāq fi Ixtrāq al-Āfāq* もまた、タラーズから東へ數日、下 Barsxān を越えたあたりにカルルクの冬營地があり、その近くにはハラジュの冬營地もある、と記している (OG: 714)。ところで、イドリースーはこれに續けて、タラーズから Kimak の居住地域へ向かう道の途上、キーマークの領域の西に隣接して、ハラジュの王が住む *Xyxm* の砦があるとも記している (OG: 714-5)。キーマークの居住地域は正確にはわからないが、イドリースーも、あるいは他のアラビア語・ペルシア語地理書、年代記も、その候補地としてはイルティシュ川流域を指し示している⁽³⁸⁾。カル

(36) وبلدان الاتراك التغرغز وبلدهم اوسع بلاد الترك حدهم الصين والتبت والخرلج و الكيماك والغز
والجفرو البجاناك والترکش و اذکش و خفشاخ و خرخيز وبها مسك والخرلج والخلج وهى من
هذا الجانب من النهر.
(IX: 31)

(37) ومن طراز الى نوشجان السفلى ثلثة فراسخ ثم الى كصرى باس فرسخان وهى جرمية تشتو بها
الخرليخية وبقربها مشتى الخليجية.
(IX: 28)

(38) Cf. 林 1976: 210-1; EI²: "KIMAEK". なお、*Tārix-i Gardizi* (TG: 551) に見えるキーマークの記述の中には次のようにある。

「キーマークの者達はこの川 (イルティシュ川) を尊び、崇拜し、「この川はキーマークの神だ」と言っている。」

مردمان کیماک آن آب را بزرگ دارند و او را بپرستند و سجده کنند و چنین گویند ایشان که
این آب خدای کیمیاکیان است.

ルクの冬營地に隣接してハラジュがいたという記述、そしてキーマークの西側にハラジュがいたという記述³⁹⁾から考えて、9-10世紀頃⁴⁰⁾にはハラジュがタラズの東方、おそらくはイシク・クル周縁から更に東にかけての地域に居住していた可能性が高い。*Jahān-nāma* が、ハラジュがカルルクの境域から到来した、と述べているのもこれに符合する⁴¹⁾。

以上の情報はもちろん、非常に断片的なものではあるが、それでもハラジュの故地がシル河の東方にあり、また後代までその邊りにハラジュの一族が暮らしていたという状況を示していると考えていいだろう。

39) 『新唐書』卷217下(標點本6146)には、結骨(キルギズ)に隣接した地に「駁馬」なる部族があり、彼らはまた「遏羅支(*at la tcie)」とも「弊刺(*biei lat)」とも呼ばれたとある(Cf. 森安 1977: 28-30 & ns. 113-5)。白鳥庫吉は「駁馬=まだらの馬」という漢語名から、『通典』卷200(中華書局本5493)に見える駁馬の別名「曷刺(*yat lat)」をテュルク語のala「まだらの」の意とし、「遏羅支」については「Turk語で微些な駁色をalakçi, alakčinというから、遏羅支はalakçiの對音」であるとする(白鳥 1970: 425-6, 615-20; cf. Ligeti 1971: 181-2)。また「遏羅支」の「遏」の字には「曷」というヴァリエントがあることが知られている。森安は、位置関係から見て、イドリースーの言う中央アジアのハラジュと「遏羅支=駁馬」が同一のものではないかと述べている。確かにイスラーム史料の記述においては、ハラジュはキーマークの西の隣人であり、キーマークはキルギズの西あるいは北に隣接しているとされ(Cf. Minorsky 1982: 305)、これらの諸部族の間に隣接関係があるという考えは成り立つ可能性がある。もしこの観察が正しいものであれば、全く不明であったハラジュの部族名に関する考察の一つの手がかりになるかもしれない。

40) キーマークの住地に至る道に関するイブン・ホルダーズビフの記述は、9世紀に書かれたTamīm b. Baḥr al-Muṭṭawwi'の旅行記に基づいている。タミームは840年以前にウイグルの都Qarabalgasunへ旅したと考えられている人物である。キーマークをも含めた、カルルクやハラジュの位置関係についての情報は、それゆえ9世紀前半までのものであると考えられよう。一方イドリースーは東方に関する情報を、イブン・ホルダーズビフやIbn Ḥawqal等の前代の地理書群に負っているが、キーマークに関する情報は他に類をみないものであり、おそらくは10世紀後半の状況を伝えていると考えられている(Cf. 林 1976: 211)。なおイブン・ホルダーズビフがNūṣajānと書く地名の正しい形はイドリースーにも見えるBarsxānであるが、この間違いはタミーム自身、あるいは初期の書寫段階での誤りであるとされる(Cf. Minorsky 1948: 290)。

41) デルファーは、ハラジュのテュルク語が、7世紀以前にSuyāb近邊にいたであろうArġu族の言語と共通するのではないかと、言う(Doerfer 1971: 171-2)。このアルグは、彼によればテュルク化したソグド人であるらしい。確かにソグディアナからスイアープにかけての地域にはソグド人がコロニーを形成していたことが知られており、玄奘もまた当該地域における商胡の存在に觸れている(『西域記』: 71; 水谷 1971: 19)。ハラジュが何者であったかに關わらず、彼らが7世紀以前の段階で、このアルグと接觸を持つような位置にいたのではないかと、というのが彼の推測である。

また、庄垣内(1989: 938)の、サモイロヴィッチの方言分類基準を改定したものを用いたテュルク諸語の分類において、ハラジュ語がトゥヴァ語、カラガス語、ハカス語等、はるか東方で用いられている方言と同じグループに入れられているのは、ハラジュの中央アジアからの移動という点を考えると興味深い。

3. 弗栗特薩儻那=Wujiristān とハラジュ

一方、トハリスターンからヒンドゥークシュ南麓へという第二の移動の段階については、その道筋の解明につながるかもしれないデータがフィールドワークを通じて得られている。筆者は既にこの点について別に論じた（稲葉 2003）が、行論の都合上、ここにその概略を再掲しておきたい。

1975年から77年にかけて、イタリア考古學調査隊はガズニの南西、QarabāgからJāguriにかけてのArgandāb川最上流域において、数多くの石窟寺院跡を発見した。この石窟群のうち最も東に位置するNā'i Qal'aについては、Qal'a-i Nāyという名で、13世紀以前に書かれたペルシア語年代記資料に言及が見られるが（TB: 557-8, 736-7; TG: 438; TS: 216-7など）、それらによって、この地域が王の幼子や後宮の避難場所、財寶の隠し場所などに用いられていたことがわかる。ガズナ/ガズニからそれほど遠くもなく近くもなく、さらに困難な山地の中であって接近が制限されることから、ガズナ朝時代、この地はまた囚人の牢獄、あるいは幽閉場所としても用いられた。とりわけ13世紀のČahār Maqālaには、ガズナ朝に仕えた有名な詩人であるMas'ūd S'ad-i Salmānが、同地に幽閉されていたことが記されているが、同時にこの史料はナーイ・カラ=Qal'a-i Nāyがوجیرستانという地域にあったとも記している（ČM: 45）。この地名こそ、玄奘の弗栗特薩儻那（*pruət lēt zrei sat t'an na）< *Wulijistānaが後代に變化した形であると考えられる。地域的にも、イスラーム史料のوجیرستان=Wujiristānは、現在のWardak, Urzgan州を覆う山嶽地域（カーブル、ガズニの西側の山嶽地域）に對應するが、このような地理的環境は、ザーブリスターンから険しい山嶽地帯にある弗栗特薩儻那を経由し、カーピシーの邊境に出た玄奘の旅程とも符合する。

このウジーリスターンに含まれるであろう、ガズニの西北、Jagatūにおいてバクトリア語の碑文が二點発見されており、そのうちの一點は佛教の三寶讃を内容とし、もう一點はテュルクの支配者に關連するものであると解釋されている（Humbach 1967; Sceratto 1967）。同様に、テュルクの支配者に關わるであろう碑文が、やはりウジーリスターンの一部をなした現在のウルズガン州において発見されている（Bivar 1954）。これらの状況は弗栗特薩儻那/ウジーリスターンの王が佛教を信奉しているという玄奘の記述と符合し、またカーブル、ザーブリスターンに政權を樹立した後も、テュルクの王達がウジーリスターンの山嶽地帯となんらかの關係を有していたことの證にとなっている。

この點に關して興味深いのは、先にあげたイスタフリーの記述の中に、ハラジュが「ゴールの裏側」に到來した、と記されていることである。ゴールはアフガン山塊の中央部、ハリールードの南側を指す地名で、後にはここからゴール朝が興ってくる場所であるが、ではその「ゴールの裏側」とはどこか。イスタフリーと同じく10世紀に書かれたal-

Muqaddasī の地理書には

「ヘルマンド川はゴールの裏側 (zahr al-Gūr) より流れ出て、南に向かい、ブストのまちへと流れ下る。」⁽⁴²⁾

とあり、それがアフガン山塊の東側、カーブル、ガズニ地域に面する邊りをを指していることが知れる。現在の行政区分で言えばウルズガン、ワルダク、さらにはバーミヤーンの南側あたりがヘルマンド川の最上流域を形成するが、これは上で述べた弗栗特薩儼那＝ウジーリスタンと同じ場所である。つまり、この地域を介してハラジュと、7世紀に弗栗特薩儼那からカーブル、ザーブリスターンに進出して王國を建てたテュルクとの結びつきが保證されると言えるのである。

ところで、この石窟群の発見者でもある G. Verardi によれば、これらの石窟は山腹に不規則なレヴェルで穿たれ、互いが階段やトンネルで連絡するという獨特の形状をもっているが、それは北西インドからアフガニスタンにかけての地域の中で、ひとりバーミヤーンの石窟群とだけ類似する (Verardi 1977: 17–20; cf. Verardi forthcoming)。この事實は當該時期、バーミヤーンとウジーリスタンになんらかの關係あるいは連絡があったことを示している。そして上で假定したハラジュの移動を考えると、この關係・連絡がハラジュと無關係であったとは考えられない。言うまでもなく、バーミヤーンはヒンドゥークシュ山脈越えの要衝として榮えた場所である。また、ローブのバクトリア文書は、ヒンドゥークシュ北麓のハラジュがフルム川沿いに居していたらしいことを伝えるが、この川沿いに Saygān からバーミヤーンに至るルートはローブの王の監督下にあったと考えられている (Cf. Grenet 2002: 215–7)。それゆえ、もし北麓のハラジュが山を越えて南に至るのであれば、バーミヤーンを経由して行くのが自然であり、そこから彼らがウジーリスタン方面へ移住したというのは最もありえそうな状況なのである⁽⁴³⁾。バーミヤーンを経て彼らがどのようにしてウジーリスタンに定着したのか、具體的にはわからないが、前節に引いた玄奘の旅程は、バーミヤーンからカーピシーをバイパスして山嶽地帯沿いに南下してアルガンダーブ最上流域に入る道があっただろうことを示している。

(42)

نهر هيرمند يخرج من ظهر الغور نحو الجنوب فينحدر الى مدينة بست.
(Muq.: 329)

(43) このルートが6世紀以降頻繁に使われたことについては、桑山 1990: 122–31 および、Le Berre 1987 を参照せよ。

V ハラジュの移動時期

次に、フルム川流域からパーミヤーンを経てウジーリストーンに至るという移動がいつ行われたのか、という問題を考える。もちろん、正確な時期を畫すような情報があるわけではないので、この問題をハラジュの歸屬問題に還元して考えてみたい。すなわちハラジュが、かつてマルクヴァルトの考えたようにエフタルの一部であったのか、あるいはテュルク語を喋る集團であったことからこれを突厥の一部と考えるか (Harmatta 1996 は明言はしないものの、その方向で考えているようである) によって、彼らがトハーリストーンに到來した時期のおおよそを定め、そこからヒンドクークシュを越えた大體の時期を推定しようとするのである。

1. ハラジュとエフタル・突厥

10 世紀に al-Xwārizmī によって書かれた百科全書 *Mafātih al-'Ulūm* の中には次のような記述がある。

「エフタル (al-hayāṭila)。かつて強盛を誇った人々。トハーリストーンの地域を領有した。ハラジュと Kanjīna のテュルクは彼らの殘滓である。」⁽⁴⁴⁾

一方、第四章第二節にひいたイスタフリーやナジーム・バクラーンらはハラジュをテュルクの一種であるとする。この二種の言明をどのように整合させて解釋すべきか、先學達は様々に議論を行ってきた。當然、議論はエフタルの ethnicity におよぶものとなっている。

マルクヴァルトや、後にその説を補完した G. Clauson と C. E. Bosworth は、ハラジュがエフタル部族連合體の一部を形成した民であり、本來はサカ系、すなわちイラン系の部族に由來するが、後にテュルク化した人々ではないかと考えた。その一つの根據はハラジュとともに言及される Kanjīna の存在である。これは通常アム河の支流沿いの山嶽地帯に暮らす Kumedh の民を指すと考えられており、この Kumedh はテュルクではなく、プトレマイオスに言及されるサカの部族 Kōmēdoi に由來すると言うのである (Clauson & Bosworth 1965: 8-9)。Litvinsky & Zamir Safi (1996: 181) によれば、マルクヴァルトに起源を持つこの見解はその後定説化しているという。

一方、フライと A. Sayili はエフタルがそもそもテュルクであり、ハラジュその他の、イスラーム初期にホラーサーン方面にいたテュルク達はその殘滓であるのだと考える (Frye & Sayili 1943: 207)。ラフマンもこの見解に従い、初期イスラーム時代の史料に登

(44) الهياطلة جيل من الناس كانت لهم شوكة وكانت لهم بلاد طخارستان و اترك خلع وكنجينة من بقاياهم.
(M'U: 119-20)

場する「テュルク」とはそもそもテュルク語を話すエフタルであるか、あるいは混血した人々であったのではないかとする。もちろん、ここでハラジュはその「テュルク語を話すエフタル」に含まれるのである (Rehman 1988: 42)。

M. Maróth (1980: 272) は、エフタル部族連合體の中には様々な遊牧勢力が含まれていたであろうし、ハラジュもそのような者達の一つであった、すなわち、エフタルとハラジュの間に必ずしも部族的血縁的連續性を想定しなくてもよいと考えることで、フワーリズミーの記述とイスタフリーその他の記述を整合させようとしている。

ハラジュのテュルクとしての側面はミノルスキーによって大きくとりあげられた。彼は 20 世紀初頭に、現在のイラン共和國西部、Sāva の西南、Qum の西にある、その名も Xalajistān という地域出身の三人の人物に会い、彼らからの情報に基づいて、同地で話されていたテュルク系の言語に關する最初の報告を行った (Minorsky 1940)。その後、1968 年春、ミノルスキーの調査の不足を補うべく、テュルク語學者 G. Doerfer は、彼のゲッティンゲンのチームをハラジスターンに派遣して同地における言語調査を行い、その成果をいくつかの刊行物として発表した (Doerfer 1971; 1987 など)。ミノルスキー、デルファーともに現在のハラジスターンで話されている「ハラジュ語」が、テュルク語の極めて古い段階の形を保持することに特に注目している。例えばハラジュ語に見られる、母音で始まる單語の前に h- という子音を持つという特徴について、デルファーはそれをテュルク祖語の段階以降、他のテュルク語において失われたものが、ハラジュ語においてのみ保持されたのだと考えた (Doerfer 1971: 163-5)⁽⁴⁵⁾。それゆえデルファーに従うならば、ハラジュは古テュルク語の時代にまで遡る、テュルクとしてのアイデンティティーを付與されることになる。

2. 西突厥のトハーリスターン支配の様相

言語の問題とは別に、そもそもハラジュがトハーリスターンからヒンドウクシュを越えるようになった契機として、どんな事態が想定されるのかという点も検討してみる価値がある。

周知のように 5 世紀以降トハーリスターンはエフタルの支配下にあったが、6 世紀中頃、サーサーン朝と結んだ突厥の室點蜜が西方遠征を行い、バクトリアからガンダーラにかけてのエフタルの支配を瓦解せしめた。『隋書』卷 83 挹怛國傳 (標點本 1854) によれば、

(45) ただし、ハラジュ語に關しては、それを單にアゼルバイジャン語の一方言に過ぎないとする反論も出されている (Cf. 林 1992: 280-3)。

この時、吐火羅の地には室點密配下の通設字詰が配置されている。その後、トハリスターンにおける突厥の動向は不明となるが、629年頃、統葉護可汗の息子咄度設が同地を支配し、その長男が特勤の位に就いていたことが玄奘の傳記から知れる（『慈恩傳』：31）。この長男は後に設、葉護となり、父の後を継いでいる。ところが、641年頃、トハリスターンは乙毘咄陸可汗の攻撃を受け、その後、配下の者の叛亂に遭ったこの咄陸可汗は逃れて吐火羅に向かったという（『舊唐書』卷194下／標點本5185；『新唐書』卷215下／標點本6059）。しかしその約10年後の652年、月氏都督府を定めた際に吐火羅葉護となったのは阿史那烏濕波であったというから（『冊府元龜』卷966外臣部繼襲／臺灣中華書局印行本11365）、これは統葉護可汗の系統であろう。その次に吐火羅が登場するのはまさしく661年、吐火羅にあらためて天馬都督府が置かれた時のことである。内藤みどりは、上にあげた乙毘咄陸可汗と吐火羅の關係を考察し、この可汗は、玄奘が述べる咄度設の長男であった特勤と同一人物ではないかと述べている（内藤1988:224）。これに従うなら、統葉護可汗以降も、吐火羅の支配權は統葉護可汗直系の阿史那氏の葉護によって保持されていたことになる。

ところで、ローブ起源のバクトリア語文書の中に、テュルク關係の單語が現れるようになるのは639年の紀年を持つ契約文書（文書N/Sims-Williams 2000: 74-9）以降である。そこではローブの支配者が「榮光ある qaghan, tapaghligħ iltäbir」と呼ばれ、同時に「Khulkhan, inal tarkhan, Wilarganの主」なる人物も登場する。一方、611年の紀年を持つ別の賣買契約文書（文書L/Sims-Williams 2000: 64-70）にはテュルク語由來の單語は全く登場しない。個々の文書の性格や作成にいたる經緯の詳細が不明なため、嚴密な議論を行うことは不可能ではあるが、おおまかにこの二つの文書の間の時期にトハリスターンにおいて突厥の支配が浸透したと言えるのではないか。そうしてその契機となった出來事を推測する手がかりは、ローブの支配者に付された稱號 iltäber と、統葉護可汗が配下の土着の支配者達に頡利發の稱號を付與したとの『舊唐書』の記述であり、それはおそらく統葉護可汗が、息子咄度設を總督としたのを機に統治體制を再編成し、トハリスターンに突厥による初めての實效的な統治を實施したことを示しているのだろう。

このような狀況を勘案すると、ハラジュのヒンドークシュ南方への移住に關しては大きく三つの可能性を想定することができる。すなわち、(1) マルクヴァルトらの豫想の通り、ハラジュがもともとエフタルの部族連合體の一部をなしていたテュルク系部族で、(a) 時期は不明ながら、西突厥が到來するより以前になんらかの理由で南へ移住した、(b) 西突厥によるトハリスターン支配と牧地の接收という壓力を受けて南へ逃れた、(2) 彼らは突厥部族連合體の一員として他のテュルク系部族とともにトハリスターンに到來し、その後なんらかの理由で南方へ徙った。

このうち(1)の(a)の場合、ハラジュの元來の故地をアム河以北と考えるなら、彼らがエフタル部族連合體の一員となってトハリスターンへ移動してきた時期の上限はエフタルの支配が最も東方へと及んだ5世紀半ば(本章第四節参照)であるから、それから西突厥が到來する6世紀後半までの時期のどこかで移住がなされたことになる。

一方、(1)の(b)か(2)かという判断については、彼らがエフタル連合體の一員だったのか、突厥連合體の一員だったのかが問題となるであろう。それを直接判断できる材料はないのだが、後代のアラビア語、ペルシア語資料の情報がある程度の参考になりそうである。

3. ハラジュの起源説話

マフムード・アルカーシュガリーの *Diwān Luġāt al-Turk* はテュルクマンに関する説明の項目の中で、ハラジュについての以下のような話を載せている。

「テュルクマン。彼らはオグズである。彼らがそう呼ばれるようになった背景には一つの物語がある。Dū al-Qarnayn (アレクサンドロス) は Samarqand を通過し、テュルクの住地を目指していた。その当時のテュルクの王は Šū という名前であった。彼は大軍を擁していた。Balāsāgūn の近くにスイアープの要塞を建設し始めたのは彼であった。彼は毎日、スイアープの要塞において、彼の軍のアミール達のために360の太鼓を打ち鳴らさせていた。

ある者が彼(Šū)に、この者—ズー・アルカルナインのことだが—が接近してきていると告げた。「彼と闘いましょうか? あるいは貴方はどんな命をくだされますか?」そこで Šū は40人の將軍を哨戒のため、そしてズー・アルカルナインの渡河時を知らせるために Xujanda の川岸まで派遣した。ところが、この先遣隊は王の兵士の誰にも知られないまま出發してしまった。王は先遣隊についてひどく心配した。彼は遠征にも持っていく銀の甕を持っていて、それに水を一杯にはってアヒルやガチョウを泳がせていた。人々が彼に「闘いましょうか?」と問うと彼は答えた。「見よ。このアヒルやガチョウたちが水に潜るさまを。」このことは人々を不安にさせた。王は戦う準備も撤退する準備もできていないと考えたからであった。

ズー・アルカルナインは渡河し、先遣隊は夜半に彼に遭遇し、彼の渡河を報告した。彼(Šū)はその夜、警報を發して東方へと逃亡した。彼らの王が何も告げずに消え去ってしまったので、人々は大騒動になった。乗り物を見つけることができた者はみな、それに飛び乗って王に同行した。こちらの者があちらの者の乗用獸をひったくり、あちらの者がこちらの者の乗用獸をひっつかみ、というありさまだった。そうして、朝には幕營はすっからかんの平地になっていた。その當時は、まだまちもむらも

一つもつくられていなかったのだ。タラーズも Isbijāb もバラサグンなどなども。全て後につくられたものだ。當時の人々はみな遊牧民だった。

王が人々とともに撤退してしまったあと、家族をつれた 22 人の者のみが残った。彼らは夜のうちにまにあわせて荷駄をまとめて出発することができなかったのだ。彼らは、私がこの書の最初に名前をあげた者達で、家畜への焼き印で區別されていた。Qiniq, Saigur などなどである。さて、これら 22 の家族は徒歩で行けるところへ向かうか、この場所に留まるか逡巡していた。すると、二人の男が背に荷物をしょって、家族と一緒に軍隊の後をたどって行こうとしているのを見た。彼らと出會ったとき、この二つの家族は疲れ果て、汗まみれで荷を擔いでいた。彼らは立ち止まり、この [22 の家族に] 相談した。そこで彼ら—22 家族—は言った。「あんたがた、二家族よ。この者—ズー・アルカルナインのこと—は旅する者で、一所に留まることはない。彼は我らをも放っておくだろう。我らは自分の土地に住めるのだ。」テュルク語では qāl ač, すなわち「お前達、止まれ、とどまれ」。それ以後、彼ら（二家族）は Xalaj (xalač) と呼ばれるようになった。これが Xalajiyya の起源である。彼らは二部族からなるのだ。

ズー・アルカルナインがそこへ到着し、區別する印とテュルクの印をもったこれら一團の人々を見ると、彼は言った「turk mānand」すなわち「テュルクのように見える」と。これが彼の時代以降我々の時代にいたるまで、彼らの名前として残った。もともと彼らは 24 部族であったが、ハラジュの二部族はいくつかの點で [残りの者達とは] 異なっていた⁽⁴⁶⁾。それゆえ彼らのうちには数えられない。これが起源である。」(Dankoff & Kelly 1984-ii: 363)

また、14 世紀頃、トゥルファンあるいはキルギス草原において作成されたであろう、ウイグル文オグズ・カガン説話は次のように記す。

「兵の中に雄々しいベグがいた。天をも悪魔をも恐れなかった。行軍に、寒さに耐える男だった。そのベグは山々に入った。進んだ。9 日ののち、オグズ・カガンへ斑の馬を連れ歸った。ムズ・タグでは非常に寒かったので、かのベグは雪につつまれていた。真っ白であった。オグズ・カガンは喜んで笑った。言った。「おお、なんじはこのベグたちになれ、頭と。永久になんじの名カルルク（雪をいだく）であれと言った。多くの寶石を與えた。前進した。また途中で大きな家を見た。この家の壁は金であった。

(46) 原文 *infaradatā 'anhā bi-b'aq al-ašyā*。『いくらかの者達とともに彼らから離れていった』という意味か？ Cf. Dankoff & Kelly 1984-ii: 363, n. 3。

窓は銀，屋根は鐵であつた。閉まっていた。鍵はなかった。兵の中に非常に有能な男がいた。彼の名はデミュルデュ・カグル (dömürdū Kağul) といった。彼に命じた。「なんじここにとどまれ，開け屋根を (sen munda kal, aç kalik)。開いた後，來たれ牙營に」と言った。このゆえに彼にカラチと名づけた。」(本田 & 小山 1973: 38-40) ちなみに，同じく 14 世紀，フレグ・ウルス治下において編纂された *Jāmi' al-Tawāriḫ* はハラジュの名稱のエティモロジーを次のように説明している。

「次のように語られている。オグズがゲール，ガルチスタン地方から自分の古遊牧地に向かつて歸途に就いた時のことである。途中で大きな山まできた。大雪が降った。この降雪のため若干の家族が落伍した。何人であれ後れることは法 (yāsāq) に反したので，オグズはこれを是認せず，「降雪のためどうして後れてよいものか」と言った。その若干の家族をカルルクと名付けた。[カルルクとは]「雪の主」という意味である。カルルク全部族がこの集團から出現した。

次のように語られている。オグズが Isfahān を占領して歸途に就いた時のことである。途中である女が子供を生んだ。食べ物がないため乳が出ず，兒は飢えた。彼女の夫はそのために後れてしまった。ジャッカルが雉を捕らえた。男は棒を投げてジャッカルから雉を奪って，食べ物として妻に與えた。妻は乳が溜まり，兒に乳をたっぷり飲ませた。數日後本軍に追いついた。如何なる理由であれ，後れることは法に反していたので [オグズ] は怒った。「qāl āj」と言った。その意味は「飢えたまま残れ」ということである。このため彼の一族は Qalaj と呼ばれている。」⁽⁴⁷⁾

4. ハラジュの孤立

ハラジュの名稱の起源に關するこれら三つの傳承から明らかになるのは以下の三つの

⁽⁴⁷⁾ 米گویند که چون اوغوز از ولایت غوز و غورستان بیورت قدیم خود مراجعت کرد در راه بکوهی بزرگ برسید و برفی عظیم بباید و چند خانه بسبب آن بارندگی تخلف کردند . چون یاساق نبود که کسی باز مانند اوغوز نپسندید و فرمود که چگونه بواسطه بارندگی کسی باز ماند و آن چندخانه را قارلوق نام نهاد یعنی خداوند برف و تمامت اقوام قارلوق از نسل این جماعت پیدا شده اند . میگویند که چون اوغوز اصفهان بستند و عزیمت مراجعت کرد، در راه زنی بچه آورده، بسبب بی غذائی شیر نداشت و بچه گرسنه شده، شوهرش بدان واسطه باز ماند . و شغالی تذروی را گرفته بود، مرد چوبی انداخته و از او باز گرفته بخوردن زن داد و او را شیر در پستان در آمده بچه را شیر کرده و بعد از چند روز بلشکر رسیده و چون یاساق نبود که بهیچ علت کسی از او باز ماند، اوغوز از آن مرد رنجیده گفته قال آج یعنی بمان گرسنه بدان سبب اروغ او را قلج می خوانند .

(JT-i: 34-5 ; cf. 本田 & 小山 1973: 54)

點である。

- (1) ハラジュの元來の名稱が Qalač であったと考えられていた。
- (2) ハラジュはカルルクと對になるものとみなされていた。
- (3) ハラジュはいわゆるオグズ諸部族とやや異なる、あるいは早期に分離した人々だと考えられていた。

(1) は元來の名稱の語末の子音が -č であったであろうという前述の推論を補強してくれるものである。また語頭の q- の音に關しては、第三章において述べた通りである。

(2) については、おそらくハラジュの故地の問題と關わりがある(第四章第二節参照)。カルルク自體がどのように西へ向けて移住していったのかの詳細は不明だが、プリツァークはシャヴァンヌをひきながら、その元來の住地を、① ザイサン・ノールからカラ・イルティシュ川に沿ってウルングル・ノールにかけて、② ザイサン・ノールからタルバガタイ山を越えて、アラクル海にかけて、③ アラクル海からウルングル・ノールにかけて、という三本の線で區切られた領域にしている (Pritsak 1951: 272)。森安 (1979: 220-1) によれば、8 世紀前半、カルルクの住地はアルタイ山脈の西方からカラ・イルティシュ川流域であった。その後、744 年にウイグルとカルルクの連合軍がバスマルをうち破ったあと、カルルクは西方へ逃れ去ったが、全部が移動したわけではもちろんなく、東方に留まった者達もいた。前述のごとく、その後カルルクの據點の一つとなったタラズからイシク・クル周邊にかけての地域にはハラジュの一團が暮らしていたと考えられ、両者がなんらかの接觸と交渉を持ち續けていた可能性は高い。イスラーム史料においてしばしば両者がともに言及されるのは、第一に名稱の類似性によるのであろうが、このような歴史的・地理的環境も影響していると考えられる。

(3) がここでは一番重要な點である。カーシュガリーの情報は、あくまで起源説話ではあるが、11 世紀當時ハラジュが、テュルクとはいへ、他のテュルク部族とは異なる存在として認識されていたことをその背景に有しているはずである。カーシュガリーの「オグズ」が示すテュルク系部族は引用文中にもあるように 22 部族である (Cf. Dankoff & Kelly-i: 101-2)。あげられている部族名の中には當然、ハラジュもカルルクもない。一方、いわゆる Toquz Oguz は 7 世紀に形成されたウイグルを中心とする部族連合體、あるいはその後の西ウイグル王國を示すものとされるが (Cf. Hamilton 1962; 片山 1981)、そこでいう九つの姓の中にもカルルクやハラジュはみられない⁽⁴⁸⁾。

(48) ただし、片山は oguz は特定の部族名ではなく、漢語史料に「九姓」というところの「姓」を意味する言葉であると考えている (片山 1981: 40-3)。一方イスラーム史料は明らかに Guzz, Oguz を特定の部族あるいは部族集團の名稱として用いている。

イスラーム史料にあらわれるGuzzについては、それが何をあらわすのか、なかなかに定めたいが、Ibn al-Aṭīrはセルジューク朝のスルタン、Sanjarが、Balx方面にいたグズに捕らえられた事件に關して、

「ホラーサーンの著作者達のある者は彼ら(グズ)に關してより多くの明確な情報を記している。次のように言われる。このグズは遙か遠くのテュルクの境域から、al-Mahdiの時代(775-785年)にMā warā' al-Nahrに移動してきた人々で、イスラームを受け入れ、魔術と奇蹟の行い手であったal-Muqannā'を、彼の叛亂が終わる時まで援助した。軍勢が彼(ムカンナア)に向かって進んでくると、このグズ達は彼を見捨て、降伏した。それは、彼らが暮らした全ての王國において彼らのならいであった。彼らは同じようなことを、Xāqānīの王達に對しても行ったが、カルルクのテュルク達が彼らを壓倒し、その故地から追いやった。」⁽⁴⁹⁾

と述べている。これは766年にカルルクがチュー川流域を手中にしたことによって、壓迫されて西へ向かったテュルクが、西トルキスタンに出現したという事件を述べたものだと理解すれば、當時の状況と整合する。一方、10世紀の20年代にヴォルガ・ブルガル方面に旅したIbn Faḍlānは、ホラズム地域あるいはその西隣の地域において、'al-Guzziya'と呼ばれるテュルク部族に遭遇している(家島1969:19)。これらから、イスラーム時代初期の史料に見えるグズ/オグズについては、主に8世紀以降に西トルキスタン方面に移動してきたテュルクを意味すると考えておく(Cf. Minorsky 1982:311; EI²: "GHUZZ")。もちろんそれに先だって西へ到來した一團もいただろうし(Frye & Sayili 1943:204)、西突厥の部族連合體が崩壊した後、各地に四散した人々が一括してグズと呼ばれたという事態も十分にありうる(Cf. Minorsky 1982:267)。そうして、カーシュガリーのこの説話は、ハラジュがそれらのテュルクよりも早い時期に中央アジアから西へ向けてスタートした人々であったことを示唆していると解釋できる。

同様の推測は、慧超の記録からも引き出すことができる。すなわち彼は、罽賓や謝闥の突厥が北の「突厥霸王」とは別のものだと言っているのである(『慧超傳』: 38, 122-3)。

(49) وقد ذكر بعض مؤرخي خراسان من اخبارهم ما فيه زيادة وضوح وقال إن هؤلاء الغز قوم انتلقوا من نواحي الثغر من أقاصي الترك إلى ما وراء النهر في أيام المهدي، واسلموا واستنصر بهم المقنع صاحب المخاريق و الشعبة حتى تم أمره فلما سارت العساكر إليه خذله هؤلاء الغز وأملموه وهذه عادتهم في كل دولة كانوا فيها وفعلوا مثل ذلك مع الملوك الخاقانية إلا أن الأتراك القارغيلة قمعوهم و طردوهم عناوطانهم.

(IA-xi: 178)

ここでいう「突厥霸王」はもちろん阿史那氏の吐火羅葉護に他ならないだろう。この時期すでにトハリストーンはムスリムの蠶食を受け、Qutayba b. Muslim による征服後は吐火羅葉護の勢力も大いに弱まってはいたが、それでも彼が反アラブのシンボリック的存在であったことは、8世紀初頭のNezak Tarxānによる反アラブ大叛亂に吐火羅葉護が擔ぎ出されていたことからわかる（Cf.『慧超傳』:148）。

さらに前述のごとく、イスラーム時代の史料には「ハラジュとテュルク」「ハラジュとグズ」「ハラジュとテュルクマン」といった表現が頻出し、ハラジュが、テュルクやグズの集團と區別されているように見える。これがどれほど實態に即したもののなのかを明らかにすることはできないが、それでも當時、ハラジュがいわゆる「テュルク」とはやや異なる集團と考えられていたと推測することはできる。

また、本章第一節で紹介した通り、デルファーはハラジュの言語が古テュルク語の特徴を保存していると考え、それがオグズ語派やキプチャク語派その他の、いわゆるテュルク語とは別種のグループを形成していた可能性を示すが（Doerfer 1971: 175-81）、これもまたハラジュが他のテュルク族から早期に分離したことを示唆するとも考えられる。

そもそも、エフタルの王國が、王族エフタルを中核としつつ、他の多くの遊牧部族を巻き込みながら擴大したことは明らかである。『洛陽伽藍記』卷5に

「[エフタルは] 諸國の朝貢を受けており、南は牒羅まで、北は敕勒まで、東は于闐におよび、西は波斯に至るまで、四十餘國がみな朝貢にやってくる。」⁵⁰⁾

とあり、『梁書』卷54に

「[エフタルは] その周邊諸國である波斯、盤盤、罽賓、焉耆、龜茲、疏勒、姑墨、于闐、句盤といった國々を征服し、千里の地を開いた。」⁵¹⁾

とある通り、5世紀末から6世紀はじめ、エフタルの支配は東トルキスタン方面にまで及んでいたが、その際、それに巻き込まれる形で移動をはじめた部族がいたと考えることは、後のセルジューク朝時代やモンゴル時代に、グズやテュルクマン諸部族が遠くアナトリア半島まで到達した例を見ても、十分あり得ることである。また、『大唐西域記』卷12 呾摩咀羅國（エフタルに同定される）の條には

「この國は昔は強國であり、王は釋種であった。葱嶺の西の國々は多く臣伏していた。突厥と境を接したので突厥の風俗に染まったのである。その上他國を侵略し、自國の

50) 受諸國貢獻。南至牒羅，北盡敕勒，東被于闐，西及波斯。四十餘國，皆來朝貢。（大正藏卷51: 1019b）

51) 征其傍國波斯，盤盤，罽賓，焉耆，龜茲，疏勒，姑墨，于闐，句盤等國，開地千里。（標點本812）

境域を守った。こういうわけでこの國の人は異境に離れ住み、數十の堅城にそれぞれの君主を立てている。⁵²⁾

とあるのはそれにかかわる状況を示しているとも讀める。

以上から、ハラジュの歸屬の問題に関してはマルクヴァルト、ボズワースらの推測の如く、それをエフタル部族連合體の一員であった、あるいはその擴大の波にのみ込まれたテュルク系部族と考えたい⁵³⁾。そうであれば彼らのヒンドゥークシュ南側への移住は、エフタルの動向と関連して考えられるべきである。突厥による征服以前にハラジュがトハリスターンのどこに居住していたのかは不明だが、桑山(1990: 399-400)によれば、優秀な牧地を提供する Surxāb 川流域と異なり、フルム川流域は河谷狭小で耕地も少ない。このような地域に彼らが入り込んできたこと自體を、突厥の攻略の影響と考えることも可能であろう。北からの壓力により、そこからさらに山を南に越えた人々もいた、というあたりが事態の在り方だったのではないか。もちろんハラジュのヒンドゥークシュ越えが一氣呵成になされたものである證據はどこにもない。彼らが西突厥の征服以前から徐々に移動をし始めていた可能性もあるという点には留意しておかねばならないだろう。

5. Nezak Šāh とエフタル・突厥

ヒンドゥークシュ山脈南麓とエフタルの関係については、いわゆる Nezak Šāh 貨幣に關わる問題、すなわちカーブル、ザーブリスターンのテュルクの王國に先立つ時代の、この地域の支配者の系統について觸れておかねばならないのだが、残念ながら筆者は現在それについて十分な検討を行う準備がない。

エフタルの王權の崩壞以後、山脈南麓、特にカーピシーに根據を置いたヒンガル朝(ネーザク朝)については、これをエフタル系と見るか、土着の政權と見るか、二つの立場がある。ゲブルや M. Alram は、貨幣の分類に基づいてこれをエフタル系と考えたが、桑山はカーピシーとエフタルの関係を證する如何なる資料もないことから、これをエフタルの北西インド支配崩壞後に臺頭した土着勢力と考えた。ハルマッタはやや異なるシナリオながらカーピシーの王家をやはりエフタルの王家につらなるものとしているし(Harmatta 1969: 406-9)、グルネもカーピシー王家はトハリスターンにおけるエフタ

52) 其先強國，王，釋種也，葱嶺之西，多見臣伏。境鄰突厥，遂染其俗，又爲侵掠，自守其境。故此國人流離異域，數十堅城，各別立主。(『西域記』: 969; cf. 水谷 1971: 377)

53) 『新唐書』卷43下(標點本 1136), 『唐會要』卷73(中華書局本 1324)には、嚙唃部落活路城の大汗都督府の下、波知州が置かれた場所として「羯漭支(*kiet lau tcié)城」という地名があげられている。これがハラジュと関連を持つ地名であるなら、エフタルとハラジュとの關係を示す傍證となるかもしれない。

ル政權の崩壊の際に南へ逃れてきた分枝に由來するのだらうとする (Grenet 2002: 217-8)。

そもそもゲブルが立論の根據とした Nezak Šāh 貨幣は、ある程度の量が發見されている割には紀年や發行地を缺くものが多く、またそのほとんどが考古學的手續きを経て發見されているものではない。いきおい貨幣形式やモチーフが分類と編年の頼りになっていることから、なかなか統一的な解釋が生まれにくいという問題を抱えており、桑山 (1993: 429) が指摘するとおり、それぞれの研究者の歴史認識の枠組みの中で貨幣が割り付けられてきたといえる。その意味ではハルマッタもグルネも貨幣のみに立脚しているわけではもちろんなく、周邊の状況からヒンドークシュ南麓におけるエフタルの存在を推定しているのである。ただ、アルラムが最近の論文において述べているように、極めて異なった歴史像のもとに組み上げられたゲブルと桑山の見解には共通する部分もある⁵⁴。例えば桑山は Nezak Šāh 貨幣の一部と、ガンダーラ方面で發行されたと考えられている Alxon という銘を持つエフタル貨に共通するマークを見いだしている。Alxon という語の意味や⁵⁵、Nezak Šāh 貨幣との関係⁵⁶などを勘案しつつ、ヒンドークシュ南側におけるこれらの貨幣の意義付けを検討していく必要がある。

貨幣學者ならざる筆者は、これ以上述べることは持たないのだが、一點だけこの Nezak なる名稱について指摘しておきたい。7世紀におけるアラブ・ムスリムの東方進出の過程において、ヘラートからトハーリスターンにかけての地域で活發に活動した Nezak Tarxān なる人名、あるいは稱號が知られている。かつて Emel Esin (1977) は、al-Kūfi の年代記 *al-Futūḥ* (9世紀) の記述をもとに Nezak を Tirek と読み、Nezak Tarxān は Türgiś の族長の一人ではないかと述べたが、グルネはこの説を根據がないとして斥けている (Grenet 2002: 216, n. 22)。確かに、ほぼクーフィーの字形にのみ従いながら、Tirek という読みを採るのはいささか強引すぎると思われる。tirek という語自體、他の用例がそれほど豊富に知られているわけではない。それなのに、他ならぬ Nezak Šāh 貨幣の銘の解讀者であるハルマッタは、何故かエスィンに従って Nezak Tarxān を Tirek

(54) アルラムも Nezak 朝が土着の政權である可能性を認めている。Cf. Arlam 1999-2000: 134-5, n. 25

(55) 從來の議論と問題点については、Aram 1999-2000: 131; Grenet 2002: 206, n. 5を参照。ゲブル (1967-i: 56) は alxono と読み、それらがフンの南下の第二波に屬すると考え、フンバッハ (1966: 54) は alxonno, G. D. Davary は alxanno と読む。Cf. Davary 1982: 93-4。

(56) ゲブルやアルラムは、4世紀末に “Alchon Hunn” がカーピシー〜カーブル地域を征服し、その後そこから東へ移動してガンダーラを支配したと考える。Xiṅgila や Toramāṇa, Mihirakula と連なる王達の貨幣はそこで發行され、一時期、Alxon 貨幣と Nezak Šāh 貨幣は並行していたとされる。Cf. Arlam 1996。

Tarxānに読み改めている。一方 Nezak Šah についてハルマッタは、Nezak を漢語史料に見える「泥孰／泥熟」なる語と同定し、さらにそれを、特に阿史那賀魯治下の弩失畢部の一つ、阿史結泥孰俟斤部 (Cf. 『舊唐書』卷 194 下 / 標點本 5186; 『新唐書』卷 215 下 / 標點本 6060)⁵⁷ と結びつけ、カーピシーの王統を阿史結部に属するものと述べる (Harmatta 1996: 374)。

F. W. K. Müller は、マニ經讚美歌集にある一般信者の名前のリスト中に見える “nižûk sângûn (nyjwk s'ngwn)” の *nyjwk* が漢語史料の泥孰 (*niei ziuk) にあたると考えたが (Müller 1913: 10, 39), 假にこれがさらに *nyčky* < Nezak と同定できるとするなら、我々は中國史書の中に相當数の用例を見いだすことができる。そしてそれは阿史結部とのみ特定の結びつくものではなく、阿史那氏をも含む突厥統治下の様々な部族の長によって名乗られていた名前らしい。例えば貞觀 23 (649) 年、太宗は右驍衛郎將の高侃を派遣し、ウイグルや僕骨らを率いて車鼻を攻撃させたが、車鼻に従っていた歌邏祿泥孰闕俟利發や拔塞匍處木昆莫賀咄俟斤らが領民を率いて車鼻にそむき投降してきた (『舊唐書』卷 194 上 / 標點本 5165; 『新唐書』卷 215 上 / 標點本 6041)。この記事に見える人物は、カルルクの泥孰にして、iltäber の稱號を名乗っているのである。その他の用例⁵⁸から見ても、突厥にお

57) この部を率いたと目される「泥孰俟斤阿悉吉度悉波」なる人物の名前が、高宗乾稜前の蕃臣像背面の銘に見られる。Cf. 内藤 1988: 34。

58) その他の例としては以下のものがある。

- (a) 貞觀年間 (627-49) に瀚海都護府に隣接していた泥孰闕を説諭し降伏させた (あるいは闕泥孰部) (『舊唐書』卷 185 上 / 標點本 4786; 『新唐書』卷 197 / 標點本 5619)
- (b) 貞觀八年 (634) に頡利可汗が敗死した後、唐に内属してきた諸部族のうち、伊吾にいた七姓種落の一つに泥孰特勤なるものがいた (『舊唐書』卷 62 / 標點本 2388; 『新唐書』卷 99 / 標點本 3911)。
- (c) 貞觀十三年 (639) 以降、結社率が叛亂を起こしたため、太宗は突厥の者達を黄河の北に移し、右(武)侯大將軍・化州都督・懷化郡王思摩を、乙彌泥孰俟利苾可汗に任じ、李姓を與えて黄河の北に牙庭をつくらせた。左屯衛將軍の阿史那忠を左賢王 (左殺→Tölis Šad) に、左武衛將軍の阿史那泥孰を右賢王 (右殺→Tarduš Šad) に任じて可汗を補佐させた (『舊唐書』卷 194 上 / 標點本 5163; 『新唐書』卷 215 上 / 標點本 6040; 『資治通鑑』卷 195 / 標點本 6148; 『通典』卷 197 / 中華書局本 5416)。
- (d) 貞觀二年 (628 年)、統葉護可汗が伯父莫賀咄俟屈利俟昆可汗 (Bağatur Köl Sibi Qagan) に殺された後、西突厥の内訌を経て咄陸可汗となった泥孰莫賀設 (『舊唐書』卷 194 下 / 標點本 5182-3; 『新唐書』卷 215 下 / 標點本 6057-8; 『資治通鑑』卷 193, 194 / 標點本 6086, 6097; 『通典』卷 199 / 中華書局本 5456)。
- (e) 貞觀十二年 (638), 乙毘咄六 (陸) 可汗となった欲谷設の武將であった泥孰吸。なおこの人物の部下に胡祿屋という人物が居た (『舊唐書』卷 194 下 / 標點本 5185; 『新唐書』卷 215 下 / 標點本 6059; 『資治通鑑』卷 196 / 標點本 6178-9; 『通典』卷 199 / 中華書局本 5458)。
- (f) 貞觀十六年 (642), 薛延陀の眞珠可汗が其の叔父沙婆羅泥孰俟斤を使節としておくり、通婚を求めてくる (『資治通鑑』卷 196 / 標點本 6177)。

ける泥孰はある種の雅號、稱號化した語のようで、様々な部族の有力者がその名を名乗っていたと考えられる。そしてその有り様が、Nezak Tarxān (*泥孰達官?) や Nezak Šah (*泥孰灑?) という名稱にも共通する可能性は十分ある。

しかしだからといって、この二者をテュルクと直接に結びつけてしまうわけにはいかない。というのも、泥孰という語はおそらく元來のテュルク語ではなく、他の言語からの借用である可能性が高いからである⁶⁹。中央アジアにおける突厥の先達としては、當然、柔然とエフタルが想起される。テュルクに多く見られる tegin 號や yabgu 號がエフタルにおいても用いられていることからしても、エフタル時代に Nezak という稱號なり名稱なりが用いられていた可能性もまた大いにあるのである⁶⁰。さらに、これが稱號だとすれば、ローブの支配者がテュルク系の稱號を名乗った例から考えても、この語を用いて、ヒンガル=ネーザク朝の起源や由來を議論することには慎重にならざるを得ないだろう。

VI. ハラジュの王國の形成

ここまでの行論が妥當なものだとすれば、ハラジュはおそらく5～6世紀のいつか、エフタル部族連合体の一部として、シル河の東から西へ向けての移動を開始し、トハリスターンに到達、その後西突厥のトハリスターン支配を契機にヒンドゥークシュを南に越え、640年代にはウジーリスターンに居住していたと言えよう(圖1参照)。ついで検討すべきは、このハラジュがどのようにしてカーブル、ザーブリスターンに王國を築いたかであるが、この點は以前の研究で考察したこともあり、またその後桑山により極めて詳細な歴史が再構成されているので、今それらを概観しつつ、いくつかの残された問題について考えてみたい。

- ↙ (g) 蘇定方が賀魯の亂を平定した顯慶二年(657)以降、賀魯に従っていた泥孰の家口を故郷に歸す(『舊唐書』卷83/標點本2781;『資治通鑑』卷200/標點本6305)。
- (h) 調露元年(679)、阿史德恩傳、奉職にかつがれて可汗となった阿史那泥孰匐(『舊唐書』卷5, 卷84, 卷194上/標點本105, 2804, 5166;『新唐書』卷106, 卷108, 卷215上/標點本4040, 4087-8, 6042;『資治通鑑』卷202/標點本6392)。
- (i) 天授三年(692)、吐蕃と同盟して唐に背いた西突厥の中にいた泥孰俟斤がいた。彼は韓思忠に敗れ、韓思忠は吐蕃の泥熟沒斯城をおとす(『新唐書』卷216上/標點本6079;『資治通鑑』卷205/標點本6493)。

⁶⁹ ちなみにハルマッタは Nezak の語源を、サカ語の動詞 “näis-” 「戦う」から再構成される “näjska-” に求めようとするが、確たる證據がある話ではない。

⁶⁰ エフタルとテュルクの稱號の類似については、たとえば Frye & Sayili 1943: 204 を参照。

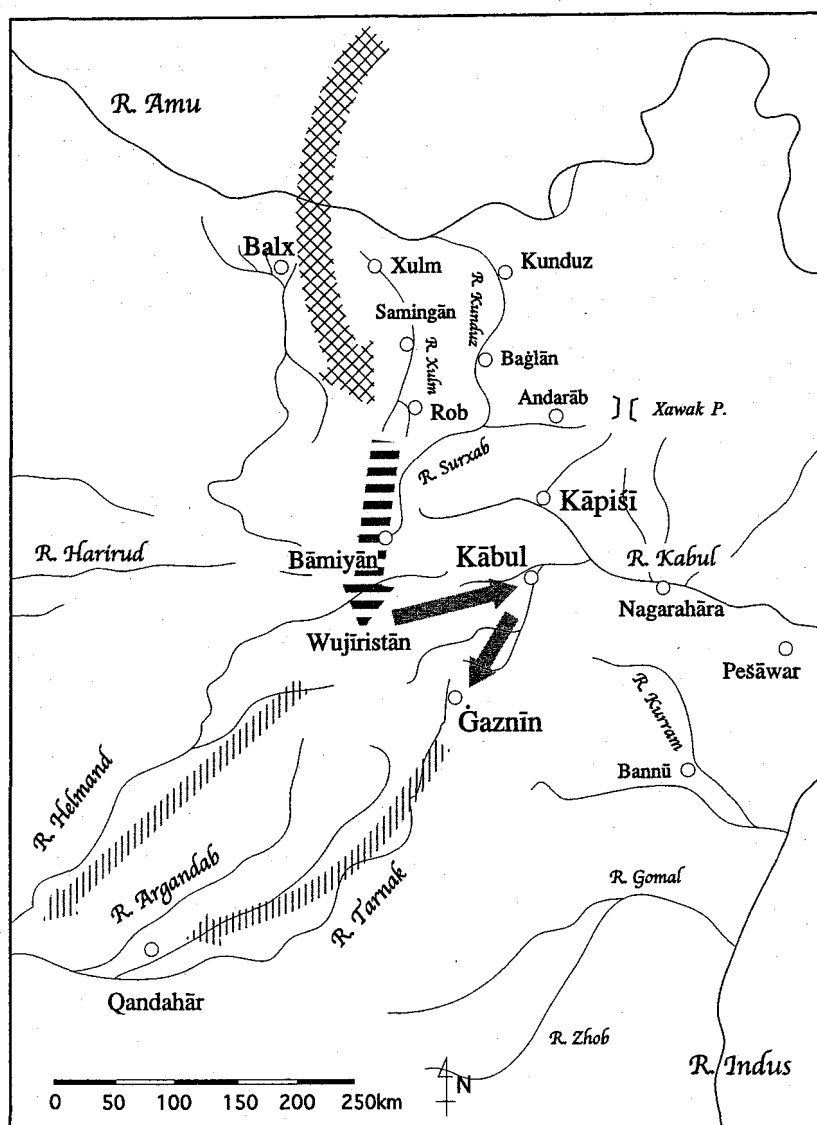


圖1 ハラジュの移動経路(10世紀頃まで)

1. 「顯慶時謂訶達羅支」

「謝颺は吐火羅の西南であり、もとは漕矩吒といい、あるいは漕矩と言ったが、顯慶年間に訶達羅支といい、武後の時に今の呼び名に改めた」という『新唐書』の記事のうち、「顯慶年間に訶達羅支という」という部分の解釋は先に述べたが、玄奘の訪れた640年代からこの時期までの20年弱の間に、ヒンドークシュ南麓に起きた事件の、この名稱は反映であるべきである。そしてその事件とは、ハラジュがウージーリスターン山地からカーブル、ガズニ方面へ向けて本格的に進出し始めたことに他ならないだろう。ただしこれらの

地域におけるハラジュの勢力確立の詳細な経緯については不明な部分が多い。

第一章で觸れたように、テュルク勢力のカーブル進出について桑山(2001:142-5)は、それを606年(『隋書』の記述の下限)から629年(玄奘の最初の往訪)の間に置くという案を提示している。ことは、玄奘あるいは同時代の中國側の史料にカーブルにあたりそうな地名が全く出てこないという問題に関わる。すなわち、玄奘はヒンドゥークシュの南側について、ベグラームを都城とするカーピシー、おそらくはガズニを首邑とするザーブリスターン、そしてウジーリスターンの山地に言及するが、8世紀以降この地域の中心としてイスラーム側の史料にあらわれるカーブルには觸れないのである。その背景として桑山は、玄奘往訪當時すでにカーブルがウジーリスターンのテュルクの支配下にある、『舊唐書』卷198 尉賓國傳において、658年に尉賓の支配者であったと記される曷搆支こそが、實はカーブルのテュルク王朝の初代(al-BirūniのいうBarha Tegin)であったのではないかと推測するのである。

この説は、ハイル・ハーナ神殿における神格の交代と、カーブルにおけるテュルク系支配者の登場を結びつけることによって、7世紀の漢語史料にカーブルが現れないという奇妙な事態を説明しようとする極めて巧妙なものであるが、疑問点もある。桑山は、曷搆支がヒンガル朝(すなわちカーピシーの王朝)の始祖から数えて12代目であるという『舊唐書』の記述は、その情報源が曷搆支自身であるなら信憑性が薄いだろうとするのだが、前述のごとくこの情報は王名遠の報告に基づく可能性が高い。ここまで述べてきたように訶達羅支がハラジュの王國を指すとする、ハラジュの支配地域が同じ時期の情報に尉賓と訶達羅支の二つの名前で登場していることになる。この時点ではまだハラジュの王國は分裂していなかった筈だから、これはやや奇妙な事態である。桑山はまた、『舊唐書』の尉賓がカーピシーを指す場合、曷搆支の如きテュルク系の名稱をカーピシーの支配者が名乗る時期として、7世紀中頃というのは遅すぎるのではないかとするが、7世紀のトハーリスターンの状況を考慮すれば、これはあり得ない話ではないだろう。前述のごとく7世紀初頭、統葉護可汗によって突厥のトハーリスターン支配は一新され、彼の系統が吐火羅葉護として統治にあたることになった。その結果として、639年頃にはバクトリア語文書にiltäber等、テュルク系の稱號が登場するようになる。カーピシーの王家へのテュルク系稱號の授與もこの文脈において行われた可能性は否定できないからである。

以上の理由から筆者は曷搆支とバルハテギンを同一視することに、現時点では懐疑的ではあるが、しかしながら桑山の述べるごとく、カーブル地域が早いうちからウジーリスターンのテュルクの支配下にあった可能性は検討に値すると考える。7世紀のこの地域の政治史にカーブルが全く登場しないというのはやはり奇妙に思われるからである。た

だし、弗栗特薩儻那の首邑「護苾那」がカーブルに同定されない限り、玄奘の時点ですでにカーブルがテュルク勢力の中心地であったかどうかはわからない (Cf. 稻葉 2003: 90 & n. 6)⁶¹⁾。

一方顯慶三年から龍朔元年の時期、かつての漕矩吒國＝ザープリスターン＝訶達羅支國として唐に報告されていた。訶達羅支＝ハラジュとすれば、この時点でザープリスターンにハラジュの勢力が確立していたことになる。玄奘はザープリスターンの王をテュルクだとは言っていないから、『新唐書』の記述をそのまま受け取るなら、少なくともハラジュのザープリスターン方面への進出は643から658年の間のことだと言っているのかもしれない。しかし、これに關しても問題は残る。

ちょうどこのころ、653-4年には、Sistānに進出してきたアラブ・ムスリムがはじめて軍を北方に向け、ダーワルの地からザーブルへと兵を進め、同地を和約によって征服した、と al-Balāḍuri は伝える。その後665年頃カーブルにまで兵を進めた 'Abd al-Raḥmān b. Samura は、そこを征服した後、背いていたザープリスターンを今度は武力によって征服したという。その直後、カーブルはカーブルシャーによって奪回されるが、その時の状況をバラズリーは次のように記している。

「その後カーブル・シャーはムスリムに對して一軍を集め、カーブルに駐留する [ムスリムの] 兵士を追い拂った。

さらに、rtbyl があらわれ、ザープリスターンとルッハジュを制壓した後、ブストにまで到達した。そこで Rabī' b. Ziyād はムスリム軍を率いて出征し、ブストにおいて rtbyl と戦ってこれを破り、追走してルッハジュに至った。そこで彼と戦った後、ダーワル地方を征服した。」⁶²⁾

61) マルクヴァルトは「護苾那 (*γu biēt na)」を、條支都督府の下に置かれた州のうちの一つである「護聞 (*γu miuən)」と同じであるとする (Marquart 1901: 288)。龍朔元年 (661) の時点で考えるなら、條支都督府がおかれた「伏寶瑟顚城」の方が、状況的にカーブルにあたりそうではあるが、この地名も未だ同定されていない。榎一雄 (1993: 230) は「伏」を「仗」の誤りとみて、「仗寶瑟顚」すなわち、ザープリスターンであるとしているようであるが、zābul の音寫として「仗寶 (*dīaŋ pau)」はふさわしい形とは思われず、従い得ない。また、パルンボは「伏寶瑟顚」の「寶」の字を「實」に讀み替えた「*伏實瑟顚 (*bīəu (biuk) dziē fīet tien)」が「弗栗特薩儻那 (*pɹuət liēt ʒiei sat t'an na)」の別の音寫であるかもしれないと推測する (Palumbo 2001: 123)。

62) ثم جمع كابل شاه للمسلمين واخرج من كان منهم بكابل و جاء رتبيل فغلب على ذابليستان والرخج حتى انتهى إلى بست فخرج الربيع بن زياد في الناس فقاتل رتبيل وهزمه وأتبعه حتى أتى الرخج فقاتله بالرخج ومضى ففتح بلاد الداور.
(FB: 489; 花田 1996: 144)

ラビー・ブン・ズィヤードは671年に罷免されているから、彼と *rtbyl* の戦いは666年から671年の間に起こったものであるが、実はイスラーム資料に *rtbyl* が登場するのはこれが最初である。当時のカーブルの支配者、すなわちハラジュ・テュルクの王の兄弟であり、その後この方面におけるアラブ・ムスリムの最大の敵として立ちはだかり続ける *rtbyl* の名が言及されていない666年以前において、ザーブリスターンにはテュルク＝ハラジュの勢力は及んでいなかったとも考えられるのである (Cf. 稻葉 1994: 245)。

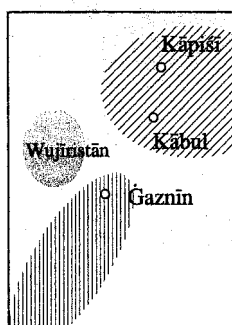
残念ながら、零細な資料からこれ以上の詳細について確定的な議論を行うことは困難であるが、漢語史料とアラビア語史料を整合的に説明するためには、おそらく次のように考えておくのがいいだろう。すなわち玄奘以後顯慶年間までの間にウジーリスターンのテュルクはカーブル、ザーブリスターン方面に進出、あるいは同地域において自立した。少なくとも唐によって訶達羅支國と認識され、名目的とはいえ都督府が置かれるような實體が成立していたと考えられる。そのきっかけとしては650年代に始まるムスリム勢力の北方進出を想定していいだろう。また、訶達羅支國の勢力範囲はおそらくカーブルからザーブリスターン北部を覆うものであった。『新唐書』が漕矩吒が訶達羅支と呼ばれるようになった、とするのは、この時の訶達羅支國の範囲がいわゆるザーブリスターンの一部をも覆うものであったという雰囲気伝えるからである⁶³⁾。一方ザーブリスターンの残りの地域は、イスラーム史料に見えるように、スィースターンのムスリム軍によって攻略されていたのであろう。

以上、議論が煩雑になったが、筆者はヒンドークシュ南側の7世紀前半の歴史として、上に述べたとおり、

- ① 620年代～640年代：カーピシーの王家 (非テュルク)、ザーブリスターンの王家 (非テュルク)、ウジーリスターンのテュルク
- ② 640年代後半～658年：カーピシーの王家 (非テュルク)、ハラジュ・テュルクの政

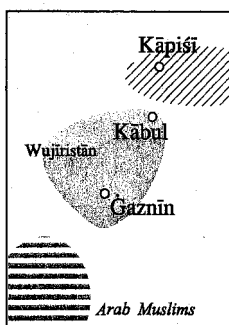
63) この点について、パルンボはやや意見を異にしている。彼によれば、顯慶年間の訶達羅支の出現はカーブル近邊への登場を意味するが、当時ガズニは彼らの支配下にはなかった (Palumbo 2001: 122-4)。たしかにこの時期、ハラジュ・テュルクの支配がどこらへんまで及んでいたかを正確に見定めるのは困難ではある。パルンボは、『老子化胡經』に見える「嵯骨 (*dzai kuət) 國」が Zābul を意味しているのではないかとする (Palumbo 2001: 130-1)。残念ながら「嵯骨」という語の用例を筆者は他に見だし得ておらず、また、玄奘によって報告されており、確實に7世紀後半には知られていた形である「漕矩吒」ではなく、なぜこの文字が用いられたかが不明なため、これを発音の類似からザーブルにあてることには躊躇せざるをえないが、テュルクの自立の最初期の段階の様相に關しては、氏の見解も成り立つ餘地がある。

① 640年代



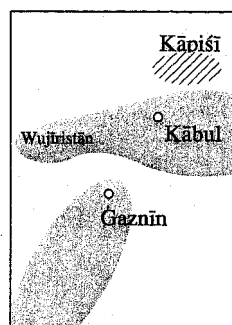
////// ヒンガル朝
 ||||| ザーブルの土着王朝
 ■■■ 突厥

② 660年代



////// ヒンガル朝
 ■■■ 突厥=ハラジュ=阿達羅支

③ 680年代以降



////// ヒンガル朝
 ■■■ カールシャーとrtbylの王国

圖2 7世紀の東部アフガニスタン

権（カーブルからザーブリスターン北部）、ムスリムに征服された地域（スィースターンからザーブリスターン南部）という國家が竝立していたと考える（圖2 参照）。

2. 「武后改今號」

（1）rtbylの自立

次に「阿達羅支」の名が則天武後の時代に「謝颺」へと改められたという記述についてであるが、この名稱變更にはなんらかのきっかけあるいは理由があった筈である。そしてそれは唐の側ではなく、カーブル、ザーブリスターン方面に生じた變化によるものと考えられる。この時期、王名遠の調査のごときミッションは唐の側からは組織されておらず、それゆえ唐の影響力が及ぶ範囲の中で最も西に位置していたザーブリスターンについて、わざわざ短期間のうちに名稱を公式に變更するという事態は、ザーブリスターン側からのなんらかの申告、申請があつてのゆえと考える方が自然だからである。

ではその變化とは何かというと、それはカーブルのテュルクシャーと袂をわかったrtbylがザーブリスターンにおいて自立したという事件であつたに違いない。この事件の経緯については筆者と桑山の以前の論考（稲葉1991；桑山1993）に詳しいが、カーブルに勢力を確立したテュルクすなわちハラジュの王家において、おそらくは後継者争いのゆえに、兄弟の一人が南へと逃れ、スィースターンのムスリムにたよりつつ、ザーブリスターンにおいて自立して國を建てたのである。Tabarīの記述（TRM-i: 2706；cf. Rex Smith 1994: 75-6）によれば、これはウマイヤ朝初代カリフ、Mu'awiyaの死後、西暦の680年代のことであつた。

その後、*rtbyl* はムスリムと再び敵對關係に入り、680年代後半あるいは690年代、ムスリムとの戦いの中で初代 *rtbyl* は殺される (Historiae-ii: 324; FB: 490; 花田 1996: 146)。後を襲った息子は720年代にも在位しており、同地を訪れた慧超は、謝颺=ザープリスターンの王は、罽賓=カーブルのテュルク王の甥にあたると記している。またこの新羅の僧は同時に、謝颺の王が叔父に屬することなく自立しているとも伝える (『慧超傳』: 40)。實は罽賓と謝颺は、北進をはかるムスリムへの對抗上のゆえであろうか、すでに8世紀初頭には同盟關係に復し、ともに唐に使節を送ってきている (『冊府元龜』卷970 外臣部朝貢3 / 臺灣中華書局印行本 11404) のだが、それでも慧超の記述は、當時この兩國が別の國として認識されていたことを示している。それゆえ、訶達羅支から謝颺への名稱變更は、當初カーブルからザープリスターンを覆っていたハラジュの王國=訶達羅支國が、罽賓と謝颺、すなわちカーブルとザープリスターンという二つの國に分かれたことを示しているといえる。前者はその後、カーピシーをもその勢力圏におさめていき、罽賓という、かつてガンダーラやカーピシーに與えられた名稱をも引き繼ぐ。一方後者は *rtbyl* の自立を機に、元來の地名ザーブル/ザープリスターンに由來する謝颺という名で呼ばれるようになったと考えてよからう (圖2 參照)。

ところで桑山の復元に據れば、680年前後の後繼者争いを経てカーブルの王位を繼いだのが、『舊唐書』卷198 (標點本 5309)『新唐書』卷221上 (標點本 6241) にいう烏散特勒(勤)灑、すなわちゲブルの E 208 に見える *Horāsān Tegin Šāh* であり⁶⁴、一方慧超往訪當時のザープリスターンの二代目の *rtbyl* は、『冊府元龜』に見える、開元八年 (720年) に「葛達羅支頡利發」の稱號を認められた「誓屈爾 (*zīei kīuət ſie)」である (桑山 1993: 402-393 參照)。この後者の人名に關して、吉田はモスクワ歴史博物館に所藏される、E 208 および E 246 とほとんど同じデザインで、*Arachosia*=ザープリスターンにおいて製造された二種の貨幣に見える、*Pangul* という支配者の名前と同定できるのではないかと推測する (吉田 2002; cf. Nikitin 1984; Humbach 1996 [1998])。E 208 はゲブルによって *Post Yazdigird* 曆 77 年 = 728 年という年代が與えられている⁶⁵ から、この *Pangul* の貨幣もほぼ同じ時期、すなわち8世紀初頭の製造と考えられる。一方『冊府元龜』卷964 (臺灣中華書局印行本 11346) には、開元二十六年 (738 年) に謝颺の王「誓颺

64 この同定については Humbach 1966: 60; 1983: 304 を見よ。

65 あるいはバクトリア曆 (4) 77 年 = 709 年という比定も可能かも知れない。E 240 は E 208 とほぼ同型の貨幣で、バクトリア文字によって *TOFINO YΩPCONO PYO*=*tegin horāsūn šāh* という銘が刻まれており、なおかつ發行年として 474 年という年號が刻まれている (Göbl 1967-i: 164-5)。フンバッハはこれを、バクトリア曆によって 709 年だと考えている (Humbach 1966: 60)。

(*qiei (ʔ)jiēt)」が死に、息子如沒拂達が即位したことが記されている⁶⁶。冊立と死亡の時期から見て、誓屈爾と誓颺は同一人物と思われるが、Pangul 貨幣は、それが 720 年代のザープリスタンで発行されていると考える限りにおいては、誓屈爾=誓颺のものとししか考えられない⁶⁷。

いずれにせよ *rtbyl* の自立により、ヒンドゥークシュ山脈南側には、カーピシーの王國、カーブルシャーの王國、ザープリスタンの *rtbyl* の王國が南北に連なる状況が生まれた。その後まもなく、カーピシーの王國はカーブルシャーによって併呑されてしまい⁶⁸、ヒンドゥークシュ山脈の南側はカーブルとザープリスタンの二つのハラジュの王國の支配する地となったのである。

それでは、680 年代に生じたこのカーブル、ザープリスタンの新しい状況が、690 年から 705 年にあたる武后時代に中國に伝えられたのはどのような経緯であったのか。武后が政治の實權を握りだした頃は丁度吐蕃が勢力を伸張しはじめた時期にあたる。高宗の咸亨元年 (670 年)、ガル・ティンディンが吐蕃の宰相となり、軍勢を率いて安西を攻め落とし、唐の薛仁貴は十萬の兵を率いて吐蕃に攻め入るが、青海において吐蕃の大軍に敗れる。この時以後約二十年間、吐蕃の存在により、西域地域は唐から分斷されていた (森安 1984: 10-18)。680 年代の事件であるところの *rtbyl* のザープリスタンにおける自立が唐の知るところとなったのは、唐が西域との連絡を回復した 690 年代以降のことと考えられ、それが、謝颺への改稱が武后時代だと言われている理由であろう。『冊府元龜』卷 970 (臺灣中華書局印行本 11403) には、武后の久視元年 (700 年)、謝國という國が朝貢してきたと見える。筆者はこの時期に関連する「謝國」という他の例を、史書類に見いだすこと

66) 實際に彼が死んだのはもう少し前のことだろう。開元 26 年にはカーブルの烏散特勤灑も死去したとされてるが、これらは突騎施部族連合體の崩壊によって、この地域と唐との連絡が再開したとき、まとめて新しい王が冊立された記事に付加された情報だからである。前嶋 1971: 176 参照

67) 實際、フンバハもかつてはこの Pangul を Sangul と読んでいた (Humbach 1996 [1998]: 248)。吉田によれば、誓屈爾=誓颺の背後に **cnḡwl* というような語を想定するなら、この同定も不可能ではないかも知れないという。

68) カーピシー=ベグラームの王國がいつ頃まで存続したのか、その終焉の有様がどのようなものだったのかについてはよくわかっていない。ハルマッタ (1996: 374) は 719 年、吐火羅の大首領羅摩娑羅 (**la mua sa la*) を通じて唐に使節を送ってきた訶毘施國の捺塞 (**nat sək*) なる人物を Nezak にあて、カーピシーの王すなわち Nezak Šah のことだとするが、グルネ (2002: 215-6, n. 21) は、この捺塞は Nezak Tarxān の方、すなわち当時トハリスタン方面に勢力を持っていた Nezak の方だったと考えている。しかし、ベグラーム遺跡の最末期の様相から、それが一気に放棄されたのではなく、徐々に廃れていったのではないかとする桑山の指摘 (2001: 144-5; 2002: 198-9) を考え併せると、8 世紀初頭、最後のカーピシー王が、カーブルのテュルクシャーの支配下で、まだ細々と存続していた可能性は十分ある。

が出来なかったが⁶⁹、これが謝颺の颺の字が脱落したものであるとすれば、このときこそが *rtbyl* のザブリスターンの最初の朝貢となり、同時に國名を謝颺=ザブリスターンと名乗った最初の機会であったと考えられる (Cf. Palumbo 2001: 124)。そしてそれは『新唐書』の記述と符合するものでもある。

(2) *rtbyl*, カーブルシャー, ムスリム

7世紀末以降、カーブルとザブリスターンの王國がどのような歴史を辿ったかについても以前の論考 (稲葉 1991: 1994) で論じたところであるが、いくつか追補的に述べておくべき事柄をあわせて、今簡単に概略を記しておきたい。

ザブリスターンの *rtbyl* は、その後もムスリムの北進を阻む最大の敵として立ちはだかった。特に8世紀初頭の Ibn al-Aṣ'atī の亂においては、イブン・アルアシュアスを支援し、ウマイヤ朝のイラク總督 Hājāj b. Yūsuf に敗れて逃亡してきた彼を匿っている。

その後もムスリム軍は何度か東部アフガニスタン進出をはかるが、アッバース革命による混亂や、ハワーリジュ派の活動の活發化などにより、*rtbyl* の王國を撃破するにはいたらなかった。

ところで、この支配者のタイトルである *rtbyl* について、かつて筆者はそれがテュルクの稱號 *iltäber* に由来するという Bombaci (1970) の見解を支持し、それがなんらかの要因で誤って寫されたのだらうと考えた (稲葉 1991: 53-5) が、その後、マルクヴァルト以来の *znbyl* 説を採るボズワースの見解 (1994: 91-4) が發表されたので、ここに再度 *rtbyl* 説を主張しておきたい。ボズワースの見解は決して新しい材料に基づくものではなく、従來の諸説、とくにスカルチアによる研究 (Scarcia 1965; 1966; 1967) をまとめたものという性格を持つが、そもそも *znbyl* 説の根據となっているのは以下の二點である。

第一に、*Tārīx-i Sistān* が *znbyl* という形を首尾一貫して保持していること、第二にイブン・サムラによる征服で知られるダーワル地方の Zūr 山にあった神殿と、玄奘が報告する穠那天神のまつられる穠那呬羅山とを同一視し、この信仰が當時の東部アフガニスタンにおいて極めて盛んであったことから、稱號をこれと関連づけて読み解くことができるという、マルクヴァルトおよびそれを修正したスカルチアの見解の存在、である。まず第一の點であるが、確かに *Tārīx-i Sistān* においてはそうであっても、他の大多數の資料では *rtbyl* という形が保持されているという點を重要視すべきであろう。ボズワースも注記

⁶⁹ ちなみに『太平寰宇記』卷142には、「謝城はもと、舊棘陽城であり、水經注に、謝水は謝城に出るという」および「棘陽故城は古の謝國の地であり、棘水の南にある」との記述が見えるが、これらはいずれも南陽郡湖陽縣にかかわる地名であって、ここで唐に朝貢してくるような地域ではない。

するとく、12世紀にBagdādのNizāmiya學院の教授であったal-Jawāliqīによって著された、アラビア語彙中の外來語を説明した辭典には *rtbyl/rtbyl* という形が採録され、*ratbil* と母音點がふられている (MK'A: 334)。

第二の點について、確かに當時東部アフガニスタンにおいて *Zūn* あるいは *Zhūn* という神格が崇拜されていたことは疑いを容れない。ローブ由來のバクトリア語文書中には “*Zhun-lad*” という人名があらわれる (文書 L) が、シムズ=ウィリアムスによると、これは中世ペルシア語としては *Zhun-dād* と復元され、「*Zhun* に與えられた」を意味する。そしてこの音は『隋書』卷83 (標點本1857) に見える漕國の王「順達」にうまく符合する (Sims-Williams 1997: 19 & n. 38)。さて、このバクトリア語文書はヒンドークシュ北麓に関わるものであり、ザープリスターンのハラジュの王の同族はその地域に居住しているわけだから、*Zhun* 神信仰とハラジュの間に結びつきが存在する可能性はある⁽⁷⁰⁾。しかしながら、ハラジュの王がそれに關する稱號を持ち、その後も保持し続けたという證據はないし、あまりありそうには思えない話である。テュルク支配時代のヒンドークシュ山脈南側の宗教事情の詳細が判明しているわけではないが、冒頭に觸れた通り *Zhūn* 信仰に関しては、それが象徴的に取り上げられるわりには、考古學的證據が缺けている。逆に同地域の寺院遺跡や出土物が語るのは、この地域の佛教的、バラモン教的環境なのである。玄奘や慧超の記録、カーブルやガズニにおける佛教寺院の調査結果は、この地域が7世紀—8世紀初頭にかけて佛教を奉じる有力者がおさめる場所だったことを教えてくれる。しかしながら、やはり玄奘が報告する通り同時期にはシヴァ信仰をはじめとするバラモン教/ヒンドゥー教信仰も力を伸ばしつつあった (Cf. 桑山 1990: 277 ff.)。前述のハイル・ハーナ神殿上層で發見されたスーリヤ神像は、この神殿がテュルク支配時代においても存続していたことを知らせてくれるし、8世紀半ばの紀年を持つガネーシャ神像はカーブルの支配者ヒンガラによって奉獻されたものである (桑山 1991)⁽⁷¹⁾。他方、ハイル・ハーナ下層神殿

(70) もしそうだとすると、*Sunā* 神の南遷に關する玄奘の記述と、前述のカラバーク=ジャグリーの石窟群を結びつける可能性も皆無ではなくなるかもしれない。しかし、同石窟を調査したヴェラルディによれば、それを示すようないかなる情報もない、という。

(71) ただし、マルクヴァルトやトゥッチの如くに *Zhūn* をヒンドゥーの神格であると考えたら話は別である。*Zhūn* 信仰の存在そのものを、ヒンドゥー教隆盛の流れの一環として位置づけることが可能になるからである。しかしながら、この神格を太陽神にあてようとするマルクヴァルト説については、新たに到來した教團が同じ太陽神たるスーリヤを奉じたという點に疑問が残るし、一方で *Zhūn* をシヴァにあてようとするトゥッチの説については、シヴァ神がスーリヤ信仰によって神殿を逐われるという事態が、この時代のこの地域において有り得たとは考えられないというヴェラルディの批判がある (Verardi forthcoming)。結局 *Zhūn* の神格については未だ不明とせざるを得ないのである。なお、ヴェラルディはヒンドゥー教の隆盛と佛教の相對的後退の背景の一つを、751年以降、唐が中央アジアから撤退し、アフガニスタン地域との關係が途絶えたことに求める假説を示している。

が桑山の想定通り Zhūn 教團のものであったとすると (桑山 1990: 297-308; 2001: 141-2), ハイル・ハーナから驅逐された信仰や教團が、ヒンドークシュ南側のテュルク系の支配者の稱號に関わりを持つほどのポジションにあったとはどうしても考えにくいのである。さらに慧超は、ザーブリスターンに娑鐸幹 (*sa dak kan) というテュルクの大豪族がおり、これが敬虔な佛教徒であると報告している (『慧超傳』: 40)。これを、8世紀初頭ザーブリスターンのハラジュ・テュルクの支配階層が佛教徒であったことを示すものと理解するなら、當時すでに *rtbyl* としてアラブ・ムスリムに知られていたザーブリスターンの支配者の稱號を、わざわざ Zhūn 神にひきつけて解釋する根據はさらに弱まる。

また、イランの英雄叙事詩と Zhūn (スカルチアによれば Zūr) 神の關連を強調するスカルチアの説にしても、それが、この支配者がテュルクであったという事実とどれほど親和性を持つのか疑問でもある。もちろん當時の東部アフガニスタンにおける宗教状況について、これら先學が述べるところは傾聴せねばならないのだろうが、それと、外來の支配者であるテュルク王の存在とはそう直接には結びつかないだろう。

一方、*rtbyl* 説について筆者はかつて次のような點を指摘してその妥當性を説いた。

- ① 『冊府元龜』卷 964 に、開元八年 (720 年) に、謝颺の王を葛達羅支頡利發に冊したとの記事があること。何度も繰り返してきたが、これは 720 年當時のザーブリスターンの支配者に頡利發 = iltäber という稱號が與えられたことを示している。
- ② al-Mas'ūdī (MQ-iii/iv: 572) やイブン・アルアスィール (IA-vii: 326) に現れる *kbbk* や *kbttyr* という謎の言葉は、それを iltäber の別種の寫し間違いだと考えることにより解釋でき、マルクヴァルトやスカルチア (1967: 43) のように複雑な操作や新たな人物の追加を行う必要がなくなる。

少なくともこれらを考慮しつつ、*rtbyl* をテュルク系の稱號を持つテュルクの王と考えることによって、7-8世紀の同地の歴史を整合的に理解できるようになる、と筆者は主張したのであるが、その後得られた材料もこれを補強してくれるものである。すなわち、前述のごとバクトリア語文書にあらわれる *hilitber* は、トハーリスターン地域において西突厥による iltäber 號の授與が行われた證左であるが、それは同時にトハーリスターン地域と深い関係をもつハラジュが、その稱號に馴染んでいたであろう状況をも想定させる (Cf. Sims-Williams 2002: 235)。一方 Nezak Šāh 貨幣 E 208 の銘文に見える *hitivira* は、8世紀初頭にこの地域の支配者が iltäber という稱號を帯びていたことの直接的證左となっているのである⁷²。少なくとも支配階層に関しては極めてテュルク的な環境にあった 7-

⁷² ただし、E 208 は發行地が正確には判明しておらず (Cf. Göbl 1967-i: 143)、一方ザーブリスターン由來の貨幣についてはこの稱號が確認されていないという點には留意が必要である。

8世紀のカーブルおよびザーブリスターン地域において支配者が名乗った稱號を、*znbyl*ではなく、*iltäber*の誤寫（あるいはシムズ=ウィリアムスによれば *r* と *l* の metathesis）による *rtbyl* と讀むことの妥當性は、これらによりさらに強まったと考える。

一方カーブルの方とは言えば、同地の支配者カーブルシャーが、8世紀初頭トハリスターンを中心に對アラブ大叛亂を起こした、かの *Nezak Tarxān* を援助したことが知られる（稻葉 1994: 245）。その後トハリスターンがアラブの支配下に入るにおよび、ヒンドークシュを越えての軍事作戦が何度か試みられた。8世紀末にはアッバース朝カリフ、*Hārūn al-Rašid* の命を受けた *Yaḥyā b. Barmak* がカーブルを攻め、近隣のいくつかのまちと、*Šāh Bahār* を掠奪している（KB: 290-1）。

この *Šāh Bahār* はもちろんペルシア語の *šāh* とサンスクリット語の *viḥāra* が結びついた語で「王の寺」すなわち「王が建てた寺」という意味であろう。例えば玄奘が「舊王伽藍」などといったり、『大唐貞元新譯十地等經記』に見える、8世紀半ばにこの邊りを訪れた悟空（法界）が、カシミールについて

「それから可敦寺もある。これは突厥の皇后が設置したものだ。」⁽⁷³⁾

と言い、またガンダーラに關して

「法界は、[カシミールでの滞在も] 四年目に入った後、迦濕密國を出て乾陀羅城に入り、[その] 如羅灑王寺に落ちついた。その寺は、[當地の] 王が建立したもので、[その] 王の名をとって寺名としている。[その] 王というのは、古の罽膩吒王の子孫である。次に可忽哩寺がある。[その寺名は、如羅灑] 王の子の名である。[次に] 續芝寺は王の娘の名をとっている。また旃檀忽哩寺がある。[その寺名は] 王の弟の名である。これら [の寺] は皆、[一人の] 人 [の願い] にもとづいて建立され、その人の名を寺名としているのである。」⁽⁷⁴⁾

と述べているのと同じ背景を持つ名稱である。ところで、10世紀にガズナ朝がガズニを征服した後、ガズニのまちの郊外の地名として *Šāh Bahār* という名前が何度もあらわれる。位置的に考えてこれはイタリア隊によって發掘調査された有名な *Tapa Sardar* 寺院にあたると解されるが（Cf. Kohzad 1968; Taddei 1968: 110）、*Ya'qūbī* が言う *Šāh Bahār* が、ヤフヤーの遠征がガズニにまで及んだことを意味するのか、あるいは同様の名前の寺院が他にもあったのか、ここでは判断しがたい。

(73) 次有可敦寺，突厥皇后置也。（大正藏 51: 980 a）

(74) 法界至於第四年後，出迦濕密國，入乾陀羅城。於如羅灑王寺中安置。其寺王所建立，從王爲名。王卽上古罽膩吒王之胄胤也。次有可忽哩寺，王子名也。續芝寺，王女名也。復有旃檀忽哩寺，王弟名也。此皆隨人建立，從彼受名。（大正藏 51: 980 a）

このヤフヤーの遠征の直後、カーブルは再びアッバース朝カリフ, al-Māmūn (813-33) の軍に攻められ、降伏したが (Cf. Ghafur 1965-66), このカリフ軍による征服も同地のムスリム支配をもたらすことはなく、テュルクシャーの王國はそれからさらに半世紀ほど存続した。そうしてこれにとどめを刺したのはムスリムではなく、東方ガンダーラ方面から興ったヒンドゥーシャー朝であった。より正確にはカシミール出身の大臣 Kallar がテュルクの王を倒し、王權を篡奪したことが知られているのである (Rehman 1988: 89-90)。テュルクシャー朝の滅亡の時期については9世紀前半とも、あるいは9世紀後半とも言われて定めがたいが、ほぼ同じ頃、ザープリスターンの王國もスィースターンから興ったサッファール朝によって倒された。

かくして、カーブルとザープリスターンにおけるハラジュの王國は約200年におよぶ歴史を終え、東部アフガニスタンは約半世紀のインターミッションを挟んで、イスラーム化したテュルクの統治する新たな時代を迎えるのである。

VII. イスラーム時代のハラジュ

前章までで、本稿の主題であるハラジュの王國の歴史について必要なことを大要述べ終えたが、最後にその後の彼らの動向について一章をもうけて述べておきたい。

1. 9-13世紀のハラジュ

王國滅亡後のハラジュに関する情報はそれほど多くはなく、しかもその大略はすでにミノルスキーによって簡潔にまとめられているが、これまでの考察によって、新たに説明を附加できる部分もあると考える。

時代順で言えば、最も古い事件を扱うのは, al-Mas'ūdī (956年頃死去) の *Murūj al-Dahab* にみえる記事であろう。そこには

「ハッジャージュは、アブド・アッラフマーン・ブン・ムハンマド・ブン・アルアシュアスをシジスターンとブスト、アルルッハジュに派遣した。彼はそこでテュルクの集團と戦った。それらは種々のテュルクからなっており、彼らをグズ (al-gūz) やハラジュ⁽⁷⁵⁾と言った。」⁽⁷⁶⁾

(75) PO-iii: 820 はこれを “Khallukh” とあらためている。

(76) قد كان الحجاج يستعمل عبد الرحمن بن محمد بن الأشعث على سجستان و بست و الرخج، فحارب من هنالك من أمم الترك، و هم انواع من الترك يقال لهم الغوز و الخلج.
(MD-iii/iv: 118)

とある。これに従うなら、イブン・アルアシュアスがスィースターンに派遣された8世紀初頭、すでにブスト、ルッハジュ地域にはハラジュがいたということになる。この方面におけるアラブの敵は言うまでもなく *rtbyl* だったわけだから、この記述はハラジュの軍勢が *rtbyl* の下にいたことを示していると考えられる⁽⁷⁷⁾。

Tārix-i Sistān は、王國末期におけるハラジュの存在に言及する。すなわち870年代、サッファール家のヤアクーブ・ブン・アルライスが *rtbyl* の王國を攻めてルッハジュに向かい、

「ルハド（ルッハジュ）の近郊に達すると、*rtbyl* の息子は逃れてカーブルに向かった。ヤアクーブは彼を追った。Hāsāb に到達すると雪が降って途を塞いだ。彼はスィースターンに戻った。途上、多くのハラジュとテュルクを殺し、彼らの家畜を奪い、多くの荷を手に入れた。」⁽⁷⁸⁾

という。同じ事件はイブン・アルアスィールの年代記にも記録されている。

「ヤアクーブはかつてルッハジュを征服し、その王を殺した。その地の民は彼の手でムスリムとなった。その王國は廣大な境域で、王の名は *kbt yr*。彼は12人の男によってかつがれる黄金の玉座に乗って運ばれていた。また高い山のうえに館を築いており、そこを *Makka* と呼んでいた。そこに祀った神に祈っていたのであった。ヤアクーブは彼を殺した。そしてハラジュ、ザーブル、その他の地を征服した。しかし、それが何時の出来事であったのか私は知らなかったで、その場所に記すことができなかった」⁽⁷⁹⁾

(77) ここで一緒にグズが言及されていることについては、第五章第四節参照。なお、タバリーが言及する *rtbyl* の自立の記事の中には「AMLとザランジュのまちの間には *نكرغدر* の民がいる」との記述がある。この *نكرغدر* は字形から考えて *نكرغوز* = *Toquz Guz* である可能性がある（稲葉 1991: 57, n. 6）。しかしながらこれによって、7世紀後半のアフガニスタン南東部に（*Guz* ではなく）*Toquz Guz* と呼ばれる民がいたと断定することは、他の傍證がない限り困難であろう。

(78) چون بنزدیکی رخد برسید پس رتبیل بگریخت و بکابل شد، و یعقوب بطلب وی شد، چون بحاسب برسید برف افتاد و راه بسته شد، بسیستان باز آمد و براه اندر خلیج و ترکان بسیار بکشت و مراشی شان بیاورد و بنده بسیار آورد.
(TS: 215)

*Bahār の校訂においては *znbyl* とされるが、*rtbyl* にあらためた

(79) كان یعقوب قد افتتح الرخج وقتل ملكها و أسلم أهلها على يده و كانت مملكته واسعة الحدود و كان اسم ملكها كبتير و كان يحمل على سرير من ذهب يحمله اثنا عشر رجلاً و ابتنى على جبل عال بيتاً و سمّاه مكّة و كان يدعى الإلهية فقتله یعقوب و افتتح الخلیج و زایل و غیر ذلك و لم أعلم أي سنة كان ذلك حتى أذكره فيها.

(IA-vii: 326)

ここにあらわれるハラジュは、*rtbyl* の王國の領域内、ルッハジュ近邊に牧畜生活を送っていた者達であったと考えられる。以上の記述は、ザーブリスターンの *rtbyl* の王國がもともとハラジュの王國であり、その後も兩者の間に緊密な關係があったことを示していると解することができる。

10 世紀においても、前掲のイスタフリー (945 年死去) の記述からハラジュが、「ヒンドとシジスターンの間、ゴールの裏側」から、ブスト、ルッハジュ、ザミーン・ダーワルといった地域にかけて遊牧生活を送っていたことがわかる。このイスタフリーの記述が重要な意味を持つことについては先に指摘した。

また、*Hudūd al-Ālam* は

「ガズニーンとその境域にはハラジュのテュルクが住んでいる。彼らは多くの羊を有している。彼らは氣候によって草地を求めて移動する。これらのハラジュはバルフ、トハーリスターン、ブスト、Gūzgānān の地域に多い。」(Minorsky 1982: 111)

とし、ブスト近邊のみならず、ガズニ周邊やバルフ、トハーリスターンにもハラジュがいたことを伝えるが、それらは當然、前述の、7-8 世紀にヒンドウークシュ山脈を挟んで南北に存在したハラジュの名残であると考えられる⁸⁰⁾。

さらに、

「先に、Gūz と Xarlay⁸¹⁾ について述べたが、彼らはテュルクの一種で、Ġarš と Baštām、ブストのシジスターン側の地域にいる。同様に、Kirmān の Qafš や Balūj, Jatt の地にもいる。」⁸²⁾

というマスウーディーの記述に従うなら、すでに 10 世紀には彼らの一部がアフガン山塊周邊からイラン北道沿いにバスタームに、同様にイラン南道沿いにケルマーン方面にも移動していたことになる。

⁸⁰⁾ ただし、ミノルスキーは *Hudūd al-Ālam* の寫本に見える خلیج を、トハーリスターンに關しては Xallux、ガズニーン周邊に關しては Xalaj と讀んでいる (Minorsky 1982: 108, 111, 347)。これについてはここまでの議論によって、兩方ともハラジュである可能性もある。

⁸¹⁾ PO-ii: 423 はここもまた “Kharlukh” とあらためている。なお、ここで xarlay という語形が見られることは注目すべきかも知れない。Xalaj のサンスクリット語形として貨幣の銘 xaralāṣa, あるいは訶達羅支/葛達羅支から復元される xā dā(r) lā ṣi/qā dā(r) lā ṣi を考えた場合、元來の語形がたとえば xarlaṣ の如きものであれば、説明が容易になる (注 11 も参照) からである。ただし、残念ながらこの形はマスウーディーのこの箇所にはしか見いだせないし、ここでも Qarluq = خلیج との混同が問題になる可能性もある。尙、後注 101 をも参照。

⁸²⁾ وقد اعرضنا عن ذكر الغوز والخرليج وهم أنواع من الترك نحو بلاد غرش وبسطام وبست مما يلي بلاد سجستان وكذلك من بلاد كرمان من أرض القفص والبلوج و الجت.
(MD-i/ii: 436)

11世紀、セルジューク朝のワズィール Nizām al-Mulk は、ガズナ朝の創設者 Sebük tegin の前半生を語る中で、彼が Nišāpūr において主君 Alptegin に仕えていた時代、「ハラジュとテュルクマン」から税金を徴収するために派遣されたという逸話を記録している (SM: 143)。残念ながら具体的な目的地は記されていないが、当時のサーマーン朝の支配領域からして、ここでザブリスターン、スィースターン方面が意圖されているとは考えられないから、これも10世紀ホラーサーン方面にすでにハラジュの一集團が存在したことを示す例と言えよう。

10世紀の70年代、新たにガズニを據點に王朝を建てたセビュクテギンは、南方における「インドへの門」たるルッハジュ、ブストを征服した後さらに南進し、978年頃には Qu ṣḍār (現在のパキスタン、バルーチスタン州東部) を征服した (Cf. Nāẓim 1971: 29) が、その事情を伝える al-'Utbi は次のように記している。

「[クスダール方面征服の結果] 彼 (セビュクテギン) の軍勢は厚みを増し、アフガン族とハラジュが彼に臣従した。そして彼が彼らの召集を必要とした時、何千もの兵が彼への奉仕に到来し、彼を援助することに精魂を傾け、彼への臣従の命を遂行することになった。」^[83]

事實、995年、セビュクテギンが Abū 'Alī Simjūrī とニーシャープールのまちの支配権を争ったとき、彼の召集に應えて「インド、ハラジュ、その他のあらゆる人々からなる大軍が集結した。」(TB: 260) という。かくして、セビュクテギンの後、ガズナ朝の軍にはハラジュの兵が含まれるようになった。セビュクテギンの息子 Maḥmūd は1006年、軍勢を率いてアム河を越えてきたカラ・ハン朝の Ilig Naṣr に對應するため、

「ハラジュのテュルク人達から、常に馬上にある劍の申し子達を召集した。」^[84]

このとき、マフムードは Multān を攻圍中だったが、イリグ・ナスル渡河の報を聞き、急ぎガズニーンにとって返している。その途中でハラジュの軍勢が召集されたのであるから、この場合のハラジュはムルタンからガズニーンにいたる途上、すなわちアフガニスタン南東部の山嶽地域沿いに暮らしていた者達であったのだろう。カラ・ハン朝の Qadir Xān Yūsuf が、イリグ・ナスルの援軍としてトハリスターンに迫った時も、マフムード

^[83] وكشف سواد جيوشه ودانت له الافغانية والخلج فمتى شاء استثار منهم الآلاف في خدمته وامتهان الارواح والنفوس في نصرته والقيام بفرض طاعته.
(KY-i: 88)

^[84] واستنفر الاتراك الخلجية أحلاس الظهور أبناء الصوارم.
(KY-ii: 78)

は「テュルク、ハラジュ、インド、アフガン、ガズナの兵からなる大軍」⁽⁸⁵⁾を編成してバルフに急行した。

1040年、ダンダーナカーンの戦いで敗北した直後、当時のスルタン、Mas'ūd は、盗賊追い剥ぎ行爲を働くハラジュに対してガズニーンから懲罰遠征軍を派遣している (TB: 892)。この遠征軍の目的地は資料に明記されていないが、上述の状況を勘案すれば、それはやはり南東部の山嶽沿いの地域だったと推測される。

前代までの状況と、以上の断片的な資料を総合して判断すると、9-11世紀、ハラジュの居住地の中核はアフガニスタン南東部、特にアルガンダーブおよびヘルマンド中流域、すなわちブスト、ルッハジュ、ザミーン・ダーワルといった地域にあり、いくらかのグループは更に擴散して、ホラーサーン、ケルマーン方面にも到達していたということになる。そして彼らは通常は自らの住地において牧畜を営み、時に盗賊働きをし、そして必要に応じてガズナ朝の軍に傭兵部隊として組み込まれたのである。

2. ハラジュの擴散：ゴール朝とハラジュ

ガズナ朝に續いてホラーサーン、アフガニスタン、北インドを支配したゴール朝の時代、ハラジュの活動はやや詳細に資料に記録されるようになる。

(1) 西方のハラジュ

アフガン山塊の中央部から勢力を伸ばしたゴール朝もガズナ朝同様、近隣の様々な集團を兵力としてリクルートしていたが、當然ハラジュもその軍勢の中に含まれた。ゴールのスルタン、Giyāṭ al-Dīn Muḥammad の息子Giyāṭ al-Dīn Maḥmūd は、1203年に父が死去した後、叔父Mui'zz al-Dīnのもと、ブスト、Farāh, Isfizārを統治していたが、1206年にムイッズ・アッディーンが死去すると、Firūzkūhの玉座を目指して進軍した、この時「garmsirのハラジュのアミール達が多く部下を引き連れて彼に臣従してきた」⁽⁸⁶⁾という。ここで言うgarmsirとは文字通り「暖かい場所」という意味であるが、イスラーム史料の場合、しばしばそれは遊牧民の冬營地を指す (EI²: "GARMSHĪR")。アフガニスタンにおいて、イスラーム地理書や年代記がgarmsirと記す地域は大要、ルッハジュ、ブスト、

(85)

عساكر الترك و الهند و الخليج و الافغانية و الغزنوية

(KY-ii: 84)

(86)

امراء خلع گرمسير با حشم بسيار بخدمت او پيوستند.

(TN-i: 373)

ザミーンダーワル等、東南部の比較的高度の低い乾燥地帯とそこに点在するオアシスを含む地域であり、それは前節で示したハラジュの居住地域の中核と重なる場所なのである。

一方、ギヤース・アッディーンの死後、ゴールの王國は内紛とホラズムシャー朝との争いで弱体化していく。ついには1212年、Xwārazmšāh Muḥammadの援助を受けた、‘Alā al-Dīn Ḥusayn Jahānsūzの息子‘Alā al-Dīn Atsizによってフィールーズクーフが征服され、その後、ヘラートを除くゴール朝の領土はホラズムシャーの王子Jalāl al-Dīnに與えられた。

おそらくはこの頃から、ハラジュの兵はホラズムシャーの軍に加わるようになったのだろう。Ṭabaqāt-i Nāṣiriによれば、1220年、モンゴル軍に包圍されたSamarqandのまちには、ホラズムシャー・ムハンマドとともに、テュルク、ゴール、タジク、ハラジュ、カルルク、および、ゴールのマリク達からなる6萬騎が立て籠もっていたという(ṬN-ii: 107)。

一方、ホラズムシャー軍がサマルカンドを失い、ムハンマドが西方へと逃れたあげくに死去した後、ガズニ方面では次のような事態が生じていた。

サマルカンド陷落の後、「数え切れぬほどのハラジュとテュルクマンがホラーサーンとマー・ワラーアンナフルから落ち延びてきて」⁸⁷⁾、ペシャーワルのSayf al-Dīn Iğrāk Malikのもとに集結していた。J. A. Boyleによれば、このイグラーク自身、ハラジュのアミールだった(Boyle 1958-i: 133, n. 1)。一方、ガズニではホラズムシャーの家臣と、ゴールの軍勢の間に内紛が生じ、短期間の間にまちの支配者が次々と入れ替わっていた。しかしながらジャラル・アッディーンがやや遅れてガズニに到着すると、ガズニの軍勢、カーブルやインド方面から集結した軍勢にペシャーワルのイグラーク・マリク率いるハラジュ、テュルクマンの集團も加わり、總勢6, 7萬という大軍が整った。

ジャラル・アッディーンはこの軍を率いてカーブルの北Parwānに向かった。ジャラル・アッディーンの後を追ってブスト方面から北上してきたモンゴル軍を率いていたのは、Čingiz Xānの義理の息子と言われるŠigī Qūtūqū Nūyānであったが、パルワーンにおいて激突した兩軍の戦いは、ジャラル・アッディーンの勝利に終わった。しかしながらモンゴル軍から得られた戦利品の分配を巡ってホラズムの軍と、ハラジュ、テュルクマン、ゴールの民の間に諍いが生じ、イグラーク・マリクは後者の軍勢を率いてペシャーワル方面へとひきあげた。ところがこの軍勢の中でも再び内紛が生じ、ハラジュも

87)

خَلِج و تَرَكْمَان بِي حَدَّ از خِرَاسَان و مَا وِراءَ النَحْر بِهَم اِفْتَادَه بُوْدَنَد.

(JG-ii: 194-5)

ゴールの民も、多くが互いの手に掛かって殺されたという。一方、シギ・クトック・ノヤンの復讐のために軍をガズニーンに進めたチンギス・ハンは、インドに逃れたジャラル・アッディーンを追ってインダス方面へと進んだが、その際分遣隊を率いた Tajikak と Sayyid 'Alā al-Mulk-i Qunduz が到来して、ハラジュとテュルクマンとゴールの軍勢の生き残りを殲滅した。Juwaynī は

「結局、ハラジュとテュルクマンとゴールの2, 3萬の軍勢は、スルタン・ジャラル・アッディーンと袂を分かった後、二、三ヶ月もたたないうちに、皆、殺されてしまいか、散り散りになるかしてしまった。いくらかは彼らの内紛で、いくらかはチンギズ・ハーンの軍によってそうなったのである。彼らについては痕跡も残っていない。」⁽⁸⁸⁾

と記しているが、實は一部の者達は再びホラーサーンに姿を現している。すなわち、パルワーンにおけるジャラル・アッディーン軍の勝利の報に接してモンゴルに背いたメルヴのまちを、再び制壓するため、1221年、Qarā'ca Nūyān 率いる軍が鎮壓に向かったのだが、途中、シギ・クトック・ノヤンの軍勢もこれに合流し、その中には「[クトック・ノヤンの軍に徴發され] 同行していたガズナのハラジュ、アフガン」が含まれていたというのである⁽⁸⁹⁾。パルワーンの戦いの際か、あるいはその復讐戦の際に囚われた者達なのであろう。

さらにハラジュの姿はこの時代、もうしばらくの間歴史の表舞臺に留まる。Sayf b. Muḥammad b. Ya'qūb al-Harawī の *Tārīx-nāma-yi Herāt* によれば、ヘラートのクルト朝の王で、Malik Šams(Šams al-Dīn) の孫にあたる Faxr al-Dīn (位1285-1307) と Ġiyāṭ al-Dīn (位1308-1328) の時代、ヘラートの軍勢はゴール、ヘラート、スィースターン、ハラジュ、Balūč, Nikūdārī の民の混成軍であった (TNH: 424, 434, 506, 519, 593, 643, 682, 693, 696, 725)。本田實信 (1991: 162) が明らかにしたように、クルト朝の政權はゴール朝の復興という性格を有していたが、一方で Dānišmand Bahādur やその息子 Būjāy, あるいはチャガタイ家の Yasāwul によってヘラートが包圍攻撃された際に明確になった

(88) فی الجمله آن بیست سی هزار خلیج و ترکمان و غوری بعد از آنک از نزدیک سلطان جلال الدین برفتند بکمتر از دو سه ماه همه کشته و متفرق شدند چه بدست یکدیگر و چه بدست لشکرهای چنگز خانی و از ایشان اثر نماند.

(JG-ii: 198)

(89)

خلجان غزنوی و افغانیان که بحشر رانده بودند.

(JG-i: 143)

とおり、ヘラートと、Xayšār 城を中心とするゴール地方を除いた、アフガニスタンの土着地方君侯は、簡単にクルト朝を見限る頼りにならない存在でもあった (Cf. TNH: 505, 717-25)。フレグ・ウルスおよびチャガタイ・ウルスの王家や、モンゴル諸侯の間の極めて錯綜した政治・軍事・外交関係の中で、一世紀以上にわたって政權を維持し続けることができたクルト朝を支えたのは、上述の混成軍なのである。北川誠一はクルト朝の兵力を分析して、それを ① クルト朝の本據地であるゴールとヘラートの部隊、② クルト朝の支配權を承諾する各地の土着君侯の補助軍、③ ヘラート近隣に住むイラン系、トルコ系遊牧民部隊、の三種に分類している (北川 1983: 662-3)。ハラジュはバルーチやニクーダリーとともに第三のカテゴリーに分類されているが、彼らがクルト朝とどのような關係を結んでいたのか、史料からは必ずしも明らかではない。あるいは傭兵集團の如き者達だったのかもしれない。

(2) インドのハラジュ

ハラジュの擴散は、東方インドに向けても及んでいった。ゴール朝はガズナ朝のあとを繼いで積極的に北インドに進出したが、ハラジュはその遠征軍に重要な兵力を提供したとされているのである (Jackson 1999: 18)。

イブン・アルアスィールは、1187 年、ムイッズ・アッディーンがチャーハマーナ朝の Prithvirāja 率いる連合軍に對して、「ゴール、ハラジュ、ホラーサーンその他の者達からなる大軍」⁽⁹⁰⁾ をもってあたったことを記す。そうして、戦いで重傷を負ったムイッズ・アッディーンはテュルク人ゴラームに助け出されたとされるが、同じ事件を記録する *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* は、ムイッズ・アッディーンを戰場から助け出したのは、「一人のハラジュのアイヤールの勇士」⁽⁹¹⁾ であったとする⁽⁹²⁾。

また 1226 年、かつてホラズム軍の一部だったハラジュの集團がホラーサーンを逃れスィンドの Maṣūra に到達してこれを占據したと *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* は記す。當時ムルターン南方の要衝 Učč を支配していた Nāṣir al-Dīn Qubāča は、彼を頼ってやはりアフガン高地から逃れてきたゴールのマリク達を率いてマンスーラを攻め、ハラジュを撃退

(90)

عسكر عظيم من الغورية والخلج و الخراسانية وغيرهم.
(IA-xi: 172)

(91)

خلج بچه عيارى مبارزى
(TN-i: 399)

(92) このプリティヴィラージャ王のゴール軍に對する勝利は、Kaśmīr 出身の宮廷詩人 Jayānaka による作品『プリティヴィラージャの勝利』巻 6 の中にもうたわれている (村上 1999 参照)。

し、そのリーダーであった Malik Xān-i Xalaj を殺している (TN-i: 420)。時期的な前後関係を考慮すると、マンスーラを征服したこのハラジュの集團の中には、かつてカーブル川流域でモンゴル軍に敗れたイグラーク麾下のハラジュが含まれていた可能性もある。

インドにおけるハラジュの活動は、しかしながら更に東方で最も大きく花開いた。ムイッズ・アッディーンの時代、一旗あげようと目論んでインドに到来した Muḥammad b. Baxtiyār は「ゴールと *garmsir* のハラジュ」の出身であった。当初デリーにおいて仕官を果たせなかった彼は、Badā'un および Awadh の地において *gāzī* のリーダーとして実績を積んだ。彼の名聲が高まると「ハラジュの一團」がヒンドウースターンから彼のもとへやってきたという。武具、馬、兵力を充實させたムハンマドは 1190 年代以降 Bihār を攻め、1204 年には Nadiyā (現 Nabadwip) を征服し、Sena 朝の Lakṣmaṇasena (位 1178–1205) を逐って、ベンガル北部および西部を支配下に置いた⁹³。彼は Lakhnawti (Gawr) のまちを建設し、この地はその後約 4 世紀間にわたって東インドにおけるムスリム支配の據点となった。また失敗に終わりはしたものの、東インドから中央アジア方面へのルートを開拓すべく、チベットを目指す遠征を試みもした (TN-i: 422–32, Cf. Majumdar et al. 1979: 38–40; Eaton 1997: 32 & n. 10; Wink 1997: 148–9)。

彼の死後は、'Izz al-Dīn Muḥammad Šīrān, 'Alā al-Dīn 'Alī Mardān, Ġiyāṭ al-Dīn 'Iwāḍ Ḥusayn といったハラジュのマリク達がラクナウティーの *gāzī* 集團を率いた。ムハンマド・ブン・バフティヤール以降、ラクナウティーのハラジュはデリーのスルタンの主権を認めてはいたが⁹⁴、實質的には獨立して活動していたのであった。しかしながら 1225 年、ギヤース・アッディーンはデリーのスルタン Iltuṭmīš の前に膝を屈し、翌 26 年にはイルトゥトミシュの王子 Nāṣir al-Dīn Maḥmūd によってラクナウティーが征服され、ギヤース・アッディーンは殺された。それでもベンガル、ビハールのハラジュの *gāzī* 集團は、その後もしばらく同地域において影響力を持ち続けたようで、1230 年、ナースィル・アッディーンが死ぬと、Balkā Xalji がラクナウティーで叛亂を起こし、イルトゥトミシュにより鎮壓されている (TN-i: 447–8)⁹⁵。

⁹³ ムハンマド・バフティヤールのベンガル征服の年次については、いくつかの説がある。Cf. Mohar Ali 1985: 54–5, n. 2。

⁹⁴ ムハンマド・バフティヤールはベンガル征服後の 1204–5 年、デリーの支配者ムイッズ・アッディーンの名を刻んだ金貨を発行している。Cf. Eaton 1997: 33–4。

⁹⁵ Raverty (1979-i: 618) は、“Balkā Malik-i Ḥusām-ud-Dīn, 'Iwāḍ, the Khali” とし、彼を、先に殺されたギヤース・アッディーンの息子だとしている。また、I. H. Siddiqui (1992: 33–4) は、叛亂を起こした “Balkā Khali” を、'Awfī の *Jawāmi' al-Ḥikāyāt* (JH-ii: 552–6) にあらわれるところの、Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の死後ラクナウティーで叛亂を起こした Dawlatšāh なる人物に同定している。

1290年デリーにおいて即位し、いわゆるハルジー朝を開いた Jalāl al-Dīn Firūzshāh Xalji の前歴はよくわかっていない。最初, Sāmāna の代官であった彼は、デリーに召還され、王國の 'ard と Baran (Bulandshahr) のイクターを與えられた。サマナはラホール、ムルタン、Bhakkar, Tabarhind, Dipālpūr と並んで、モンゴル軍の侵入に備えるための防衛戦を形成した地域であった (Wink 1997: 233-4)。デリー召還後、彼には「ハラジュのマリク達、アミール達」が従っていたという (TFŠ: 170, 172) から、やはりハラジュ部族集團のリーダーとして、王國の西邊防衛のために配備されていた人物だったのだろう。ただ、この當時すでにハラジュが何者であるのかという點は随分不鮮明になっていたようで、Ḍiyā' al-Dīn Baranī は、デリーの政治的支配層を形成していたテュルク系の人々も、デリーのまちの民も、非テュルクの者が王國の主要ポストにつけられたことに對して不満を持ったと記している。これはこの頃すでにハラジュが、インドにおいてはテュルクと異なる集團として認識されていたことを意味している (TFŠ: 171, 175-6; Cf. Lal 1980: 9; Habibullah 1967: 194-5; Jackson 1999: 82-3)⁹⁶。前掲の *Jahān-nāma* に「言語も變化し、[元來の言語とは] 別の言葉になった。」とある通り、彼らは言語的にも既にテュルク系のそれを使用していなかった可能性もある⁹⁷。

ジャラル・アッディーン王朝は、武力ではなく、政治的交渉と妥協の上に成立したものであったため、ハルジー朝初期の政治的支配層は前代の Giyāṭ al-Dīn Balban 政權の

⁹⁶ なお、インドの歴史家はハラジュの起源あるいはその名稱の語源説として、モンゴルの將軍 Qalič Xān に由來するという説を記すものが多い。Cf. TA-i: 116-7; Lal 1980: 13。

⁹⁷ デルファールは、ミノルスキーや彼のチームが調査したイランのハラジュと、このインドのハルジー朝の間に、部族名の同一性に據って関係を認めることに反對している (Doerfer 1971: 171)。たしかに遠く東西に離れてしまった後、兩者の間になんらかのコンタクトがあったとは認めがたいし、本文中でも述べたとおり言語的文化的にテュルクから變化してしまっただ後のハラジュを、テュルク語を保持していた西方のハラジュのコミュニティーと同一のものとして扱うのは正確さを缺くかもしれない。しかしながら、ハラジュ部族の辿った長い歴史の流れの下流に兩者が位置する、と考えること自體を否定する必要もないだろう。たとえば、13世紀半ばに書かれた Ibn Sa'īd al-Mağribī の *Kitāb al-Juğrāfiyā* に見える、

「スィースターンの南には、Qalaj の居住地域がある。彼らはテュルクで、その勇猛さは、ヒンドの征服によって實證された。彼らはそれに連なるインドの地を征服し、Ajah (ウッチュ) のまち、Nahāwar (ナフラワーラ) のまちからミフラーン川まで支配した。」

في جنوبي سجستان مجالات الفلج وهم ترك ولهم شهامة قد أبلوا في فتوح الهند ففتحوا
منها ما ولاهم وملكوا مدينة أجه و مدينة نهاور على نهر مهران.

(KJ: 163)

という記述は、アフガニスタン南部にいたハラジュがインド征服に大きな役割を果たしたと、當時認識されていたことをよく示しているのである。なおこの記述の存在については井谷鋼造氏のご教示にあずかった。記して謝意を表する。

それとの間に強い繼續性を示すが、それでもスルタンの同族のハラジュの者達もある程度要職を得ることが出来た (Jackson 1999: 82-4)。それは舊體制の人材を一掃し、新たな人材を登用した 'Alā al-Dīn Muḥammad Šāh (位 1296-1316) の時代においても同様だった。またハルジー朝が倒れてから 100 年餘り後、Mālwa の地にやはりハルジーの名を持つ王 Maḥmūd Šāh Xalji があらわれ、彼の家系は 1531 年に同地が Gujarāt のスルタンに征服されるまで王位を保持した⁹⁸。これらは表層的な事實に過ぎないかもしれないが、それでもハラジュの系統に連なる集團や家系が、この時代北インドに定着し、王や有力者を輩出する階層の一部をなしていたことをよく示している。

以上述べてきたことから、ハラジュの廣範圍への擴散と、その活動の活發化は、特にゴール朝時代以降に生じた現象とみてよかろう。ゴール朝の先驅者であるガズナ朝は、アフガン山塊を周回する道をコントロール下に置き、そこからあがる利益を用いて北西インドへと進出した。ゴール朝もほぼ同じ道筋を辿ったのだが、大きく異なっていたのは、彼らの擴大の波がアフガン山塊内部からスタートし、山塊の外側からさらに四方にむけて進んだという点である (Cf. 稻葉 1994; 1999)。アフガン山塊周縁部に居住していたハラジュは、その波に乗ったのだと考えられる。13 世紀から 14 世紀にかけてのヘラートにおけるハラジュの存在は、當然ゴール朝時代におけるハラジュの動向の結果であった。本田が指摘する如く、1215 年にホラズムシャーによって征服されたゴール朝の諸構成要素はホラズムシャーの支配下に置かれていたが、その上部構造がモンゴルによって除かれたことにより、一部はクルト朝のもとに再結集した (本田 1991: 140)。ゴール朝の擴大とともに活動範圍を広げていったハラジュも當然この動きに乗っていたはずであり、ホラズムシャー朝の軍勢に参加していたものもいれば、ヘラート近邊に住み着いていた者もいたということであろう。一方、東方においてはゴール朝およびその後繼勢力の北インド征服に参加し、遠くベンガルにまで到達した者達もいた。譬えはうまくないかもしれないが、ゴール朝の擴大は、アフガン山塊東南部、すなわち *garmsir* を住地としていたハラジュを四方に向かって打ち出すカタパルトのような働きをし、打ち出されたハラジュという砲彈は、ホラズムシャーやモンゴル、あるいはインドといった存在にぶつかり、ある時は減速し、またある時は加速され、多様な着弾地點を持ったと言えるだろう。先にあげた *Jahān-nāma* は 12 世紀にはハラジュの一團が Bāward (Abiward) にまで到達していたことを知らせてくれ、さらに時代が下ってティムール朝時代には、ハラジュの一團がサーヴェ、コ

⁹⁸ マルワの王國は、Timūr のデリー征服がトゥグルク朝の支配を瓦解させ、北インドが混亂する中で自立した。最初この王國を統治していたのは、ゴールからの移民の子孫とされる Dilawar Xan Ġūrī の家系であった。Cf. Habib & Nizami 1993: 899-934。

ム、Kāshān といったイラン高原西部にまで到達していたことが、Yazdi の記述 (ZN: 450 b) からわかる。言うまでもなくそれは、ミノルスキーやデルファーが調査した現代の Xalajistān と重なる地域なのである⁹⁹⁾。

VIII おわりに ——その後のハラジュと Gilzai——

以上で本論で述べるべきことは全てである。ここまで述べてきたことを簡単にまとめておこう。

ハラジュは元來、シル河の東、おそらくはタラーズからイシク・クル、あるいはさらに東の地域に居住しており、5-6 世紀頃、その一部がエフタルの拡大の波に乗ってトハリスターンに到来した。6 世紀後半、トハリスターンが西突厥に攻略されると、トハリスターンのハラジュの一部はさらにヒンドークシュを南に越え、カーブル、ザーブリスターンの西側の山嶽地帯に住み着いた。7 世紀、このハラジュの一部はカーブル、ザーブリスターンに進出し、同地にテュルクの王國を建てる。漢語史料に「訶達羅支/葛達羅支」としてあらわれ、また後代のイスラーム史料にテュルクシャー、および *rtbyl* の王國として記録されるのがそれである。9 世紀にこの二つの王國がそれぞれ、ヒンドゥーシャー朝とサッファール朝によって滅ばされた後、ハラジュの民はアフガニスタン南東部を主な居住地としつつ、ガズナ朝やゴール朝の拡大の波によってホラーサーンや北インドに広がっていった。特にインドにおいてはベンガル、ビハールの征服という大事をなしとげ、さらにはハラジュ出身のジャラル・アッディーンがハルジー朝をうち立てるに至った (圖 3 参照)。

ところで、アフガニスタン南東部のハラジュはその後どうなったのだろうか。アフガニスタンに残ったハラジュが、アフガン族に同化し、その名を変えて Gilzai として存続しているという “popular etymology” は古くから多くの議論を呼んできた。確かにギルザイ部族はアフガニスタン東南部に據點を持っており、また名稱の點からも、Xilji → Gilzi < Gilzai という變化は十分起こりうるとの見解がミノルスキーによって示されている (Minorsky 1940: 433)。M. Longworth Dames やラヴァーティーはこの考えに反対しているが¹⁰⁰⁾、O. Caroe は、17 世紀半ばのパシュトゥーン語の詩を根據に、遅くとも 17 世紀にはハラジュとギルザイが同じものであるという認識が成立していたのだ、と論じている

⁹⁹⁾ F. Köprülü は、アゼルバイジャン、アナトリア、クリミアにも “Khalaj” という名をもつ村があること示している。Cf. *İslâm Ansiklopedisi*, “HALAÇ”。

¹⁰⁰⁾ Cf. EI², “GHALZAY”; Raverty 1982: 346, 669。なお、これらの議論は Minorsky 1940: 433, n. 4 に概括されている。

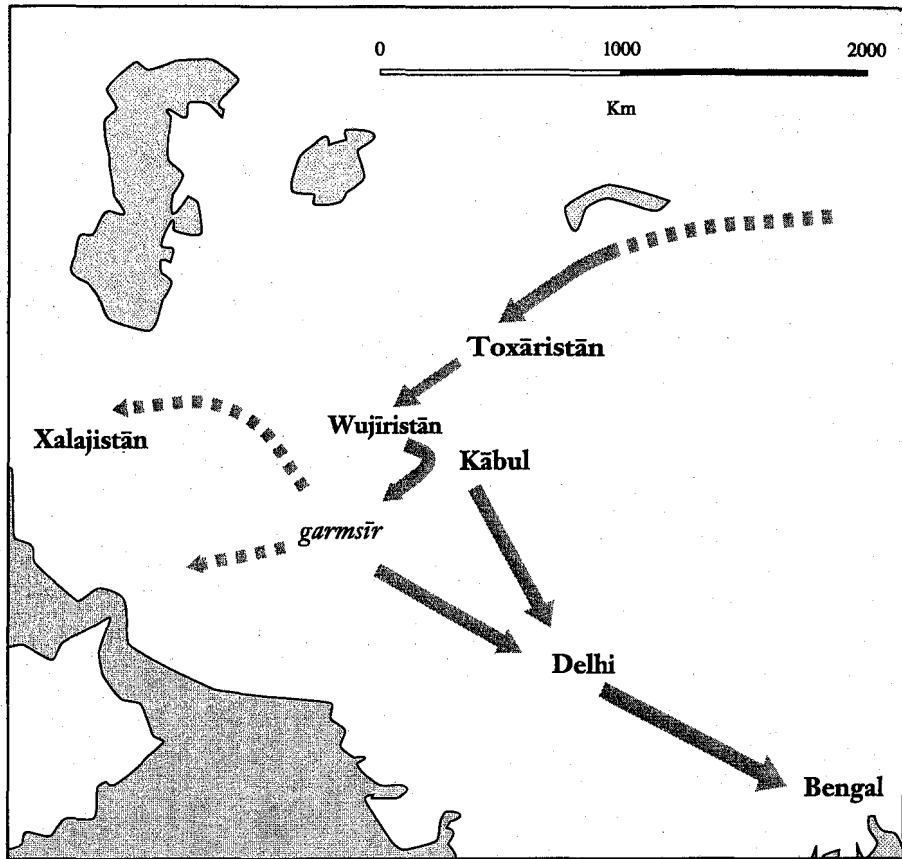


圖3 ハラジュの移動と擴散

(Caroe 1964: 131)。

我々が文献史料の中にギルザイの名前を初めて見るのは、16世紀の *Bābur-nāma* においてである。すなわち Bābur は1507年、ギルザイ族を攻撃するためにカーブルを發ち、ガズニ方面に向かっているが、ここで登場するギルザイはアフガン族の一部とみなされている(間野 1998: 321-2)⁽¹¹⁾。その後17世紀になって、サファヴィー朝の Šāh ‘Abbās により、カンダハールの Abdālī部族がヘラートに移住させられた後、ギルザイはカンダハール方面に移動した。18世紀初頭、ギルザイのリーダーであった Mirwais はペルシアに對

(11) 實は *Bābur-nāma* には別に خړلجی (あるいは خړلجی) なる部族名があらわれる。それはアフガン族の一つで、ガルディーズからコハトにかけての一帯に居住し、北はナガラハラとカーブルの間の街道で追い剥ぎや盜賊働きを行っていたと報告されている(間野 1998: 207, 220, 246, 337-8)。この部族については、間野英二もあるいは A. S. Beveridge も述べるところがなく、管見の及ぶ限り他の資料も見当たらないため、不明とせざるをえないが、字形としては خړلج に類似する。

して反亂を起し、彼の死後はその息子 Maḥmūd がケルマーン、Isfahān を占領し、1730 年までペルシアを支配した。Nādir Šāh に撃破されたギルザイは、アフガニスタンにおいても最有力部族の座を Aḥmad Šāh 率いるアブダリー / Durrānī 部族に明け渡すことになるが、それでも彼らの勢力は大きかった。19 世紀初頭にはドゥッラーニー家の Šāh Šujā'a と組んでカーブルを奪回し、1886 年には時の王 'Abd al-Raḥmān に對して大規模な反亂を起こしたりもしている (Cf. Caroe 1964: 250-3; EF²: "GHALZAY")。

このようなギルザイがハラジュの子孫であるのなら、1500 年近くの間アフガニスタンの歴史に大きな役割を果たし続けてきたという点で、稀有の存在というべきなのだろう。バーブルがギルザイに言及する段階で、すでにハラジュが東部アフガニスタンに到来してから 1000 年近い時間が経過しているわけで、その間非常に多様な集團による征服と移住の波がこの地域を洗ってきた。その中でハラジュが自身の固有の文化や言語を純粹に保持し得たとすれば、その方が不思議なのかも知れない。しかしながらハラジスタンの言語調査は、少なくとも言語に關してはそのような例が實際に存在することを示している。なにより、13 世紀から 16 世紀にいたる時期、すなわちアフガニスタン東部のハラジュとギルザイの間を結ぶ時期に關する情報が全く缺けている現時点において、この兩者を同一のものであると積極的に主張するのは容易ではない。

とはいえ、ギルザイがハラジュの子孫であろうとなかろうと、本稿で述べてきた如く、遠く内奥アジアからアフガニスタンに到来したハラジュが、そこから更に西はイラン高原の西端、東はベンガル灣に臨む地域にまで擴散し、活發に活動したという事實が、中央アジアと西アジア、南アジアを結ぶ人間の動きの歴史的實例を提示しているという点には間違いはないだろう。そして我々は、逆にこのハラジュの動向を通じて、三つの歴史世界の結節点としてのアフガニスタンの特性を一層明確に知ることが出来るのである。

史料略號

- 『慧超傳』: 桑山正進編『慧超往五天竺國傳研究』, 京都大學人文科學研究所, 1992.
 『舊唐書』: 劉昫等撰, 中華書局標點本 (全 16 冊) 1975.
 『高麗藏』: 『高麗大藏經』 48 卷, 1954-1976.
 『西域記』: 玄奘, 辨機著, 季羨林等校注, 『大唐西域記校注』, 中華書局, 1999.
 『冊府元龜』: 王欽若等撰, 臺灣中華書局印行本 (全 20 冊), 1967.
 『慈恩傳』: 慧立, 彥棕著, 孫毓棠, 謝方點校, 『大唐大慈恩寺三藏法師傳』, 中華書局, 2000.
 『資治通鑑』: 司馬光編著, 胡三省音注, 中華書局標點本 (全 20 冊) 1956.
 『新唐書』: 歐陽修, 宋祁撰, 中華書局標點本 (全 20 冊) 1975.
 『隋書』: 魏徵等撰, 中華書局標點本 (全 6 冊) 1973.
 『大正藏』: 『大正新脩大藏經』 100 卷, 1924-1932.

- 『太平寰宇記』: 樂史撰, 光緒八年金陵書局刊本。
- 『通典』: 杜佑撰, 王文錦・王永興・劉俊文・徐庭雲・謝方點校, 中華書局 (全 5 冊), 1988。
- 『唐會要』: 王溥撰, 中華書局本 (全 3 冊), 1955。
- 『梁書』: 姚思廉撰, 中華書局標點本 (全 3 冊) 1973。
- ČM.: Nizāmi Arūdi Samarqandi, *Čahār Maqāla*. ed., M. Qazwini, Leiden, 1910.
- EL²: *The Encyclopaedia of Islam, New Edition*, E. J. Brill, 1960–2001.
- FB: al-Balāḍuri, *Kitāb Futūḥ al-Buldān*. ed., Ṣalāḥ al-Din al-Munajjid, al-Qāhira, 1956.
- Historiae.: al-Ya'qūbī, *Historiae*. 2 Vols., ed., M. Th. Houtsma, Leiden, 1969.
- IA: Ibn al-Aṭīr, *al-Kāmil fi al-Ta'riḥ*. 13 Vols., ed., C. J. Tornberg, Beirut, 1979.
- Iṣṭ.: al-Iṣṭaxrī, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed., M. J. de Goeje, Leiden, 1967.
- IX: Ibn Xurdādbih, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed., M. J. de Goeje, Leiden, 1967.
- JG: 'Alā al-Dīn 'Aṭā' Malik al-Juwaynī, *Tāriḥ-i Jahāngūšāy*. 3 Vols., ed., Muḥammad Qazvini, (rep.), Tehran.
- JH: Muḥammad 'Awfī, *Jawāmi' al-Ḥikāyāt wa Lawāmi' al-Riwāyāt*. 2 Vols., ed., Amīr Bānū Muṣaffā & Maḏāḥir Muṣaffā, Tehran, 1975.
- JN: Muḥammad b. Najīb Bakrān, *Jahān-nāma*, ed., Muḥammad Amin Riyāḥī, Tehran, 1963.
- JT: *Jāmi' al-Tawāriḥ*. 2 Vols., ed., Bahman Karīmī, Tehran, 1984.
- KB: al-Ya'qūbī, *Kitāb al-Buldān*. ed., M. J. de Goeje, Leiden, 1967.
- KJ: Ibn Sa'īd al-Mağribī, *Kitāb al-Juğrāfiyā*, ed. Ismā'īl al-'Arabī, Beirut, 1980.
- KY: al-'Utbi, *Kitāb al-Yamīnī*. 2 Vols. In: Ṣayx Manīnī's *al-Faṭḥ al-Waḥbī*. al-Qāhira, 1869.
- MB: Yāqūt al-Rūmī, *Mu'jam al-Buldān*. 5 Vols., Beirut, 1984.
- MD: al-Mas'ūdī, *Murūj al-Daḥab wa Ma'ādan al-Jawhar*. 4 Vols. in 2, Beirut.
- MK'A: al-Jawālīqī, *Mu'arrab min al-Kalām al-'Ajamī*. ed., F. 'Abd al-Raḥīm, Beirut, 1990.
- M'U: Abū 'AbdAllāh al-Xwārizmī, *Mafātīḥ al-'Ulūm*. ed., G. van Vloten, Leiden, 1968.
- Muq.: al-Muqaddasī, *Aḥsan al-Taqāsīm fi Ma'rifat al-Aqālīm*. ed., M. J. de Goeje, Leiden, 1967.
- OP: Ṣarīf al-Idrīsī, *Opus Geographicum (Kitāb Nuzhat al-Muštāq fi 'Ikhtirāq al-Āfāq)*, 9 fascs., ed., E. Cerulli, A. Bombaci et al., Naples and Rome, 1970–1984.
- PO: de Maynard, B. & P. de Courteille (tr.), *Les prairies d'or*. 5 Vols., revue et corrigée par Ch. Pellat, Paris. 1962–1997.
- SM: Nizām al-Mulk, *Siyar al-Mulūk*. ed., H. Darke, (3rd ed.), Tehran, 1976.
- ṬA.: Nizām al-Dīn Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī*. 3 Vols., eds., B. De & M. H. Husain, Calcutta, 1913–41.
- TB: Abū al-Faḍl Bayhaqī, *Tāriḥ-i Bayhaqī*. ed., 'A. A. Fayyāḍ, Mašhad, 1977.
- TFŠ: Ḍiyā' al-Dīn Baranī, *Tāriḥ-i Firūzshāhī*. ed., S. A. Khan, (rep.), Osnabrück, 1981.
- TG: Abū Sa'īd Gardīzi, *Tāriḥ-i Gardīzi*. ed., 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, Tehran, 1988.
- ṬN: Minhāj Sirāj-i Jūzjānī, *Ṭabaqāt-i Nāširi*. 2 Vols., ed., 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, Kābul, 1964.
- TNH: Sayf b. Muḥammad b. Ya'qūb al-Harawī, *Tāriḥ-nāma-i Herat*. ed., Muḥammad Zubayr al-Šiddiqī, Tehran, 1973.
- TRM: al-Ṭabarī, *Ta'riḥ al-Rusul wa'l-Mulūk*, 16 Vols., ed., M. J. de Goeje, Leiden, 1879–1901.
- TS: anonym., *Tāriḥ-i Sistān*. ed., Malik al-Šu'arā Bahār, Tehran, 1938.
- WA: Ibn Xallikān, *Wafāyat al-A'yān*. 6 Vols., ed., A. 'Abbās, (rep.) Beirut, 1988.
- ZN: Ṣaraf al-Dīn 'Alī Yazdī, *Ẓafar-nāma*. ed., A. Urundayev, Tashkent, 1972.

参考文献

- Alram, M. (1996) Alchon und Nēzak. Zur Geschichte der iranischen Hunnen in Mittelasien. In : G. Gnoli et al. (eds.), *La Persia e l'Asia Centrale da Alessandro al X secolo*. Rome, 517–54.
- Alram, M. (1999–2000) A Hoard of Copper Drachms from the Kāpiśa–Kabul Region. *Silk Road Art and Archaeology* 6, 129–50.
- Ball, W. (1982) *Archaeological Gazetteer of Afghanistan*. 2 Vols., Paris.
- Beal, S. (1983) *Buddhist Records of Western Countries*. (rep.), New Delhi.
- Beal, S. (1986) *The Life of Hiuen-Tsiang*. (rep.), Delhi.
- Bivar, A. D. H. (1954) The Inscriptions of Urzgan. *JRAS* 1954, 112–8.
- Bombaci, A. (1970) On the Ancient Turkic Title Eltäbär. *Proceedings of the IXth Meeting of the Permanent International Altaistic Conference*. Naples, 1–66.
- Bosworth, C. E. (1994) *The History of the Saffarids of Sistan and the Maliks of Nimruz*. Costa Mesa, California & New York.
- Boyle, J. A. (tr.) (1958) *The History of the World Conqueror*. 2 Vols., Manchester University Press.
- Brankinship, Kh. Y. (1989) *The History of al-Ṭabarī XXV: The End of Expansion*. New York State University Press.
- Caroe, O. (1964) *The Pathans 550 B. C. – A. D. 1957*. (rep.), London.
- Chavannes, É. (1969) *Documents sur les Tou-Kiue (Turcs) occidentaux*. (rep.), Taipei.
- Clauson, G & C. E. Bosworth (1965) Al-Xwārizmī on the People of Central Asia. *JRAS* 1965, 2–12.
- Cunningham, A. (1962) *Later Indo-Scythians*. (rep.), Delhi.
- Dankoff, R & J. Kelly (tr.) (1982) *Compendium of the Turkic Dialects*. 3 Vols., Harvard University Printing Office.
- Davary, G. D. (1982) *Baktrisch. Ein Wörterbuch auf Grund der Inschriften, Handschriften, Münzen und Siegelsteine*. Heidelberg.
- Doerfer, G. (1971) *Khalaj Materials*. Indiana University.
- Doerfer, G. (1987) *Lexik und Sprachgeographie des Chaladsch*. 2 Vols., Harrassowitz.
- Eaton, R. M. (1997) *The Rise of Islam and the Bengal Frontier, 1204–1760*. Oxford University Press, Delhi.
- Edgerton, F. (1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. 2 Vols., Yale University Press.
- 榎一雄 (1993) 唐代の拂菻國に關する一問題. 『榎一雄著作集第三卷』, 汲古書院, 210–43.
- Esin, E. (1977) Tarkhan Nizak or Tarkhan Tirek? : An Enquiry Concerning the Prince of Bādhghīs who in A. H. 91/A. D. 709–710 Opposed the 'Omayyad Conquest of Central Asia. *Journal of the American Oriental Society* 97 (3), 323–32.
- 古畑徹 (1989) 『唐會要』の諸テキストについて. 『東方學』78, 82–95.
- 古畑徹 (1998) 『唐會要』の流傳に關する一考察. 『東洋史研究』57 (1), 96–124.
- Frye, R. N. (1974) Napki Malka and the Kushano-Sasanians. In : D. K. Kouymjian (ed.), *Near Eastern Numismatics, Iconography, Epigraphy and History. Studies in Honor of George C. Miles*, Beirut, 115–22.

- Frye, R. N. & A. M. Sayili (1943) Turks in the Middle East Before the Seljuqs. *Journal of the American Oriental Society* 63 (3), 194-207.
- Ghafur, M. A. (1965-66) Two Lost Inscriptions Relating to the Arab Conquest of Kabul and North West Regions of West Pakistan. *Ancient Pakistan* 2, 4-12.
- Göbl, R. (1967) *Dokumente zur Geschichte der iranischen Hunnen in Baktrien und Indien*. 4 Vols., Harrassowitz.
- Grenet, F. (2002) Regional Interaction in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hephthalite Period. In: Sims-Williams (ed.), *Indo-Iranian Languages and Peoples*, Oxford, 203-24.
- Habib, M. & Kh. A. Nizami (eds.) (1993) *A Comprehensive History of India*. Vol. 5, (2nd ed.), New Delhi.
- Habibullah, A. B. M. (1967) *The Foundation of Muslim Rule in India*. (rep.), Allahabad.
- Hamilton, J. (1962) Toquz-Oguz et On-Uyghur. *JA* 250, 23-63.
- 花田宇秋 (譯) (1996) バラーズリー著『諸國征服史』—19—『總合科學研究』54 (明治學院論叢 584), 87-172.
- Harmatta, J. (1969) Late Bactrian Inscriptions. *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 17, 297-432.
- Harmatta, J. (1996) Tokharistan and Gandhara under Western Türk Rule (650-750). In: Litvinsky, B. A., Zhang Guang-da & R. Sh. Samghabadi (eds.), *History of Civilizations of Central Asia III*. Paris, 367-83.
- 林徹 (1992) ハラジュ語. 『言語學大辭典』第3卷. 三省堂.
- 林俊雄 (1976) (紹介) ベー=イェ=クメコフ著『アラビア語史料による九—一世紀のキーマーク國家』. 『東洋學報』58 (1-2), 209-14.
- 本田實信 & 小山皓一郎 (1973) オグズ=カガン説話 I. 『北方文化研究』7, 19-63.
- 本田實信 (1991) ヘラートのクルト政權. 『モンゴル時代史研究』, 東京大學出版會, 127-63.
- Humbach, H. (1966) *Bactrische Sprachdenkmäler I*. Wiesbaden.
- Humbach, H. (1967) Two Inscriptions in Greco-Bactrian Cursive Script from Afghanistan. *East and West* 17 (1-2), 25-6.
- Humbach, H. (1983) Phrom Gesar and the Bactrian Rome. In: P. Snoy (ed.), *Ethnologie und Geschichte: Festschrift für Karl Jettmar*, Wiesbaden, 303-9.
- Humbach, H. (1996 [1998]), Pangul, a Turco-Bactrian Ruler. *Bulletin of the Asia Institute* 10, 247-251.
- 稻葉穰 (1991) 七—八世紀ザブリスターンの三人の王. 『西南アジア研究』35, 39-60.
- 稻葉穰 (1994) ガズナ朝の「王都」ガズナについて. 『東方學報』京都66, 252-200.
- 稻葉穰 (1999) ゴール朝と11-12世紀のアフガニスタン. 『西南アジア研究』51, 16-42.
- 稻葉穰 (2003) ナーイ・カラ石窟開窟の歴史的背景について. 『西南アジア研究』58, 83-96.
- Jackson, P. (1999) *The Delhi Sultanate: A Political and Military History*. Cambridge University Press.
- 辛島靜志 (1994) 『長阿含經』の原語の研究: 音寫語分析を中心として. 平河出版社.
- 片山章雄 (1981) Toquz Oguz と「九姓」の諸問題について. 『史學雜誌』90 (12), 39-55.
- 北川誠一 (1983) クルト朝とニクーダリーヤーン. 護雅夫 (編) 『内陸アジア・西アジアの社會と文化』, 山川出版社, 647-65.

- Kohzad, A. 'A. (1968) *Shāh Bahār*. Kabul.
- 桑山正進 (1982) 葱嶺山と阿路孫山. 『考古學論考—小林行雄博士古稀記念論集』, 平凡社, 1067-86.
- 桑山正進 (1990) 『カーピシー＝ガンダーラ史研究』, 京都大學人文科學研究所.
- 桑山正進 (1991) ガネーシャ神像碑銘にみえるカーブル突厥王の編年. 『西南アジア研究』 35, 22-38.
- 桑山正進 (1993) 6-8世紀 Kāpīśī-Kābul-Zābulの貨幣と發行者. 『東方學報』 京都 65, 430-381.
- Kuwayama, Sh. (1999) Historical Notes on Kāpīśī and Kābul in the Sixth-Eighth Centuries. *Zinbun* 34 (1), 25-77.
- 桑山正進 (2001) 馨孃 順達 刹利 曷攝支. 石上善應古稀記念論文集刊行會 (編), 『佛教文化の基調と展開』 第1巻, 山喜房佛書林, 131-45.
- Kuwayama, Sh. (2002) *Across the Hindukush of the First Millennium*. Institute for Research in Humanities, Kyoto University.
- Lal, K. S. (1980) *History of the Khaljis*. New Delhi.
- Lee, J. & N. Sims-Williams (2003) The Antiquities and Inscription of Tang-i Safedak, *Silk Road Art and Archaeology* 9, 159-84.
- Le Berre, M. (1987) *Monuments pré-islamiques de l'Hindukush central*. MDAFA 24, Paris.
- Ligeti, L. (1971) À propos du «Rapport sur les rois demeurant dans le Nord». *Études tibétaines: dédiées à la mémoire de Marcelle Lalou*, Paris, 166-89.
- 李珍華& 周長楫 (編) (1999) 『漢字古今音表』 (修訂本). 中華書局.
- Litvinsky, B. A. & M. H. Zamir Safi (1996) The Later Hephthalites in Central Asia. In: Litvinsky, B. A., Zhang Guang-da & R. Sh. Samghabadi (eds.) *History of Civilizations of Central Asia* III, Paris, 176-83.
- 前嶋信次 (1971) タラス戦考. 東西文化交流の諸相刊行會 (編) 『東西文化交流の諸相』, 129-200.
- Majumdar, R. C. et al. (eds.) (1979) *The History and Culture of the Indian People, V: The Struggle for Empire*. (3rd ed.), Bombay.
- 間野英二 (譯注) (1998) 『パーブル・ナーマ』, 松香堂.
- Maróth, M. (1990) Die politische Geographie Afghanistans im 7.-8. Jahrhundert. In: J. Harmatta (ed.), *From Alexander the Great to Kül Tegin*, Budapest, 133-37.
- Marquart, J. (1901) *Ērānšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*. Berlin.
- Marquart, J. & J. J. M. de Groot (1915) Das Reich Zābul und der Gott Žūn vom 6.-9. Jahrhundert. In: G. Weil (herausgeben), *Festschrift Eduard Sachau*, Berlin, 248-92.
- 松田壽男 (1956) 『古代天山の歴史地理學的研究』, 早稻田大學出版部.
- 松田和信 (2003) アフガニスタンとパキスタンから發見された佛教寫本の研究. 『論集 原典』 (平成10-14年度文部科學省科學研究費補助金特定領域研究 (A) 「古典學の再構築」研究成果報告集 II), 神戸, 109-20.
- Minorsky, V. (1940) The Turkish Dialect of the Khalaj. *BSOS* 10 (2), 417-37.
- Minorsky, V. (1948) Tamim ibn Baḥr's Journey to the Uyghurs. *BSOAS* 12 (2), 275-305.
- Minorsky, V. (1955) *Abū Dulaf Mis'ar ibn Muḥalhil's Travels in Iran (circa A. D. 950)*. Cairo.
- Minorsky, V. (tr.) (1982) *Ḥudūd al-'Ālam: The Regions of the World* (2nd ed). Cambridge.
- 水谷眞成 (譯注) (1971) 『大唐西域記』 (中國古典文學大系 22), 平凡社.
- Mohar Ali, M. (1985) *History of the Muslims of Bengal, Volume I A: Muslim Rule in Bengal*. Imam Muhammad Ibn Sa'ūd Islamic University.
- 護雅夫 (1967) 『古代トルコ民族史研究 I』, 山川出版社.

- 森安孝夫 (1977) チベット語史料中に現れる北方民族—DRU-GU と HOR—.『アジア・アフリカ言語文化研究』14, 1-48.
- 森安孝夫 (1979) 増補：ウィグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について.『アジア文化史論叢』3, 山川出版社, 201-38.
- 森安孝夫 (1984) 吐蕃の中央アジア進出.『金澤大學文學部論集 史學科篇』4, 1-85.
- Müller, F. W. K. (1913) *Ein Doppelblatt aus einem manichaischen Hymnenbuch (Maḥrnāmag)*. Berlin.
- 村上幸三 (1999) Mlecca と Turuška.『日本佛教學會年報』64, 45-60.
- 内藤みどり (1988)『西突厥史の研究』. 早稲田大學出版部.
- Nāzīm, M. (1971) *The Life and Times of Sulṭān Maḥmūd of Ghazna*. (rep.), New Delhi.
- Nikitin, A. B., (1984) Monnaies d'Arachosie du haut moyen-âge. *Studia Iranica* 13 (2), 233-9.
- Palumbo, A. (2001) La «Scrittura di Laozi che converte i barbari». Sincretismo e conflitto ideologico in un ciclo di letteratura religiosa della Cina medievale, Ph. D. Dissertation (Istituto Universitario Orientale, Napoli).
- Petech, L. (1964) Note su Kāpiśī e Zabul. *Rivista degli Studi Orientali* 39 (4), 287-94.
- Pritsak, O. (1951) Von den Karluk zu den Karachaniden. *ZDMG* 101, 270-300.
- Raverty, H. G. (tr.) (1979) *Ṭabaqāt-i Nāṣirī: A General History of the Muhammadan Dynasties of Asia*. 2 Vols., (rep.), New Delhi.
- Raverty, H. G. (1982) *Notes on Afghanistan and Baluchistan*. 2 Vols., (rep.), Quetta.
- Rehman, A. (1988) *The Last Two Dynasties of the Ṣāhis*. (rep.), New Delhi.
- Rex Smith, G. (tr.) (1994) *The History of al-Ṭabarī XIV: The Conquest of Iran*. State University of New York Press.
- Scarcia, G. (1965) Sulla religione di Zābul. *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli* 15, 119-65.
- Scarcia, G. (1966) Ancora su Znbyl. *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli* 16, 201-5.
- Scarcia, G. (1967) Zunbil or Zānbil. In: *Yād-nāme-ye Jan Rypka: Collection of Articles on Persian and Tajik Literature*, Prague, 41-5.
- Scarcia, G. & M. Taddei (1973) The Masḡid-i sangī of Larvand. *East and West* 23 (1-2), 89-108.
- Scerrato, U. (1967) A Note on Some Pre-Muslim Antiquities of Ġagatū. *East and West* 17 (1-2), 11-24.
- 庄垣内正弘 (1989) チュルク諸語.『言語學大辭典』第2卷.三省堂, 937-50.
- 白鳥庫吉 (1970)『白鳥庫吉全集第四卷 塞外民族史研究 上』.岩波書店, 549-739.
- Siddiqui, I. H. (1992) *Perso-Arabic Sources of Information on the Life and Conditions in the Sultanate of Delhi*. New Delhi.
- Sims-Williams, N. (1997) *New Light on Ancient Afghanistan*. School of Oriental and African Studies, London University.
- Sims-Williams, N. (2000) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan I*. Oxford.
- Sims-Williams, N. (2002) Ancient Afghanistan and Its Invaders: Linguistic Evidence from the Bactrian Documents and Inscriptions. In: Sims-Williams, N. (ed.), *Indo-Iranian Languages and Peoples*. Oxford, 225-42.

- Taddei, M. (1968) Tapa Sardār : First Preliminary Report. *East and West* 18 (1-2), 109-24.
- Tucci, G. (1963) Oriental Notes II : An Image of a Devi Discovered in Swat and Some Connected Problems. *East and West* 14 (3-4), 146-82.
- 内田吟風 (1965) 唐高宗敕撰西域志校録. 『研究』(神戸大學文學會) 35, 140-49.
- Verardi, G. (1977) Report on a Visit to Some Rock-cut Monasteries in the Province of Ghazni. *East and West* 27 (1-2), 3-24.
- Verardi, G. (forthcoming) *Rock-cut Buddhist Caves of Jaghuri and Qarabagh-e Ghazni, Afghanistan*.
- Wink, A. (1997) *Al-Hind: The Making of the Indo-Islamic World II: The Slave Kings and the Islamic Conquest 11th-13th Centuries*. E. J. Brill.
- 家島彦一 (1969) 『イブン・フェドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記』. 東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 吉田豊 (2002) ソグド語文書とバクトリア語文書について. (中央アジア學フォーラムにおける口頭発表)
- Yoshida, Y. (2003) Review : N. Sims-Williams, *Bactrian Documents from Northern Afghanistan I*. *Bulletin of Asia Institute* 14, 156-61.

(本稿は平成 15 年度文部科學省科學研究費補助金 (基盤研究 (C)) による成果の一部である)